

仙台市文化財調査報告書第393集

法領塚古墳 他

発掘調査報告書

法領塚古墳第2次・小鶴城跡第4次・関場遺跡
今泉遺跡第8次・荒井畑中東遺跡・大野田官衙遺跡第2次

2011年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第393集

法領塚古墳 他

発掘調査報告書

法領塚古墳第2次・小鶴城跡第4次・関場遺跡
今泉遺跡第8次・荒井畑中東遺跡・大野田官衙遺跡第2次

2011年3月

仙台市教育委員会

序 文

仙台市の文化財保護行政に対しまして、日ごろからご理解、ご協力を賜り、感謝申し上げます。

仙台市は「社の都・仙台」という愛称で広く親しまれ、四季折々の豊かな自然にあふれています。仙台の風景は、私たち市民の誇りであると同時に、将来へ守るべき大切な財産です。

本報告書には、各種開発に先立ち、平成 22 年度に発掘調査を実施した法領塚古墳、小鶴城跡、関場遺跡、今泉遺跡、荒井畑中東遺跡、大野田官衙遺跡の調査結果を収録しています。

今回の調査においても、先人の生活文化を知る上でとても貴重な歴史資料が発見されました。それらは、かつてそこで生活を営んできた人々の様子を、私たちに生き生きと語りかけてくれます。先人達の遺した貴重な文化遺産を保護し、保存活用を図りつつ未来へと継承していくことは、現代に生きる私たち市民の大切な仕事であると思います。地域が育んだ文化を語る上で、歴史や文化資源がその根底を成しているからです。

本報告書が、学術研究のみならず学校教育や生涯学習などのあらゆる場面で活用され、皆様の埋蔵文化財へのより深い関心とご理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、今回の調査や報告書の作成に際して、ご協力いただきました多くの方々に心より深く感謝申し上げます。

平成 23 年 3 月

仙台市教育委員会

教育長 青沼 一民

例 言

1. 本書は、仙台市教育委員会により、平成21年度に実施した個人住宅建設に伴う今泉遺跡・大野田官衙遺跡、平成22年度に実施した民間開発事業に伴う法領塚古墳・荒井畑中東遺跡・奥場遺跡、および平成21～22年度に実施した小鶴城跡の発掘調査報告書の合本である。個人住宅建設にかかわる調査は公費負担、また民間開発事業にかかわる調査は事業者負担により実施した。
2. 本書は、仙台市教育委員会文化財課調査調整係の担当職員の協議のもとに、廣瀬真理子氏が取りまとめ、執筆は次のように分担して行った。

第I章 法領塚古墳第2次発掘調査報告	：猪狩俊哉
第II章 小鶴城跡第4次発掘調査報告	：1～2 廣瀬、3～9 小泉博明、
第III章 奥場遺跡発掘調査報告	：廣瀬
第IV章 今泉遺跡第8次発掘調査報告	：小泉
第V章 荒井畑中東遺跡発掘調査報告	：猪狩
第VI章 大野田官衙遺跡第2次発掘調査報告	：廣瀬

遺物写真撮影は古野 信、猪狩、図版作製・編集は廣瀬が行った。
3. 遺物実測やトレース等の整理作業は、吉野と向田文化財整理収蔵室の作業員が行った。
4. 本書に関わる遺物・写真・実測図面等の資料は、仙台市教育委員会が保管している。
5. 本書で使用した土色は、「新版標準土色帖」（小山・竹原：1999）に準拠した。
6. 本書中で使用した地形図は国土地理院発行の1：25,000「仙台市東北部・東南部・西南部」の一部を使用している。
7. 断面図の標高値は海抜高度を示している。
8. 遺構は種別ごとに次の略号を用いた。

S B：掘立柱建物跡	S D：溝跡	S I：竪穴住居跡
S K：上坑	P：ピット	S X：性格不明遺構
9. 遺物の登録は、以下の分類と略号を用いた。

A：縄文土器	B：弥生土器	C：土師器（非ロクロ）	D：土師器（ロクロ）		
E：須恵器	F：丸瓦	G：平瓦	I：陶器	J：磁器	K：石器・石製品
L：木製品・杭材	N：金属製品	P：土製品			
10. 土師器実測図における網かけは、黒色処理されていることを示している。
11. 遺物観察表のカッコ内の法量のうち、器高は残存値を、また口径および底径は復元値を示している。
12. 本文中の「灰白色火山灰」（庄子・山田1980）は、これまでの仙台市域の調査報告や東北地方中北部の降下火山灰の研究から、「十和田a火山灰（To-a）」と考えられている。降下年代は現在、西暦915年とされており、本書もこれに従う。

庄子貞雄・山田一郎1980「宮城県北部に分布する灰白色火山灰について」『多賀城一昭和54年度発掘調査概報』宮城県多賀城跡調査研究所
仙台市教育委員会2000『沼向遺跡第1～3次発掘調査』仙台市文化財調査報告書第241集
小口雅史2003「古代北東北の広域テフラをめぐる諸問題—十和田aと白頭山（長白頭）を中心に—」『日本律令制の展開』吉川弘文館

目 次

序 文 例 言 目 次

I 法領塚古墳第2次発掘調査報告

1 調査要項	1
2 調査に至る経緯と調査方法	1
3 遺跡の位置と環境	2
4 基本層序	3
5 発見遺構と出土遺物	6
6 まとめ	10

II 小鶴城跡第4次発掘調査報告

1 調査要項	20
2 調査に至る経緯と経過	20
3 遺跡の位置と環境	23
4 基本層序	25
5 A区の調査	25
6 B区の調査	47
7 C区の調査	49
8 D区の調査	53
9 まとめ	54

III 関場遺跡発掘調査報告

1 調査要項	64
2 調査に至る経緯と調査方法	64
3 遺跡の位置と環境	65
4 基本層序	65
5 発見遺構と出土遺物	65
6 まとめ	66

IV 今泉遺跡第8次発掘調査報告

1 調査要項	69
2 調査に至る経過と調査方法	69
3 遺跡の位置と環境	69
4 基本層序	70
5 発見遺構と出土遺物	70
6 SK2 近世墓出土竹製煙管筒について	75
7 まとめ	75

V	荒井畑中東遺跡発掘調査報告	
1	調査要項	78
2	調査に至る経過と調査方法	78
3	遺跡の位置と環境	79
4	基本層序	79
5	発見遺構と出土遺物	79
6	まとめ	86
VI	大野出官衙遺跡第2次発掘調査報告	
1	調査要項	89
2	調査に至る経過と調査方法	89
3	遺跡の位置と環境	89
4	基本層序	90
5	発見遺構と出土遺物	90
6	まとめ	93

I 法領塚古墳第2次発掘調査報告

1 調査要項

遺 跡 名	法領塚古墳(宮城県道跡登録番号01007)
調 査 地 点	仙台市若林区一本杉町1番2号他
調 査 期 間	試掘調査：平成22年8月17日～8月27日 本発掘調査：平成22年10月12日～11月12日
調査対象面積	1,880.43㎡
調 査 面 積	約504㎡
調 査 原 因	学校校舎新築工事
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係
担 当 職 員	試掘調査：主事 猪狩俊哉 文化財教諭 古野 信 本発掘調査：主査 荒井 格 主事 猪狩俊哉
調 査 協 力	学校法人聖ウルスラ学院

2 調査に至る経過と調査方法

調査は、平成22年7月26日付で、申請者より提出された「埋蔵文化財の取り扱いについて(協議)」(平成22年8月6日付H22教生文第116-22号で回答)に対して、文化財保護法第93条に基づき試掘調査を平成22年8月17日～27日に実施した。調査区は、墳丘西側に幅3.0m×長さ26.4mのトレンチを設定し(以下、試掘西トレンチとする)、墳丘南側には幅2.0m×長さ7.4mの東西方向のトレンチの西端に幅2.6m×長さ12.0mの南北のトレンチが接続するL字形の調査区(以下、試掘南トレンチとする。)を設定した。調査の結果、試掘西トレンチでは、土層断面で墳端部と考えられる箇所と墳丘積土の一部が確認された。また、試掘南トレンチでは、石室の前方(南側)で通路状の空間が確認され、須恵器の破片がまとまって出土した。この結果から、法領塚古墳の墳丘がこれまで推定されていた範囲よりも広がる事が判明したため、申請者と保存に係る協議を行い、校舎建築工事範囲の本発掘調査を実施することとなった。

本発掘調査区は、排土置き場を確保する必要から、試掘調査により推定された墳端部が確認できる必要最小限の範囲で設定し、さらに校舎建築工事範囲内において、周溝の有無を確認するため、墳丘の中心部から南西方向に幅2.9m×長さ18.7mのトレンチを設定した。

石室前方(墳丘の南側)の一部は校舎建築工事の範囲外にあたるが、試掘調査で検出した通路状の空間を明らかにする必要性と、校舎建築後の調査が困難になることが予想されたため、申請者と協議を行った結果、国庫補助事業として調査を実施することとなった。なお、国庫補助事業調査は、調査面積は約160㎡で、平成22年10月18日～11月20日に実施された(仙台市教委2011)。

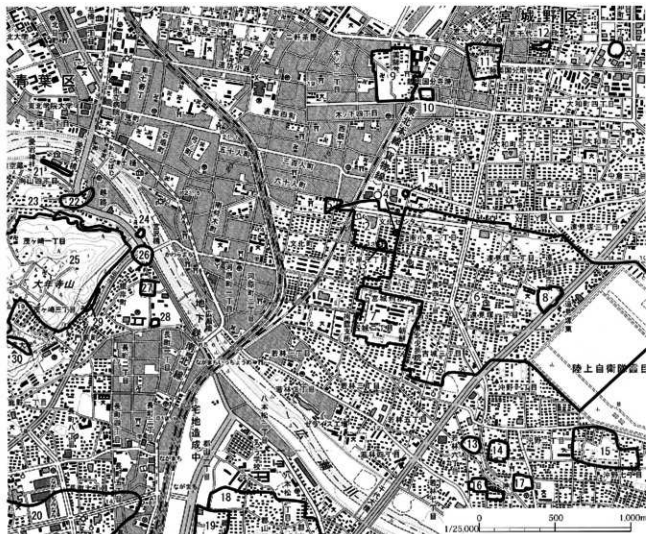
本発掘調査は、盛土および口耕作上、近・現代と考えられる堆積土(擾乱層)、S×2性格不明道構の堆積土1層を重機によって除去した後、人力により遺構検出作業を行った。その結果、積上が施された墳丘部と墳端部、および石室前方で前庭部が確認された。調査中、適宜断面図を作製し、デジタルカメラおよびフィルムカメラ(カラーリバーサル・白黒)で記録写真を撮影した。調査区内および周辺の平面図は、測量業者が光波測距機で測量・作製した図を基に、調査区内で手実測により作製した微細平面図と、昭和45年(1970)年の調査(以下、第1次調査とする)で作製された墳丘部平面図を合成して作製した。合成にあたっては、第1次調査図面と今回作製した図面に共通の測点がないため、聖ウルスラ学院敷地と北側および東側の道路との境界線の位置を基準とした。

なお、試掘調査と本発掘調査の成果によって、これまで推定されていた範囲よりも法領塚古墳の範囲が広がる事が判明したため、法領塚古墳の遺跡範囲を訂正(拡大)している(H22教生文第747号で宮城県教育委員会に通知)。

3 遺跡の位置と環境

法領塚古墳は、JR仙台駅の南東約2.5kmに位置し、学校法人聖ウルスラ学院英智中学校・高等学校の敷地内北東隅に所在している。本古墳周辺の土地は、かつて伊達家家臣の屋敷地であったが、明治初年に伊達屋敷に転じ、その後、昭和29年に聖ウルスラ学院の所有となり、校舎が建築されることとなった。校舎建築に伴って、法領塚古墳は破壊の危機を迎えたが、当時の聖ウルスラ学院校長の理解により破壊を免れ、現在に至っている。

法領塚古墳は、その西側を南流する広瀬川左岸に形成された標高約12mの自然堤防上に立地している。周辺の古墳時代から古代にかけての遺跡としては、南東に南小泉遺跡が広がっており、北方約700mには陸奥国分寺跡がある。南東約1.2kmには遠見塚古墳、南に蛇塚古墳・猫塚古墳・若林城内古墳（若林城跡）がある。さらに広瀬川を越えた南方約2.5kmには郡山遺跡が位置している。西方約2kmの広瀬川南岸の丘陵の斜面には、大年寺山横穴墓群・愛宕山



番号	遺跡名	種別	古墳	時代	番号	遺跡名	種別	古墳	時代
1	法領塚古墳	円墳	自然堤防	古墳	15	野井古遺跡	古墳	古墳	古墳
2	野井古遺跡	集落跡・屋敷跡・伝書地	自然堤防	縄文・古墳・平安・室町	17	千代内遺跡	古墳	古墳	古墳
3	野井古心礎	円形	自然堤防	古墳	18	郡山遺跡	古墳	古墳	古墳
4	野井古心礎	円形	自然堤防	古墳	19	野井古遺跡	古墳	古墳	古墳
5	野井古心礎	集落跡	自然堤防	古墳	20	野井古遺跡	古墳	古墳	古墳
6	野井古心礎	集落跡	自然堤防	古墳	21	野井古遺跡	古墳	古墳	古墳
7	若林城跡	円形・集落跡・城跡	自然堤防	古墳	22	野井古遺跡	古墳	古墳	古墳
8	遠見塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳	23	野井古遺跡	古墳	古墳	古墳
9	遠見塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳	24	野井古遺跡	古墳	古墳	古墳
10	遠見塚古遺跡	前方後円墳	自然堤防	古墳	25	野井古遺跡	古墳	古墳	古墳
11	野井古心礎	前方後円墳	自然堤防	古墳	26	野井古遺跡	古墳	古墳	古墳
12	志保遺跡	前方後円墳	自然堤防	古墳	27	野井古遺跡	古墳	古墳	古墳
13	野井古遺跡	前方後円墳	自然堤防	古墳	28	野井古遺跡	古墳	古墳	古墳
14	野井古遺跡	前方後円墳	自然堤防	古墳	29	野井古遺跡	古墳	古墳	古墳
15	野井古遺跡	前方後円墳	自然堤防	古墳	30	野井古遺跡	古墳	古墳	古墳

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

横穴墓群・宗禪寺横穴墓群・茂ヶ崎横穴墓群・二ツ沢横穴墓群が分布している（向山横穴墓群と総称されている）。

法領塚古墳は、昭和45（1970）年に、石室の一部で崩壊の危険性が出始めていたため、修復および補強の必要に伴い、石室の実態把握を目的とした調査（第1次調査）が行われている（仙台市教委1972）。なお、翌昭和46年には石室の補強工事として、側壁の裏側にコンクリートが注入されている。

以下、第1次調査によって得られた成果を列記する。

①墳丘は推定直径約32m、高さ約6mで、周溝をもつ円墳である。墳丘西側の削平が著しい。

②主体部の横穴式石室は、両袖式で玄室（長さ約5.7m、高さ約1.9m）、玄門、前庭によって構成される。

③玄室の奥壁、玄門、天井部には巨石が用いられ、床面の奥半分には厚さ約20cmの凝灰岩の切り石が敷設されている。床面前半分には拳大の円礫が敷かれている。

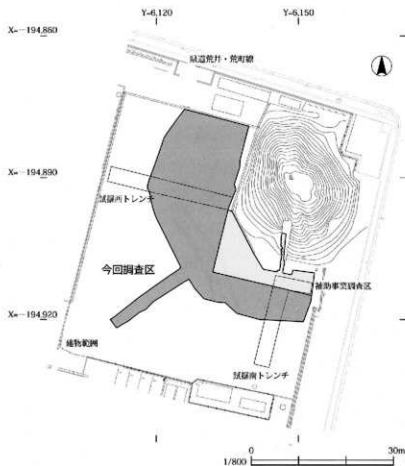
④玄門の前方は、天井石が用いられていないため、羨道部ではなく、前庭施設と理解される。両側壁の積み石は玄門前の装飾的效果を目的としたものと考えられる。

⑤玄室両側壁の裏側には、玉石が裏積み石として用いられている。しかし、前庭の側壁には裏積み石は使用されていない（石室の補強工事の際に確認）。

⑥玄室最前部の天井石が取り外されて盗掘が行われており、加えて西壁中央の上半部からの再三にわたる盗掘により玄室内部はかなりの攪乱を受け、床面近くまで古墳時代以降の遺物が混入していた。

⑦出土遺物は、銅鏡、鉄製品（直刀・鎌?等）、鉄製馬具（轡）、コハク玉片、土師器（内面黒色処理の杯、底部に糸切り痕のある杯など）、須恵器（壺・長頸壺）、布目瓦、寛永通宝銭である。

⑧築造年代は、出土遺物や石室の形態から、7世紀初頭前後頃と推測されるが、群馬県の古墳編年にあてはめると7世紀中葉前後まで下降する可能性もある。



第2図 調査区配置図

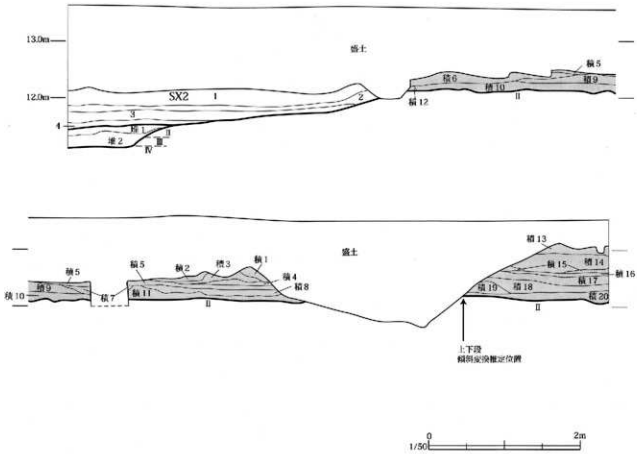
4 基本層序

基本層は、4層確認された。I層はにぶい黄褐色の砂質シルトで、盛土以前の現代の耕作土と考えられる。II層は黄褐色のシルト質粘土で、層厚は70～80cmである。褐色の粘土層を互層状に含んでいる。III層は暗褐色～黒褐色の粘土質シルトで、層厚は約30cmである。全体的に直径10cm以下の礫を含んでいる。IV層は暗褐色～黒褐色の砂質シルトで、部分的に褐色を呈する。大小の礫を極めて多量に含んでいる。なお、現地表面から墳丘積土までの間には、数次に亘る盛土および攪乱土層が確認されたが、一括して「盛土」と表記した。盛土の層厚は30～110cmである。

なお、以上の基本層序は、補助事業調査区と共通させている。



第3図 遺構配置図



遺構・層位	寸法・位置	しほり	材質	備考
本墓	1 109K3/1 土に、黄褐色砂質シルト			黄褐色砂少量、マンガン粒や多量、大小の礫を含む。現代の耕作土か。
	2 109K3/2 黄褐色シルト			109K4/4 粘土層を伴った層位に含む。
	3 109K3/3 黄褐色土質シルト			1.5m程度の厚さ。礫が100K4/4に相当するブロック少量、小礫(φ2~10cm)の中多量。
	4 109K3/4 黄褐色シルト			大小の礫を多量に含む。礫の多い層位の(砂)層がある。
墳土	1 109K4/1 黄褐色シルト	あり	あり	黄鉄ブロック(φ100cm)散見。
	2 109K4/2 土に、黄褐色シルト	あり	中々あり	黄鉄土塊、黄鉄ブロック(φ10cm)含む。一部グライ化。
	3 109K4/3 土に、黄褐色シルト	あり	中々あり	黄鉄土塊、黄鉄ブロック(φ30~50cm)含む。一部グライ化。
	4 109K3/2 黄褐色シルト	あり	僅	黄鉄土塊。
	5 109K3/3 黄褐色シルト	あり	あり	黄鉄土塊、二次タラシ化、下部礫性。
	6 109K3/4 土に、黄褐色シルト	あり	あり	黄鉄土塊、黄鉄ブロック(φ10~70cm)含む。
	7 109K4/1 黄褐色シルト	あり	あり	黄鉄ブロック(φ5~30cm)含む。
	8 109K3/1 土に、黄褐色シルト	あり	あり	黄鉄土塊、黄鉄ブロック(φ20~30cm)含む。
	9 109K3/2 黄褐色シルト	あり	あり	黄鉄土塊、黄鉄ブロック(φ10cm)散見を含む。黄褐色砂層位を含む。
	10 109K4/2 黄褐色シルト	あり	あり	黄鉄ブロック(φ10~20cm)含む。
	11 2.5786/2 黄褐色シルト	あり	中々あり	黄鉄ブロック(φ10cm)含む。
	12 2.5786/2 黄褐色シルト	あり	中々あり	黄鉄ブロック(φ10cm)含む。
	13 7.5729/4 土に、黄褐色シルト	あり	中々あり	黄鉄土塊、黄鉄ブロック(φ10~70cm)含む。
	14 7.5729/5 土に、黄褐色シルト	あり	中々あり	黄鉄土塊、黄鉄ブロック(φ10~20cm)含む。
	15 109K3/4 土に、黄褐色シルト	あり	中々あり	黄鉄土塊、黄鉄ブロック(φ10~50cm)多量に含む。
	16 109K3/4 土に、黄褐色シルト	あり	中々あり	黄鉄土塊、黄鉄ブロック(φ10cm)散見を含む。
墳内	17 2.5786/2 黄褐色シルト	あり	あり	黄鉄ブロック(φ20~30cm)散見を含む。
	18 109K3/4 土に、黄褐色シルト	あり	中々あり	黄鉄土塊、黄褐色土質シルトブロック(φ20~30cm)散見を含む。
	19 109K3/2 黄褐色シルト	あり	あり	黄鉄土塊、黄鉄ブロック(φ50cm)含む。
	20 7.5729/4 黄褐色土質シルト	あり	あり	黄鉄ブロック(φ10cm)、黄褐色砂層位を含む。
墳外	1 109K3/3 黄褐色シルト	あり	中々あり	塊(φ30~50cm)含む。
	2 109K3/4 黄褐色シルト	あり	あり	塊(φ30~100cm)含む。下部に黄褐色土にさらす含む。
SX2	1 5185/2 土質シルト	あり	中々あり	グライ化。礫(φ30~50cm)含む。
	2 109K4/1 黄褐色シルト	あり	中々あり	黄褐色砂層位。
	3 7.5729/4 黄褐色土質シルト	あり	あり	白色砂・黄褐色砂・礫(φ10cm)含む。
	4 109K3/3 黄褐色シルト	あり	中々あり	

第4図 調査区北壁断面図

5 発見遺構と出土遺物

今回の調査では、法領塚古墳の墳丘部が、従来理解されていた墳丘の外側に、より広い範囲で広がることが確認された。墳丘以外では、古墳築造後の遺構として、国庫補助事業調査区で検出された遺構も含めると、溝跡2条、性格不明遺構1基、ピット4基を検出した。なお、S D 1 溝跡は前庭部底面で検出されたため前庭部の項目で詳述する。S X 1 性格不明遺構は、精査の結果、後世の攪乱であることが確認されたため、本遺構番号は欠番となっている。

以下、古墳、性格不明遺構、溝跡の順に記述する。ピットは、いずれも古墳築造後に掘り込まれたものであるが、上層観察用のセクション断面で検出されたものが多く、有意な配列を示すものではない。

(1) 古墳

① 墳丘の規模

今回の調査では、後世の攪乱によって部分的に失われているものの、本来の墳丘範囲を推定しうる墳丘面および墳端部が確認された。

調査区内で確認された墳裾部（墳端部下端の傾斜変換線）から、墳丘の直径は約55mと推定される。

検出された墳端部の上端と下端の比高差は、西側で20～25cm、南西側で35～55cm、南側で15～20cmである。ただし、この比高差は後世の影響（西・南西側はS X 2 性格不明遺構による削平。南側は東西方向の旧建物による攪乱）を受けて残存する値であって、本来の墳端部の高さを示すものではない。

墳丘の高さ（墳頂部と墳裾部の比高差）は、西側で約6.1m、南西側で約5.5m、南側（石室の前方）で約6.1mである。墳裾部の標高は南西側が最も高く、西側および南側に向かって徐々に低くなっている。なお、第1次調査では、墳頂部と羨道部底面（第1次調査時は「前庭部」と）の比高差から、墳丘高は約6.0mとされている。

墳丘斜面の傾斜角度は、西側で約30度、南西側で20～40度、南側で約30度である。また前庭部西側壁と墳端部の接する付近の傾斜角度は10～15度で、他の位置に比べると緩やかな傾斜角度である。

従来理解されていた墳丘の「段低い外側で、さらに墳丘積土が確認されたことから、本古墳は上段と下段からなる二段築成の墳丘をもつ円墳であると考えられる。ただし、今回の調査区内では、上段と下段の境界にあたる部分（傾斜変換点）が明確には確認されなかった。

② 墳丘の築造

法領塚古墳は、基本層Ⅱ・Ⅲ層を削り出して墳丘部を形成し、墳丘部に積土を施すことで築造されている。墳裾部はおおむね、多量の礫を含んだ基本層Ⅳ層の上面である。また、基本層Ⅱ層の直上に積土が施されていることから、少なくとも今回の調査区内の範囲においては、古墳築造時の生活面であった当時の表土を除去して整地した後、積土を施して墳丘を築造したものと考えられる。

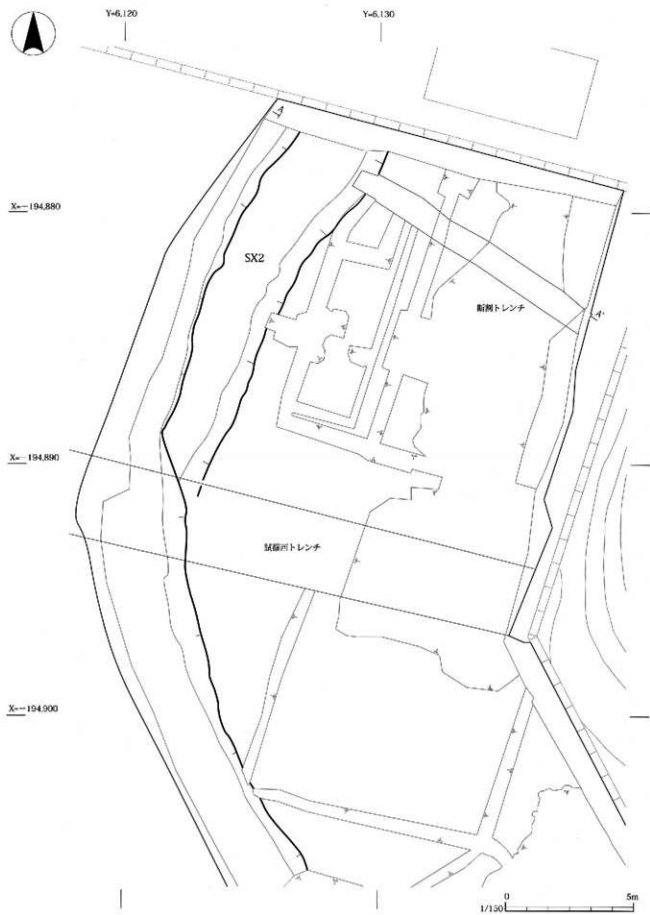
積土は、西側と南側で部分的に失われているものの、墳丘部の広い範囲で確認することができた。確認された積土の厚さは、西側で20～50cm、前庭部東側で約20cmである。調査区西側の従来考えられていた墳丘寄りでの積土の厚さは最大約75cmであるが、墳丘の上段部分の範囲内に含まれる箇所と推定される。

墳丘部西側で実施した墳丘断ち割りにより計20層の積土層を確認した。積土は、基本層Ⅱ層を起源とする黄褐色シルト質粘土を母材とする層と、基本層Ⅲ層を起源とする黒褐色～暗褐色粘土質シルトを母材とした層に大別でき、層厚10cm前後で互層状に堆積している。調査区北壁の土層断面観察では、墳端側の積土が水平に堆積しているのに対して、墳丘中央側は上段頭状の小さなマウンドを造りながら積まれていることが確認された。

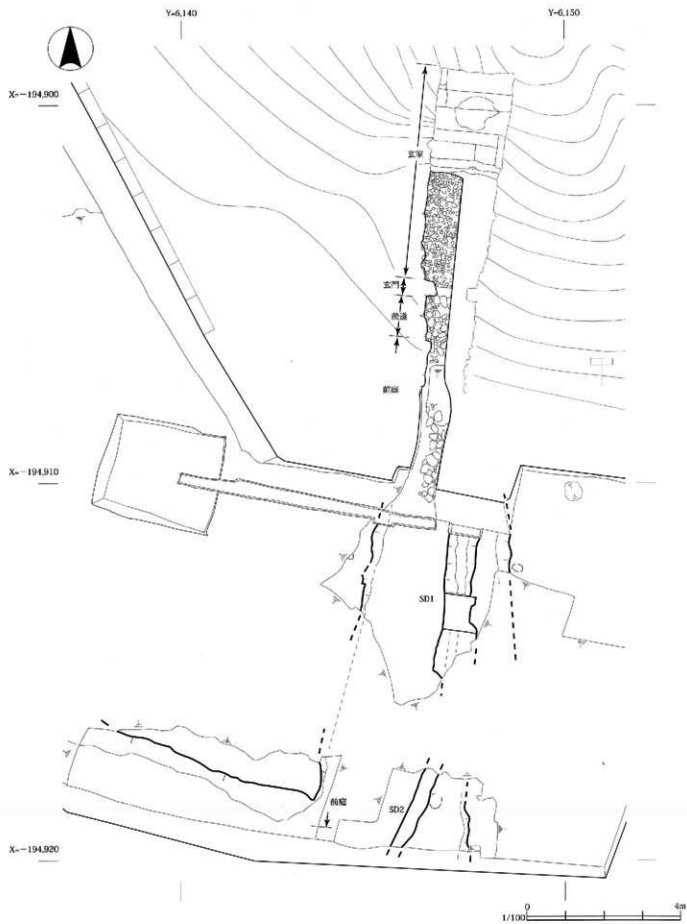
③ 周溝

今回の調査では周溝の存在は明らかにできなかった。調査区北壁で確認した墳端部外の堆積土は、1層の黒褐色シルトと2層の暗褐色シルト質粘土に分けられ、ともに直径3cm以上の礫を含んでいる。2層下位には基本層Ⅱ層の崩落土と考えられる黄褐色シルト質粘土を小ブロック状にまばらに含んでいることが確認された。また、1層と2層の間では灰白色火山灰の堆積が部分的に確認できた。1・2層から遺物は出土していない。

第1次調査で検出された、石室前方の「周溝の内側端」は、今回の調査の結果、羨道部と前庭部の境界であるこ



第5図 平面図1 (墳丘西側)



第6図 平面図2 (石室・前庭部)

とが判明した。第1次調査では、一段低い前底部の落ち込みを肩溝と理解した結果と考えられる。

墳丘の外側において周溝外縁の存在の有無を確認するため、南西方向のトレンチ調査を実施したが、肩溝と考えられるような掘り込みや周溝の外縁部は検出されなかった。西方向および南方向の試掘トレンチでも同様の結果であったことから、法領塚古墳は墳丘の外側に明瞭な周溝をもたないか、きわめて浅い周溝のため、後世の擾乱などにより周溝外縁部が失われたものと推定される。ただし、墳裾部の掘削の大部分が礫を多量に含む基本層Ⅳ層の上面で止まっていることから、墳丘築造に必要な上量を確保するために広い範囲の掘削が必要となり、今回の調査区外まで掘削範囲が広がっている可能性も考えられる。

④前底部

南側に開口する横穴式石室の前方で、通路状の空間が確認された。第1次調査では、埋葬施設の構成を、奥から「玄室」、「玄門」、「前庭」としていたが、今回の調査によって確認された通路状の空間が前底部と判断されることから、第1次調査の「前庭」は羨道部と理解され、大井石が失われているものと考えられる。すなわち、法領塚古墳の埋葬施設は、奥から、玄室（長さ約5.7m）、玄門（長さ約0.4m）、羨道部（長さ約1.7m）、前底部（長さ約13.0m）によって構成され、墳頂部に至る。なお、前底部は、国庫補助事業調査区と本調査区にまたがっているが、国庫補助事業調査区の調査成果も合わせて記述する。

前底部は、一部、後世の擾乱により失われていたが、羨道部との境界から墳丘端部までの長さは約13.0m、下端幅は計測可能な位置で2.8～3.0mである。石室側の東側壁は良好に残存しており、その東側壁頂部と前底部底面との比高差は約0.9mである。西側壁は大半が擾乱により失われているものの、部分的に側壁下端が残存しており、墳頂部までの傾斜変換線の復元が可能であった。東側壁の墳頂部側の約2分の1も擾乱により失われているが、石室の南北中軸線を基に、東側壁を線対称の位置に推定復元すると、両側壁は墳頂部に向かってやや開き気味になっており、墳頂部での両側壁下端間の幅は、約4.8mと推定される。底面は羨道部より一段低く造られており、基本層を掘り込んだ後、基本層Ⅱ～Ⅳ層を母材とした上層で貼床状に仕上げられている。羨道部との比高差は約20cmであり、石室側から墳頂部に向かって緩やかに傾斜している。側壁は、基本層Ⅱ・Ⅲ層を急角度に掘り込み、その壁面に沿って底面と同様の土壌を板築状に積み上げて形成されている。

前底部底面の中央東寄りで前底部の延びる方向に溝跡が1条検出された（SD1溝跡）。断面形はU字形を呈し、幅70～90cm、深さ10～15cmで、底面は墳頂部に向かって徐々に低下している。堆積土中から直径20～30cmの礫が出土している。前底部底面に敷設された排水溝と考えられる。

⑤出土遺物

遺物は前底部の底面付近の堆積上から出土しており、石室側に偏っている。須恵器が多く、完形のものもみられるが、大半は破片である。器種は、甕・横瓶・長頸瓶・平瓶・フラスコ形長頸瓶・提瓶・壺などである。土師器もわずかに出土しており、杯・甕がみられる。また、馬具の一部と考えられる鉄製品も出土している。出土遺物の年代は、6世紀末葉から7世紀初頭が比較的多く、8世紀前葉のものもみられる。須恵器や土師器とともに、石室側では直径20～30cmの礫が多く出土している。なお、各遺物に関わる詳細な記述や実測図については、仙台市文化財調査報告書第394集（仙台市教委2011）を参照された。

以上のように、須恵器、土師器、鉄製品や、直径20～30cmの多数の礫が前底部から出土しているが、石室内から動いたものか、あるいは墓前祭祀によるものの両者の可能性が考えられるため、出土状況から検討を加えたい。

多数の礫は、集中して出土しているものの一定の配置を示すものではなく、また排水溝と考えられるSD1溝跡にまで分布していることから、前底部に敷設された構築材ではなく、石室（羨道部を含む）の構築材の一部か、石室を閉塞していたものが盗掘を含む何らかの理由により崩壊して集積したものである可能性が高い。須恵器や土師器もある程度偏った分布状況であるが、原位置を留めない礫とともに出土していることから、玄室から動かされたものと考えられる。

(2) 性格不明遺構

S X 2 性格不明遺構は、法領塚古墳の西側から南西側の墳丘部を削平して、南北方向に延びる遺構で、規模は南北約 22 m 以上、東西 5 m 以上、深さ約 0.3 m である。堆積土 1 層はややグライ化した灰褐色～灰黄褐色シルト質粘土で、下部には酸化鉄集積層（2 層）が形成されており、水田上壤と考えられる。3 層は暗褐色粘土質シルト層で、4 層は暗褐色シルト層である。堆積土中から須恵器製の体部片等が出土しているが、出土位置にまとまりはない。

(3) 溝跡

S D 1 溝跡は、前述のように、法領塚古墳の前庭部の底面から検出された、古墳付風施設の排水溝と考えられる溝跡である。

S D 2 溝跡は、石室の南側で検出された南北方向に延びる溝跡で、法領塚古墳の墳裾部に堆積する土層を掘りこんでおり、古墳より新しい。幅約 0.8 m、深さ約 0.4 m の溝跡で、調査区内の検出長は 2.3 m であるが、さらに調査区外の南側まで延びるものと推定される。積土は 5 層に分層でき、黒色～黒褐色のシルト質粘土および粘土である。堆積土中より須恵器片と土師器片が出土している。

6 まとめ

今回の調査は、従来理解されていた法領塚古墳の西側から南側の隣接地において実施したものである。調査の結果以下のことが明らかになった。

- ① 直径約 55 m の円墳であり、古墳時代終末期においては、東北地方で最大の規模であることが判明した。
- ② 墳丘は、上段と下段からなる二段築成と推定される。墳裾部より約 1 m 上位までは基本層を削り取って整地し、墳頂部までの垂直高約 5 m 分は基本層を母材とした積土を盛り上げて墳丘が築造されている。
- ③ 今回の調査区内では周溝外縁部は確認できなかった。墳丘の外側に明瞭な周溝をもたないか、きわめて浅い周溝のため、後世の擾乱などにより周溝外縁部が欠われたものと推定される。ただし、墳裾部の掘削が礫を多量に含む基本層の上面で止まっていることから、墳丘築造に必要な土量を確認するため、今回の調査区外まで掘削範囲が広がっている可能性も考えられる。
- ④ 横穴式石室の前方には前庭部が接続している。前庭部の長さは約 13 m で、墳端部へ向かってわずかに開いており、幅は 3.5～4.8 m（墳端部推定幅）である。前庭部の底面には幅 40～70 cm の排水溝が設けられている。
- ⑤ 埋葬施設は、奥から、玄室、玄門、羨道部、前庭部によって構成される。
- ⑥ 前庭部の羨道部寄りで、須恵器（甕・横瓶・フラスコ型長頸瓶・提瓶・壺）、土師器（環・甕）、鉄製品（馬具など）が出土した。石室内から動かされたものと考えられる。出土遺物の時期は、おおむね 7 世紀前半代である。
- ⑦ 前庭部から出土した須恵器や土師器の所属時期は、推定される古墳の築造時期と異なるものではない。

今回の調査によって、法領塚古墳は、古墳時代終末期の東北地方において、傑出した規模の古墳であることが明らかになった。横穴墓が一般的な墓制となっていた時期において、大規模な墳丘の造営はその造営主のもつ権力の大きさを示すものであり、法領塚古墳は、古墳時代終末期における仙台平野の首長墓と考えられる。

なお、今回の調査区内においては、墳丘の段築を示す傾斜変換線を確認できなかった。比較的良好に残存している墳丘東側で段築を示す傾斜変換線が検出できる可能性があるが、今後の課題である。

引用・参考文献

- 仙台市教育委員会 1972 『仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書』仙台市文化財調査報告書第 5 集
 仙台市教育委員会 2011 『郡山遺跡 31』仙台市文化財調査報告書第 394 集
 田中剛和 1987 「善心寺横穴墓群、法領塚古墳出土鉄・銅製品整理報告」『仙台市博物館調査研究報告』第 7 号



1 調査区全景（南西から）



2 調査区全景（南東から）



3 西側墳端部検出状況①(南から)



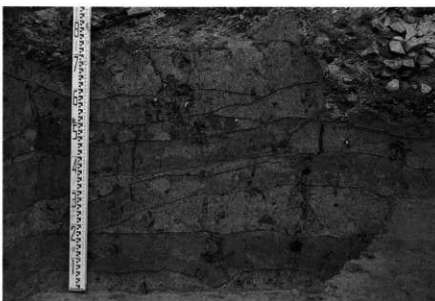
4 西側墳端部検出状況②(北から)



5 西側墳端部土層堆積状況
(南から)



6 北壁土層断面 (南西から)



7 東壁土層断面・積土 (西から)



8 北壁土層断面・積土 (南から)

写真図版 3



9 北壁土層断面 (南東から)



10 北壁土層断面・積土 (南から)



11 北壁土層断面・積土 (南西から)

12 南西側墳裾完掘状況(西から)



13 前庭部墳裾部完掘状況(西から)



14 前庭部墳裾部完掘状況
(南東から)





15 前庭部検出状況（南から）



16 SD1 溝跡（排水溝）検出状況
（南から）



17 前庭部遺物出土状況（東から）

18 前庭部東西ベルト土層断面
(南から)



19 前庭部東西ベルト断面
分割東側 (南から)



20 前庭部東西ベルト断面
分割西側 (南から)



写真図版 7



21 前庭部遺物出土状況（南から）



22 玄室床面検出状況（南東から）



23 玄門・羨道底面検出状況
（南東から）

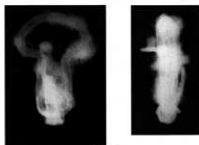
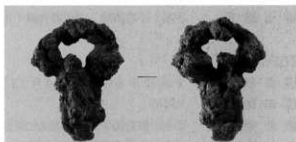
写真図版 8



前庭部出土 須恵器



前庭部 土師器・坏



馬具



前庭部 須恵器・横瓶



不明鉄製品

II 小鶴城跡第4次発掘調査報告

1 調査要項

遺跡名	小鶴城跡（宮城県遺跡登録番号01194）
調査地点	仙台市宮城野区新田三丁目37-2、38、44-1、44-3、45-1、45-2
調査対象面積	5,633㎡
調査原因	宅地造成工事
調査主体	仙台市教育委員会

【A区】

調査期間	平成21年7月13日～9月18日
調査面積	650㎡
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担当職員	主査：主濱光樹 主事：森田諒史 臨時職員：千葉恭彦

【B区】

調査期間	平成22年1月18日～1月25日
調査面積	190㎡
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担当職員	主事：小泉博明 文化財教諭：吉野 信

【C区】

調査期間	平成22年4月13日～4月23日
調査面積	150㎡
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係
担当職員	主事：廣瀬真理子 文化財教諭：鈴木健弘

【D区】

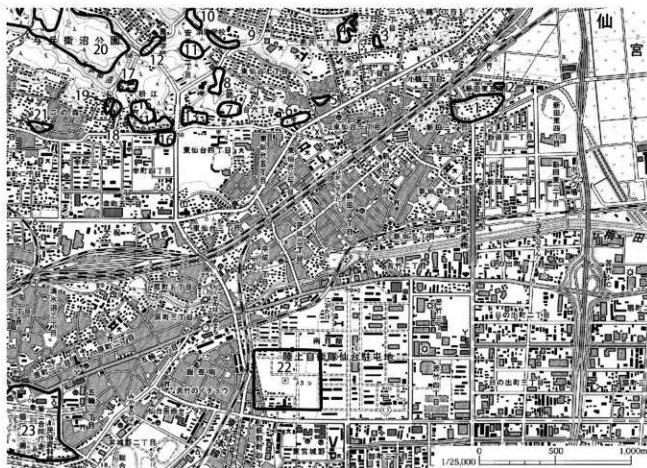
調査期間	平成22年3月3日
調査面積	8㎡
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担当職員	主査：斎野裕彦 文化財教諭：吉野 信

2 調査に至る経緯と経過

今回の調査は、宅地造成に伴う本発掘調査である。小鶴城跡の範囲内の西部が対象で、「殿上山」と呼ばれる城の頂部（主郭）部分と、城を外周する堀の部分（崖下部）の約5,633㎡を対象としている。

平成21年3月25日付で、申請者から「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」（H21教文字第183-32号）が提出された。それを受け、確認調査を実施すること、および遺構が発見された場合、改めて本発掘調査を行う必要がある旨を回答し、協議を実施したところ、申請者の同意を得られたことから、確認調査を実施した。

確認調査は、平成21年5月18日から29日に、丘陵頂部に4箇所、崖下部に2箇所のトレンチを設定して行った。丘陵頂部では、溝跡、土坑、ピットが、崖下部では溝跡がそれぞれ検出された。殿上山部では、部分的に後世の削平



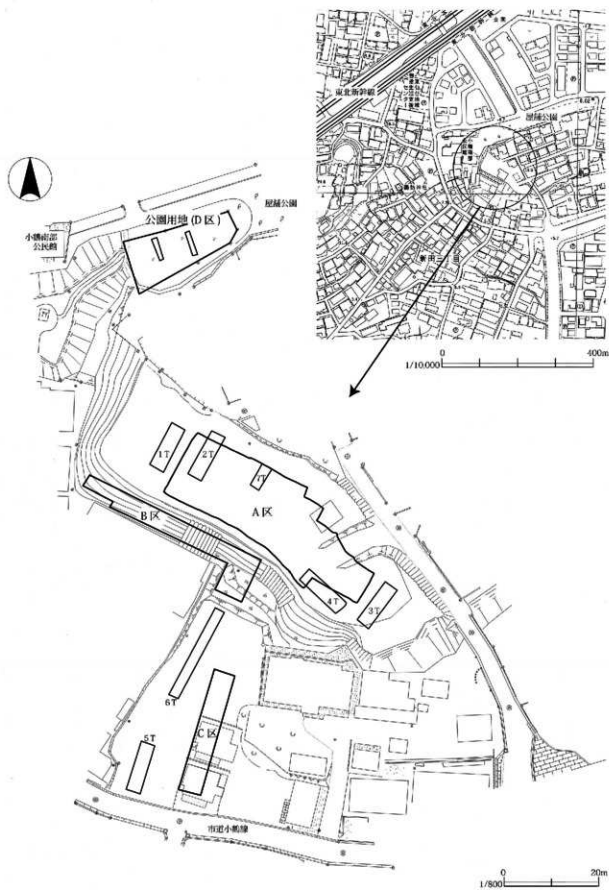
№	遺跡名	種類	方位	時代	№	遺跡名	種類	方位	時代
1	小鶴城跡	城跡跡	西壁	中世	13	小鶴城跡石垣跡	石垣	石垣跡	古代
2	小鶴遺跡	溝・石垣	自然埋没	平安	14	神明社遺跡	土壇	石垣跡	古代
3	安藤寺遺跡(堀跡)	堀跡	石垣跡	古墳	15	神明社遺跡	礎石	石垣跡	古代
4	安藤寺遺跡(堀跡)	堀跡	石垣跡	古墳	16	神明社前庭礎石遺跡	土壇	石垣跡	古代
5	安藤寺遺跡(堀跡)	堀跡	石垣跡	古墳・奈良	17	新江遺跡	土壇	石垣跡	古代
6	大塚寺遺跡	土壇	石垣跡	古墳・奈良	18	二の宮遺跡	土壇	石垣跡	平安
7	二の宮遺跡	土壇	石垣跡	古代	19	二の宮遺跡	礎石	石垣跡	平安
8	安藤寺下土壇跡	土壇	石垣跡	古代	20	牛久保遺跡	土壇	石垣跡	古代・室町
9	安藤寺下土壇跡	土壇	石垣跡	平安	21	唐中庭遺跡	土壇	石垣跡	奈良
10	安藤寺下土壇跡	土壇	石垣跡	古代	22	南山遺跡	礎石	石垣跡	中世
11	安藤寺下土壇跡	土壇	石垣跡	平安	23	田分堀遺跡	礎石	石垣跡	中世
12	安藤寺下土壇跡	土壇	石垣跡	古代					

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

を受けているものの、柱痕跡の確認できる柱穴が検出され、掘立柱建物跡の存在が想定された。また、崖下部で検出された溝跡は、堀跡の可能性が高いと判断された。

確認調査終了後、再度申請者等と協議を行い、平成21年6月26日付で「埋蔵文化財発掘の届出について」(H21教生文第152-44号)が提出された。その結果、対象地については宅地および道路部分(A区)を、崖下部については道路建設部分(C区)を対象に本発掘調査を行うこと、また、掘削深度が浅く遺構面まで達しないと考えられる側溝設置箇所については工事立会いで対応すること、とした。また、殿上山部については契約締結後、崖下部については既存建物の解体後に、本発掘調査を実施する旨の承諾を得た。これを受けて、平成21年7月13日付で小鶴城跡第4次発掘調査の受託契約を締結し、A区については平成21年7月13日から、崖下部の擁壁設置箇所(B区)については平成22年1月18日から、C区については平成22年4月12日から、それぞれ本発掘調査を実施した。また、開発対象区域のうち、屋敷公園に隣接する地点については、一部、公園用地として整備されることから、文化財課と宮城野区街並み形成課と協議が行われ、隣地内の地表層に遺構(土塁・堀跡)の保存を前提に、平成22年3月3日に確認調査を行った(D区)。

本発掘調査は、A区は平成21年9月18日、B区は平成22年1月25日、C区は平成22年4月23日に終了し、



第2図 調査地点の位置と調査区配置図

各区調査終了後、現地を引き渡している。D区については地表顕在遺構の範囲を確定し、その範囲は公園整備計画の設計変更によって緑地として保存されることとなった。

なお、A区の調査期間中の平成21年8月29日(土)に市民を対象とした遺跡見学会を開催し、約250名の来場者を得た。また、調査成果について、関係誌や関係学会での報告も行っている。

3 遺跡の位置と環境

小鶴城跡は、JR仙台駅の北東約4.3kmの宮城野区新出三丁目の舌状丘陵上に所在する。

遺跡が占地する舌状丘陵は周囲を沖積低地に囲まれ、西側に緩やかな起伏を有する七北田丘陵が広がる。周辺の標高は15～16m前後であるが、北山、吉成方面へ標高を上げながら連続している。地質としては、主として鮮新世前期の危岡層・沼の口層であり、シルト岩・砂岩及び酸性凝灰岩が広く分布している。また、七北田川を挟んで北側に広がる標高60～100mの富谷丘陵は、砂岩(泥岩および酸性凝灰岩を伴う)よりなる中新世古後期-鮮新世前期の七北田層からなる。泉ヶ岳を源流とする七北田川によって、奥羽山系から東に延びるこれらの富谷・七北田丘陵が開析され、砂質堆積物の供給源となっている。沖積低地の埋積の過程において、七北田川が沖積低地に入る岩切周辺からほぼ河道に沿って、自然堤防が形成されている。一方、海岸線に沿って数列の浜堤が南北方向に形成される。これらの高まりと七北田丘陵に囲まれた後背湿地部分には、湿地帯が広がっていたと考えられ、河道が固定される以前の七北田川やその支流は、湿地帯の中で頻繁に流路を変えながら流下したと推測される。

本遺跡周辺の微地形についてみると、七北田丘陵が七北田川の支流となる小規模な河川によって、いくつかの小丘陵に分割されて、丘陵が西方から連続的に連なって平野部と接し、比較的高差の大きい地形を形成している。本遺跡はこのような後背湿地に突き出した舌状丘陵上に占地している。現況における標高は「殿上山」と呼ばれる丘陵頂部で約16mを測り、丘陵周辺の後背湿地との比高差は約11mである。

文献上の小鶴城については、『安永風土記御用書出』や享保13年(1728年)の『仙台領古城書立之覚』などに記載がある。

『仙台領古城書立之覚』には、「小鶴城、東西六十間、南北三十六間、右之城主名一切不相知候」とある。また、『安永風土記御用書出』には、小鶴城を「古館」として記載し、「竪三十八間、横二十七間、先年、逸見丹波と申御方住居之中申候処、年号相取申候、寛永十八年御宇答之節、右館二罷成候二付、当時何館と申義共二知不申候事」とあり、規模や城主、年代について記載されている。

規模については、『仙台領古城書立之覚』によると「東西六十間、南北三十六間」、『安永風土記御用書出』によると「竪三十八間、横二十七間」とある。これは本丸部分の規模を示すものとみられるが、現地地形から本丸の位置を推定することはできない。

城主については、『仙台領古城書立之覚』では不明とされている。一方、『安永風土記御用書出』では城主を「逸見丹波」としている。逸見氏は留守景宗が伊達氏より入嗣した際に従ってきた家臣で、留守家では宿老的な地位にあったという(天文17年(1548年)『留守分限帳』)。また、留守政景は、伊達政宗が国分氏を攻撃した際、佐藤三郎に小鶴城を守らせた『留守氏家譜』(留守氏文書)に記載されている。

小鶴城についての具体的な年代についての記載は、『安永風土記御用書出』が唯一とみられ、これによると、寛永18年(1641年)の段階で城館は畑地となっており、城の名称も不明なものとなっていた。この頃には、城館は既に廃絶していたものと推定される。

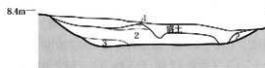
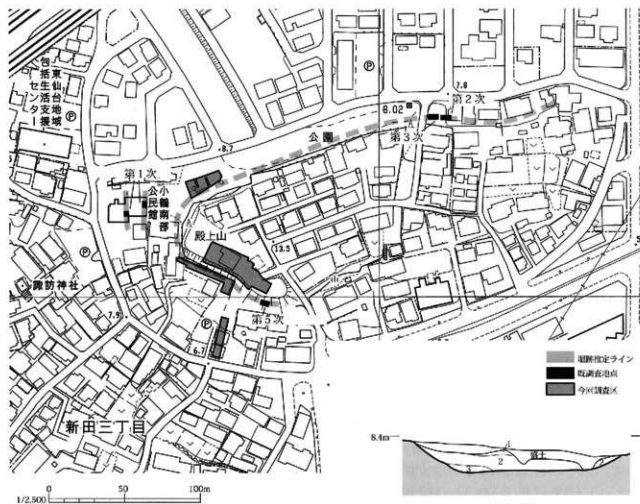
小鶴城跡では、これまで個人住宅建設等に伴う発掘調査が断片的に行われている(第3図参照)。いずれの調査区も城跡跡主体部とみられる丘陵の斜面下に位置し、大規模な溝跡を検出している。第1次調査では丘陵西側に確認できる地表顕在遺構のさらに西側に溝跡2条などを検出し、三重に堀がめぐる可能性が指摘された。また、第2、3次調査および第5次調査では溝跡が丘陵斜面直下に配置されていたことが確認されている。規模などから小鶴城跡に関連する遺構と考えられているが、溝跡の掘削時期などは明らかになっていない。



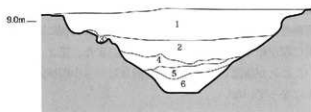
第3次調査



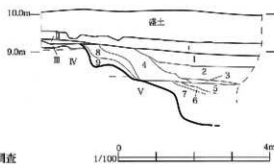
第2次調査



第5次調査



第1次調査



1/100 4m

第3図 既調査区と今回調査区

4 基本層序

今回の調査区は、立地が地点によって大きく異なることから、それぞれの地点の基本層は一様ではない。標高の高い地点では堆積層が流失や削平により残存していない一方、丘陵裾部では旧表土が砂や基本層を巻き込んで再堆積を繰り返している。調査区によって異なった様相を示していることから、基本層については、調査区ごとに詳述する。

5 A区の調査

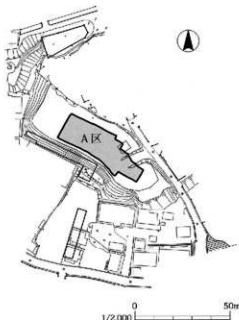
A区は、丘陵頂部に位置し、宅地造成に伴う切上が行われる部分である。遺構の検出状況に応じて、調査区の拡張を行っている。調査前の標高は15.0～16.0mほどで、本来の地形を比較的良好に保っている。調査面積は約650㎡である。

今回の調査で検出した遺構には、柱列跡、掘立柱建物跡、溝跡、土坑、ピット群、整地事業などがある。遺物は、基本層、遺構堆積土などから弥生土器、土師器、須恵器、中世陶器、瓦、石器、木製品、金属製品、鉄滓、銭貨などが出土している。

(1) 基本層序

調査区で確認した基本層は、大別5層に分けられる。

- I層：現代の表土である。層厚約10～60cmで、2層に細分される。
- II層：調査区北西側から南側に分布する盛土整地層である。上面で柱列跡、掘立柱建物跡、ピット群などを検出している。層厚は最大で110cmほどである。
- III層：調査区西部に分布する盛土整地層である。上面で柱列跡、土坑、ピット群などを検出している。層厚は最大で約30cmを測る。
- IV層：調査区南西部の丘陵斜面に沿って分布する黒褐色の粘土質シルトである。旧表土の再堆積層とみられ、2層に細分される。層厚は最大で45cmほどである。調査区西部では本層とV層を切り出して、2段からなる平坦面が形成されており、土坑などが検出されている。層中からは弥生土器、中世陶器などが出土している。
- V層：いわゆる地山で、2層に細分される。a層は調査区西部～中央部に分布する黄褐色の砂質シルトである。b層は調査区東部に分布する黄褐色の砂質シルトと灰白色の粘土の互層で、下層ほど粘性が強くなる。



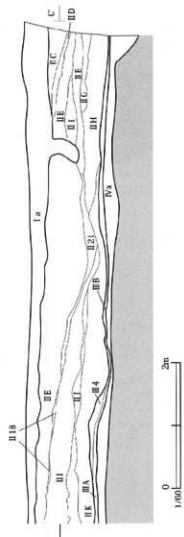
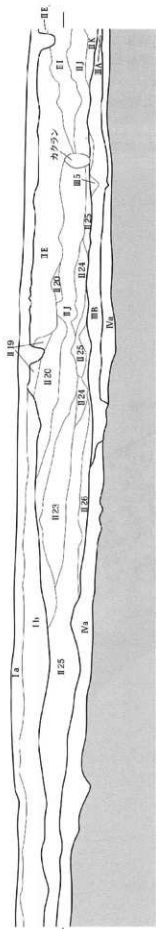
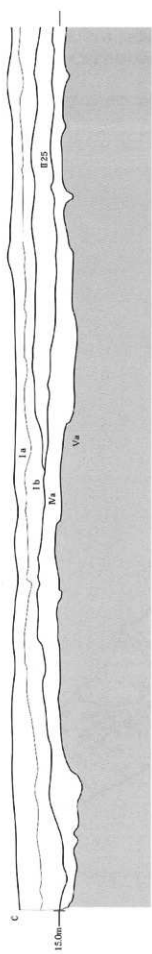
第4図 A区位置図

(2) 発見遺構と出土遺物

今回の調査で確認した遺構検出面は、II層上面、III層上面、IV層上面、V層上面である。

検出遺構には、II層上面では柱列跡3条、掘立柱建物跡3棟、土坑3基、多数のピットがある。III層上面では柱列跡1条、土坑6基、ピット6基がある。IV層上面では柱列跡1条、溝跡2条、土坑3基、ピット25基がある。V層上面では土坑1基がある。

遺物は表土から瓦、II層上面検出遺構の堆積土から土師器片、金属製品、銭貨などが出土している。また、基本層II層中から礫石器などが、基本層III層中から砥石などが、基本層IV層中から弥生土器、中世陶器が出土している。



測点	土層・土質	調査時期
B18	10YR5/6 褐色砂質シルト	調査地上を埋没した層
B19	10YR7/1 灰色粘板状シルト	調査地上を埋没した層
B20	10YR5/1 黄褐色粘板状シルト	調査地上を埋没した層
B23	10YR5/1 黄褐色粘板状シルト	調査地上を埋没した層
B24	10YR5/3 褐色粘板状シルト	調査地上を埋没した層
B25	10YR5/3 褐色粘板状シルト	調査地上を埋没した層
B26	10YR5/1 黄褐色粘板状シルト	調査地上を埋没した層
B4	10YR5/3 褐色粘板状シルト	調査地上を埋没した層
B5	10YR5/3 褐色粘板状シルト	調査地上を埋没した層

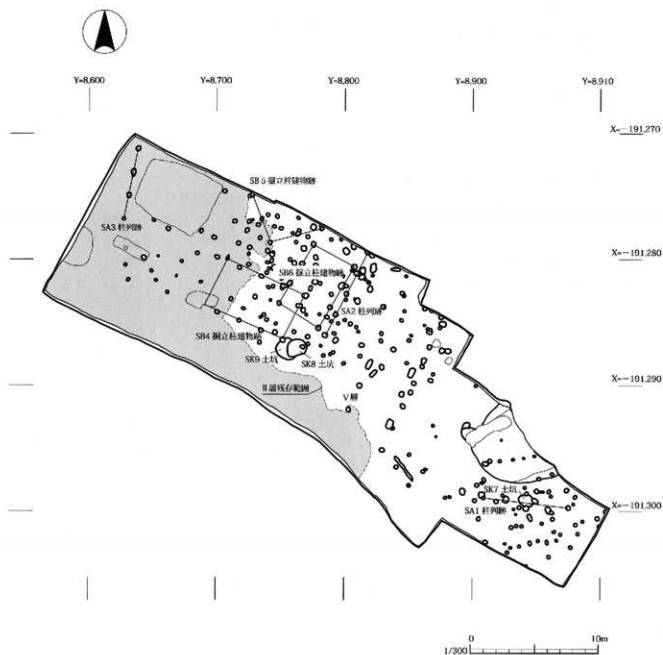
第6図 A区調査区断面2

① II層上面検出遺構と出土遺物

II層は調査区西部で確認された整地層である。地山土を主体として、凝灰岩、黄褐色土および黒褐色土を含む盛土整地層である（第7図参照）。基本層III層と地山であるV層上面に形成され、平坦面の規模を拡大している。標高の高い地点では上面が削平されている可能性がある。

上面で柱列跡3列、掘立柱建物跡3棟、土坑3基の他、多数のピットを検出した。これには整地層が認められない部分で検出した遺構も含めている。

遺物は遺構堆積土などから、土師器、金属製品、銭貨などが出土している。



第7図 II層上面遺構配置図

1) 柱列跡

SA1柱列跡(第8図)

調査区東部で3間分を検出した東西方向の柱列跡である。他の遺構との重複はない。柱列の方向はE-7°-Sを測る。柱列の総長は約6.6mで、柱間寸法は西から約1.6m、(約5.0m)を測る。

柱穴は3基を検出した。柱穴掘方は径25～48cmの不整形円形を呈する。深さは10～44cmである。掘方埋土は炭化物や地山を窠状に含む暗褐色や褐色の砂質シルトである。

柱痕跡はすべての柱穴で確認された。径10～15cmの円形を呈する。堆積土は暗褐色や褐色の砂質シルトである。

遺物はP3から、土師器の小片が1点出土している。

SA2柱列跡(第12図)

調査区中央部で4間分を検出した南北方向の柱列跡である。他の遺構との重複はない。柱列の方向はN-27°-Eを測る。柱列の総長は約7.4mで、柱間寸法は北から約1.9m、約1.8m、約1.85m、約1.85mを測る。

柱穴は5基を検出した。柱穴掘方は径30～42cmで、平面形は円形もしくは不整形円形を呈する。深さは35～42cmである。掘方埋土は灰白色粘土ブロックを多量に含む褐色の砂質シルトである。

柱痕跡はすべての柱穴で確認された。径10～16cmの円形を呈する。堆積土は灰白色粘土ブロックを多量に含む暗褐色の砂質シルトである。

遺物は出土していない。

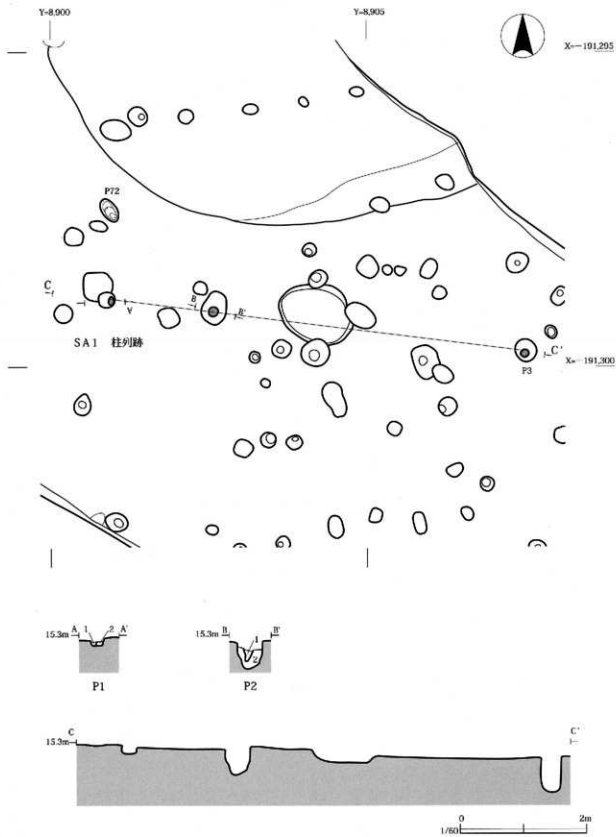
SA3柱列跡(第9図)

調査区西部で3間分を検出した南北方向の柱列跡である。他の遺構との重複はない。柱列の方向はN-11°-Eを測る。柱列の総長は約5.65mで、柱間寸法は北から約1.75m、約1.9m、約1.9mを測る。

柱穴は4基を検出した。柱穴掘方は径25～65cmの円形もしくは不整形円形を呈する。深さは18～35cmである。掘方埋土は灰白色粘土をブロック状に含む褐色粘土である。

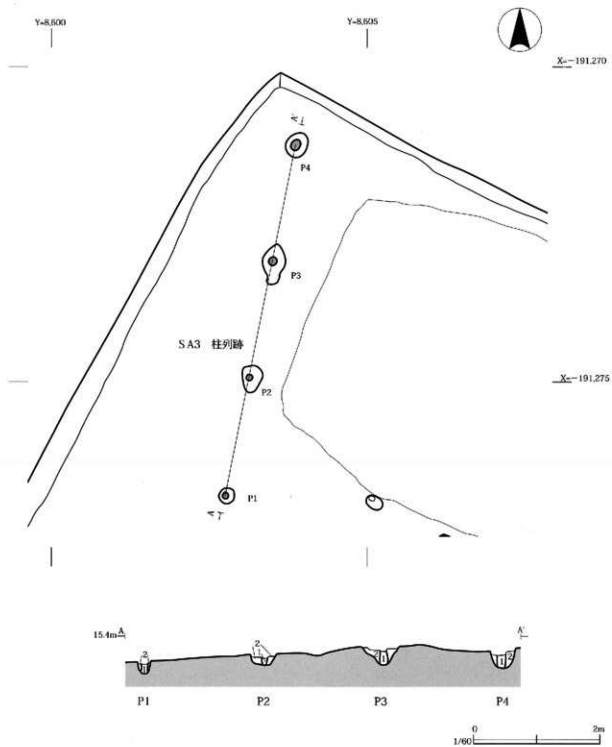
柱痕跡はすべての柱穴で確認された。径12～18cmの円形を呈する。堆積土は暗褐色の砂質シルトである。

遺物は出土していない。



番号・部位		土色・土質	掘込物等	備考
P1	1	10YR3/3 黄灰色砂質シルト		柱列跡
	2	10YR4/4 褐色砂質シルト	掘込物も半層含む	柱列方
P2	1	10YR3/3 黄褐色砂質シルト		柱列跡
	2	10YR4/4 褐色砂質シルト	掘込物も半層含む	柱列方
P3	1	10YR4/4 褐色砂質シルト		柱列跡
	2	10YR4/4 褐色砂質シルト	掘込物も半層含む	柱列方

第8図 SA1 柱列跡



番号・層位	土色・土質	混入物等	備考
P1	1 109K3/3 灰褐色砂質シルト		柱礎部
	2 7.5YR4/4 褐色粘土	灰白土 (2.5Y8/2) 粘土をブロック状に含む。	柱礎部
P2	1 109K3/3 黄褐色砂質シルト		柱礎部
	2 7.5YR4/4 褐色粘土	灰白土 (2.5Y8/2) 粘土をブロック状に含む。	柱礎部
P3	1 109K3/3 灰褐色砂質シルト		柱礎部
	2 7.5YR4/4 褐色粘土	灰白土 (2.5Y8/2) 粘土をブロック状に含む。	柱礎部
P4	1 109K3/3 灰褐色砂質シルト		柱礎部
	2 7.5YR4/4 褐色粘土	灰白土 (2.5Y8/2) 粘土をブロック状に含む。	柱礎部

第9図 SA3 柱列跡

2) 掘立柱建物跡

SB4 掘立柱建物跡 (第10図)

調査区中央部で検出した東西4間、南北2間の東西棟の建物跡である。SB4掘立柱建物跡、SK5上坑と重複し、SK5上坑よりも新しいが、SB4掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。方向は北側柱列でW-24°-Sである。建物規模は、北側柱列による桁行総長は約7.9mで、柱間寸法は西から約1.9m、約2.2m、約1.9m、約1.9mである。東側柱列による梁行総長は約3.95mで、柱間寸法は北から約0.9m、約3.05mである。

柱穴は10基を検出した。柱穴掘方は径28～50cmの不整形円形を呈する。深さは18～52cmである。掘方埋土は地山を填状に含む暗褐色の砂質シルトである。

柱痕跡は7箇所を確認された。径10～25cmの円形を呈する。堆積土は暗褐色の砂質シルトである。

遺物はP2から土師器小片が1点出土している。

SB5 掘立柱建物跡 (第11図)

調査区中央部で検出した東西2間以上、南北2間以上の建物跡である。他の遺構との重複はない。方向は西側柱列でN-19°-W、南側柱列ではE-15°-Nである。建物規模は、西側柱列でみると総長4.05mで、柱間寸法は北から約2.05m、約2.0mである。南側柱列でみると総長約4.25mで、柱間寸法は西から約2.25m、(約2.0m)である。

柱穴は5基を検出した。柱穴掘方は径26～42cmの円形もしくは楕円形を呈する。深さは18～54cmである。掘方埋土は灰白色の粘土ブロックや、地山を斑状に含む褐色や橙色の砂と砂質シルトである。

柱痕跡は3箇所を確認された。径10～15cmの円形を呈する。堆積土は暗褐色や褐色の粘土質シルトなどである。

遺物は出土していない。

SB6 掘立柱建物跡 (第12図)

調査区中央部で検出した東西1間、南北3間の南北棟の建物跡である。SB4掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。方向は西側柱列でN-29°-W、南側柱列ではE-31°-Nである。建物規模は、東側柱列による桁行総長は総長約5.55mで、柱間寸法は北から約1.85m、(約1.85m)、(約1.85m)である。南側柱列による梁行総長は約3.65mである。

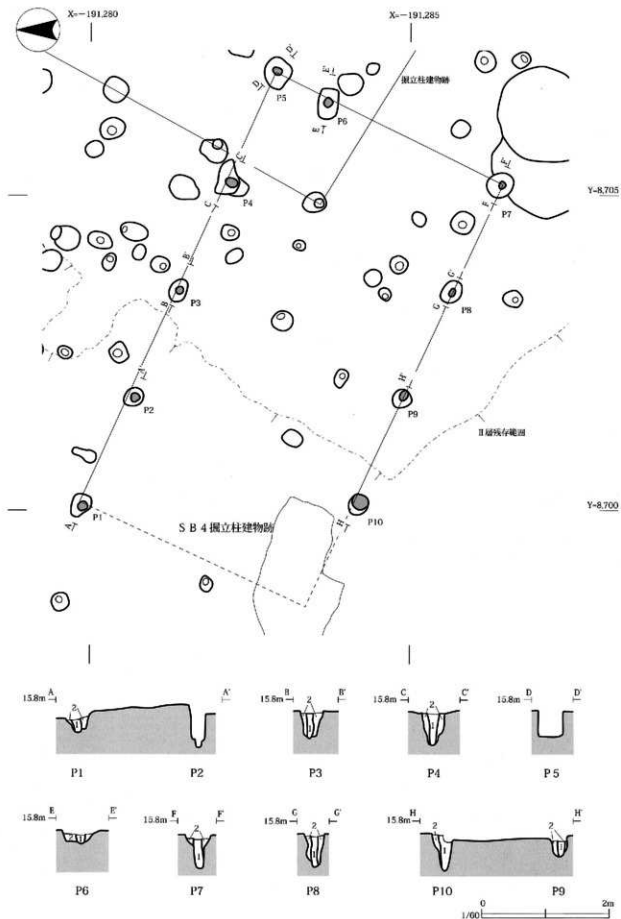
柱穴は8基を検出した。柱穴掘方は径35～55cmの円形もしくは楕円形を呈する。深さは20～60cmである。掘方埋土は灰白色の粘土ブロックなどを含む褐色や、にぶい黄褐色の粘土と砂質シルトである。

柱痕跡は6箇所を確認された。径14～22cmの円形を呈する。堆積土は暗褐色や褐色の粘土質シルトなどである。

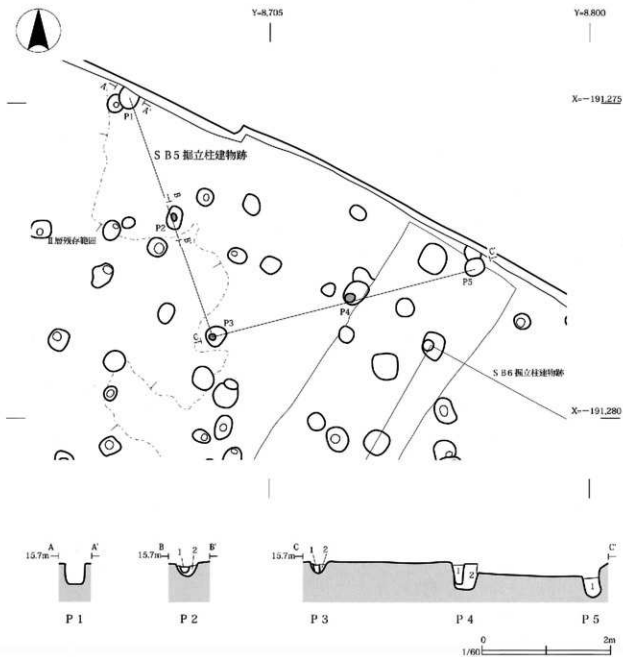
遺物は出土していない。

番号・検出	土色・土質	産出物等	掘方
P1	1 10YR3/3 暗褐色砂質シルト		北側溝
	2 10YR3/4 暗褐色砂質シルト	地山を斑状に含む。	柱掘方
P3	1 10YR3/3 暗褐色砂質シルト		柱掘方
	2 10YR3/4 暗褐色砂質シルト	地山を斑状に含む。	柱掘方
P4	1 10YR3/4 暗褐色砂質シルト	地山を斑状に含む。	柱掘方
	2 10YR3/3 暗褐色砂質シルト		柱掘方
P6	1 10YR3/3 暗褐色砂質シルト		柱掘方
	2 10YR3/4 暗褐色砂質シルト	地山を斑状に含む。	柱掘方
P7	1 10YR3/3 暗褐色砂質シルト	地山を斑状に含む。	柱掘方
	2 10YR3/4 暗褐色砂質シルト	地山を斑状に含む。	柱掘方
P8	1 10YR3/4 暗褐色砂質シルト	地山を斑状に含む。	柱掘方
	2 10YR3/3 暗褐色砂質シルト	地山を斑状に含む。	柱掘方
P9	1 10YR3/3 暗褐色砂質シルト		柱掘方
	2 10YR3/4 暗褐色砂質シルト	地山を斑状に含む。	柱掘方
P10	1 10YR3/3 暗褐色砂質シルト		柱掘方
	2 10YR3/4 暗褐色砂質シルト	地山を斑状に含む。	柱掘方

第1表 SB4掘立柱建物跡 土層記表



第 10 圖 SB4 掘立柱建物跡

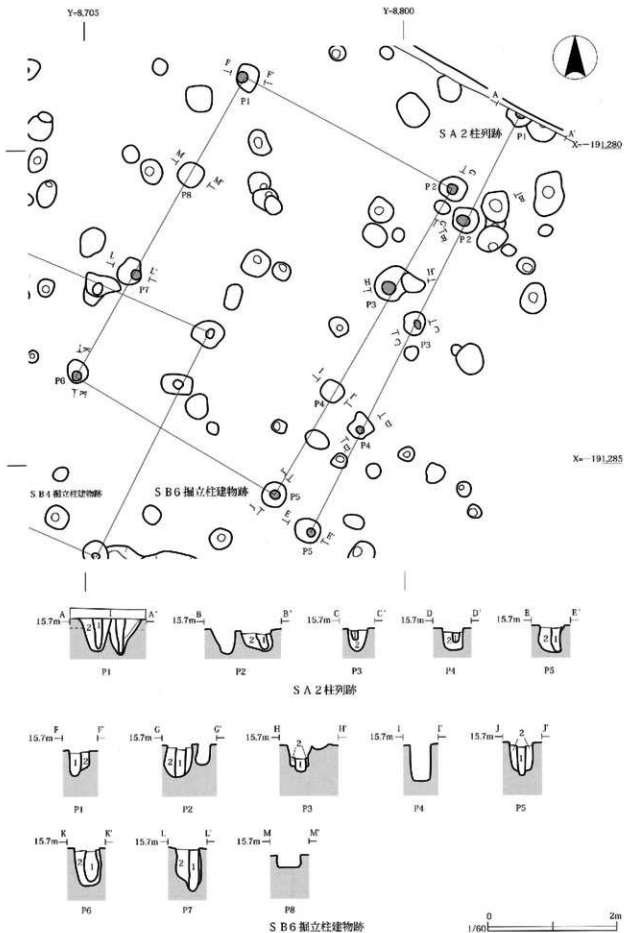


発見・部位	土色・土質	遺入物等	備考
P1	1 7.5YR4/4 褐色粘土	灰白色 (2.5YR/2) 粘土をブロック状に含む。	
	2 10YR4/4 褐色砂質シルト	灰白色 (2.5YR/2) 粘土をブロック状に多量に含む。	柱礎跡
P2	1 10YR3/4 褐色砂質シルト	灰白色 (2.5YR/2) 粘土をブロック状に多量に含む。	柱礎跡
	2 10YR3/4 褐色砂質シルト	褐色 (4.5YR/2) 含む	柱礎跡
P3	1 10YR3/4 褐色砂質シルト	灰白色 (2.5YR/2) 粘土をブロック状に多量に含む。	柱礎跡
	2 7.5YR6/8 緑褐色	灰白色 (2.5YR/2) 粘土をブロック状に多量に含む。	柱礎跡
P5	1 10YR4/4 褐色砂質シルト	灰白色 (2.5YR/2) 粘土をブロック状に多量に含む。	柱礎跡

第11図 SB5 掘立柱建物跡

発見・部位	土色・土質	遺入物等	備考
P1	1 10YR3/4 褐色砂質シルト	褐色 (4.5YR/2) 含む。	柱礎跡
	2 10YR4/4 褐色砂質シルト	灰白色 (2.5YR/2) 粘土をブロック状に多量に含む。	柱礎跡
P2	1 10YR3/4 褐色砂質シルト	灰白色 (2.5YR/2) 粘土をブロック状に多量に含む。	柱礎跡
	2 10YR6/4 (C) 赤い・濃褐色砂質シルト	灰白色 (2.5YR/2) 粘土をブロック状に多量に含む。	柱礎跡
P3	1 10YR3/4 褐色砂質シルト	灰白色 (2.5YR/2) 粘土をブロック状に多量に含む。	柱礎跡
	2 10YR4/4 褐色砂質シルト	灰白色 (2.5YR/2) 粘土をブロック状に多量に含む。	柱礎跡
P4	1 10YR3/4 褐色砂質シルト	灰白色 (2.5YR/2) 粘土をブロック状に多量に含む。	柱礎跡
	2 10YR4/4 褐色砂質シルト	灰白色 (2.5YR/2) 粘土をブロック状に多量に含む。	柱礎跡
P5	1 10YR3/4 褐色砂質シルト	灰白色 (2.5YR/2) 粘土をブロック状に多量に含む。	柱礎跡
	2 10YR4/4 褐色砂質シルト	灰白色 (2.5YR/2) 粘土をブロック状に多量に含む。	柱礎跡

第2表 SA2 柱列跡 土層註記表



第12図 SA 2柱列跡・SB 6掘立柱建物跡

番号・層位	土色・土質	掘入物等	備考	
P1	1	10YR4/4 褐色粘土質シルト		柱頭跡
	2	10YR4/4 褐色粘土質シルト	灰色・黄褐色(10YR7/2)の粘土ブロックを多数含む	柱頭跡
P3	1	10YR2/3 黄褐色粘質シルト	灰白色(2.5YR7/2) 粘土ブロックを多数含む	柱頭跡
	2	10YR4/4 褐色粘質シルト	灰白色(2.5YR7/2) 粘土ブロックを多数含む	柱頭跡
P4	1	10YR4/4 褐色粘質シルト	灰白色(2.5YR7/2) 粘土ブロックを多数含む	柱頭跡
	2	7.5YR4/4 褐色粘土	灰白色(2.5YR7/2) 粘土ブロックを含む	柱頭跡
P5	1	10YR4/4 褐色粘質シルト	灰白色(2.5YR7/2) 粘土ブロックを多数含む	柱頭跡
	2	7.5YR4/4 褐色粘土	灰白色(2.5YR7/2) 粘土ブロックを含む	柱頭跡
P6	1	10YR4/4 褐色粘質シルト		柱頭跡
	2	10YR4/4 褐色粘質シルト	炭化物を少量含む	柱頭跡
P7	1	10YR4/4 褐色粘質シルト		柱頭跡
	2	10YR6/3 に近い・黄褐色粘質シルト	灰白色(2.5YR7/2) 粘土のブロックを多数含む	柱頭跡

第3表 SB6掘立柱列跡 土層註記表

3) 土坑

SK7土坑 (第13図)

調査区東部で検出した。ピット3基と重複するが、いずれよりも古い。平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約1.21m、短軸約0.96m、深さ20cmを測る。断面形は逆台形状を呈する。堆積土は2層に分層され、炭化物や地山を含む褐色の砂などである。

遺物は不明金属製品が1点出土している。

SK8土坑 (第14図)

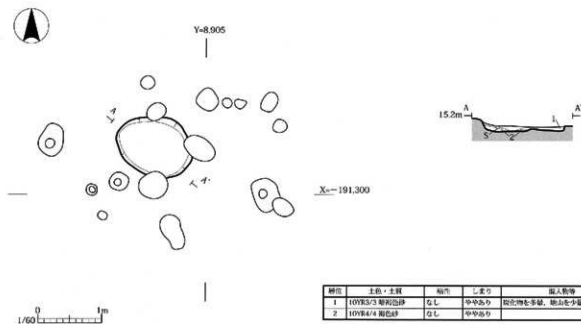
調査区中央部で検出した。SK9土坑、ピットと重複し、SK9土坑より新しく、ピットより古い。平面形は不整楕円形を呈する。規模は長軸約1.54m、短軸約1.25m、深さ26cmを測る。断面形は逆台形状を呈する。堆積土は3層に分層され、灰白色の粘土をブロック状に含む褐色の砂質シルトなどである。

遺物は出土していない。

SK9土坑 (第14図)

調査区中央部で検出した。SK8土坑、SB4掘立柱建物跡と重複し、いずれよりも古い。平面形は、SK8土坑に壊されているが、隅丸方形を基調としたものとみられる。規模は南北1.75m、東西1.60m以上、深さ6cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は単層で、にぶい黄褐色のシルト質砂である。

遺物は出土していない。

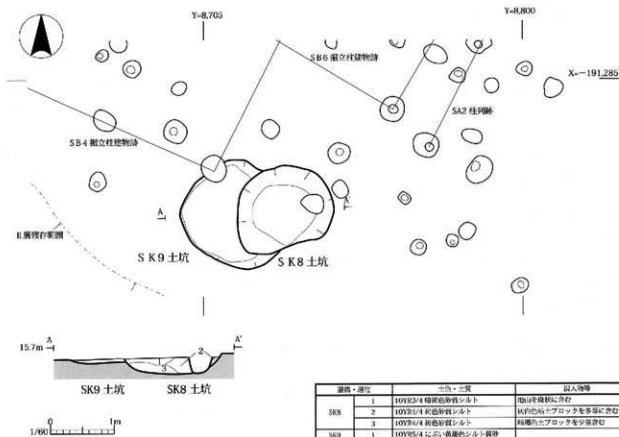


層位	土色・土質	掘削	しきり	掘入物等
1	10YR2/3 黄褐色粘質砂	なし	ややあり	炭化物を多数、地山を少量、石
2	10YR4/4 褐色砂	なし	ややあり	

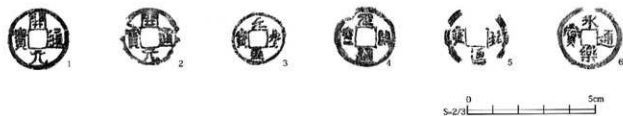
第13図 SK7土坑 平面・断面図

4) その他の遺構出土遺物

調査区東部に位置するP72(第11図)堆積土から銭貨6枚(開元通宝2枚、元豊通宝1枚、元祐通宝2枚、永楽通宝1枚)が出土している(第15図)。



第14図 SK8、9土坑 平面・断面図



発出番号	発掘番号	形制	径 (cm)		発行・備考	写真掲載
			背	厚		
1	N-2b	銅製品・銭貨	2.4	0.1	開元通宝(北朝年:景・G21年)	1-1
2	N-3	銅製品・銭貨	2.2	0.1	開元通宝(北朝年:景・G21年)	1-2
3	N-2a	銅製品・銭貨	2.1	0.1	元祐通宝(北朝年:聖宗・1078年)	1-3
4	N-1a	銅製品・銭貨	2.4	0.1	元祐通宝(北朝年:聖宗・1078年)	1-4
5	N-4	銅製品・銭貨	2.6	0.1	元祐通宝(北朝年:聖宗・1078年)	1-5
6	N-1b	銅製品・銭貨	2.5	0.1	永楽通宝(北朝年:貞・1408年)	1-6

第15図 P72出土遺物

②Ⅲ層上面検出遺構と出土遺物

Ⅲ層は調査区南西部で確認された整地層である。地山土、黒褐色土を主体として、凝灰岩、黄褐色土を含む盛土整地層である（第16図参照）。切り上による平場状遺構の上面に土を盛って平坦面を形成している。上面で検出した遺構には、柱列跡1条、土坑6基、ピット6基がある。

遺構から遺物は出土していない。



第16図 Ⅲ層上面遺構配置図

1) 柱列跡

SA 10柱列跡（第17図）

調査区西部で2間分を検出した東西方向の柱列跡である。他の遺構との重複はない。柱列の方向はW-38°-Nを測る。検出総長は約3.80mで、柱間寸法は約1.90mの等間である。

柱穴は3基を検出した。柱穴掘方は径28～61cmで、平面形が円形もしくは楕円形を呈する。深さは29～50cmである。掘方埋土は橙色の粘土質シルトである。

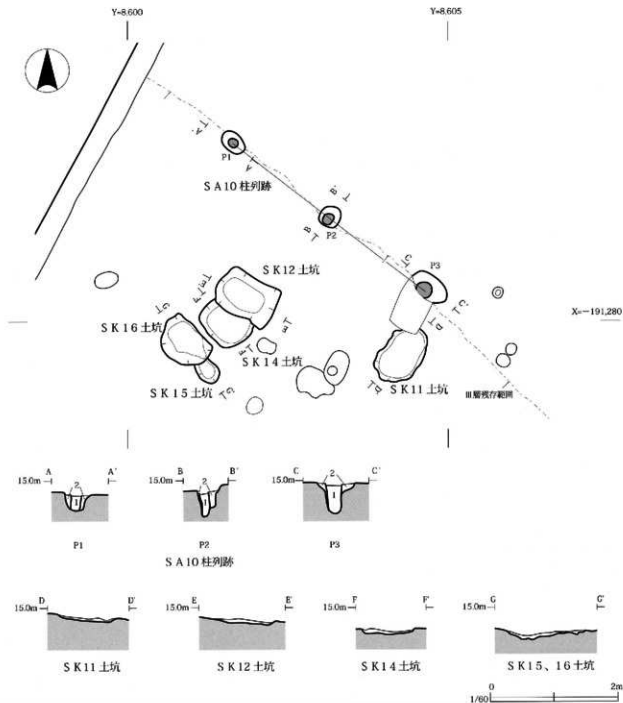
柱痕跡はすべての柱穴で確認された。径16～26cmの円形を呈する。堆積土は橙色の粘土質シルトである。

遺物は出土していない。

2) 土坑

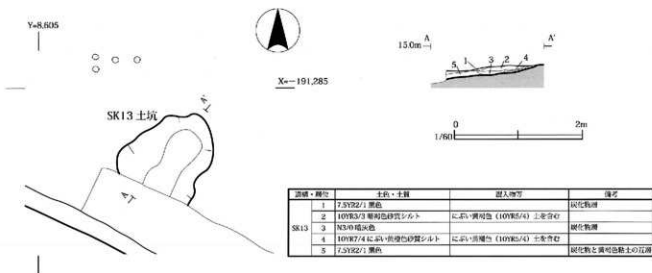
SK 11 土坑 (第 17 図)

調査区西部で検出した。他の遺構との重複はない。一部を攪乱によって壊されているが、平面形はやや歪んだ楕円形を呈する。規模は長軸約 1.00m、短軸約 0.60m、深さ 6 cm ほどである。断面形は浅い皿状を呈し、底面は被熱の



遺構・部位	主産・土質	出入物等	備考
SA 10	P1 1	7.516/6 褐色粘土質シルト	柱断面
	P1 2	516/5 褐色粘土質シルト	覆方土
	P2 1	7.516/6 褐色粘土質シルト	柱断面
	P2 2	516/5 褐色粘土質シルト	覆方土
	P3 1	7.516/6 褐色粘土質シルト	柱断面
	P3 2	516/5 褐色粘土質シルト	覆方土
SK 11	7.516/21 黒色		被熱層 柱脚が被熱のため赤黒化
SK 12	7.516/21 黒色		被熱層 柱脚が被熱のため赤黒化
SK 14	7.516/21 黒色		被熱層 柱脚が被熱のため赤黒化
SK 15	7.516/21 黒色	橋上土倉跡	遺構の一部が被熱のため赤黒化
SK 16	7.516/21 黒色		被熱層

第 17 図 III 層上面 遺構平面・断面図 1



第18図 III層上面 遺構平面・断面図2

ため、赤変硬化している。堆積土は炭化物の単層で、骨片を含んでいる。底面と堆積土の状況から火葬墓とみられる。

SK 12 土坑 (第17図)

調査区西部で検出した。他の遺構との重複はない。平面形はやや歪んだ隅丸長方形を呈する。規模は長軸約1.00m、短軸約0.70m、深さ6cmほどである。断面形は浅い皿状を呈し、底面は被熱のため、赤変硬化している。堆積土は炭化物の単層で、骨片を含んでいる。底面と堆積土の状況から火葬墓とみられる。

SK 13 土坑 (第18図)

調査区西部で検出した。他の遺構との重複はない。一部を攪乱によって壊されているが、平面形は不整形を呈するものとみられる。規模は長軸1.40m以上、短軸約1.35m、深さ14cmほどである。断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は5層に分層され、炭化物と基本層III層土との互層である。堆積土の状況から火葬墓とみられる。

SK 14 土坑 (第17図)

調査区西部で検出した。ピットと重複し、これよりも古い。平面形はやや不整な隅丸方形を呈する。規模は長軸約0.83m、短軸約0.75m、深さ6cmほどである。断面形は浅い皿状を呈し、底面は被熱のため、赤変硬化している。堆積土は炭化物の単層である。底面と堆積土の状況から火葬墓とみられる。

SK 15 土坑 (第17図)

調査区西部で検出した。SK 16 土坑と重複し、これよりも新しい。平面形は不整形を呈する。規模は長軸約0.85m、短軸約0.60m、深さ12cmほどである。断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は単層で、焼土を含む炭化物層である。堆積土の状況から火葬墓とみられる。

SK 16 土坑 (第17図)

調査区西部で検出した。SK 15 土坑と重複し、これよりも古い。SK 15 土坑に一部を壊されているが、平面形は楕円形を呈するものとみられる。規模は長軸0.37m以上、短軸約0.35m、深さ5cmほどである。断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は炭化物の単層である。堆積土の状況から火葬墓とみられる。

③IV層上面検出遺構と出土遺物

IV層上面では、調査区南西部で斜面の切り出しによる造成が確認された。上段が東西約5.0m、南北約5.0m、下段が東西約9.0m、南北約6.5mの2段からなる平坦面を作り出した整地事業である。IV層上面で検出した遺構には、柱列跡1条、溝跡2条、土坑3基、ピット25基がある。検出した遺構の大半は、切り土によって形成された平場に伴うものとみられる。

遺構から遺物は出土していない。

1) 柱列跡

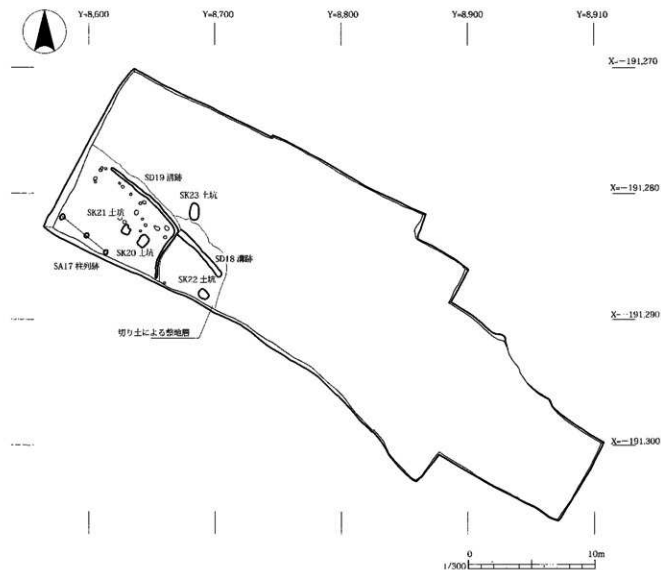
SA17 柱列跡 (第20図)

調査区西部の2段からなる平場の下段で2間分を検出した東西方向の柱列跡である。他の遺構との重複はない。柱列の方向はN-49°-Nを測る。検出総長は約4.50mで、柱間寸法は西から約2.40m、(約2.10m)である。

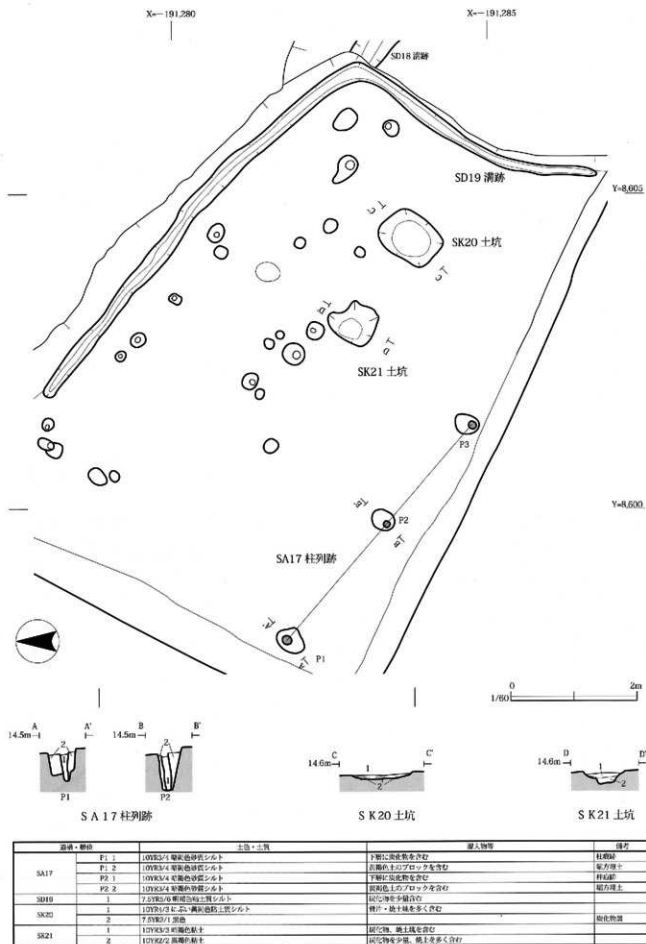
柱穴は3基を検出した。柱穴掘方は径31～48cmの円形もしくは楕円形を呈する。深さは44～70cmである。掘方埋土は黄褐色の砂質シルトをブロック状に含むにぶい黄褐色の砂質シルトである。

柱痕跡はすべての柱穴で確認された。径10～14cmの円形を呈する。堆積土は暗褐色の砂質シルトである。

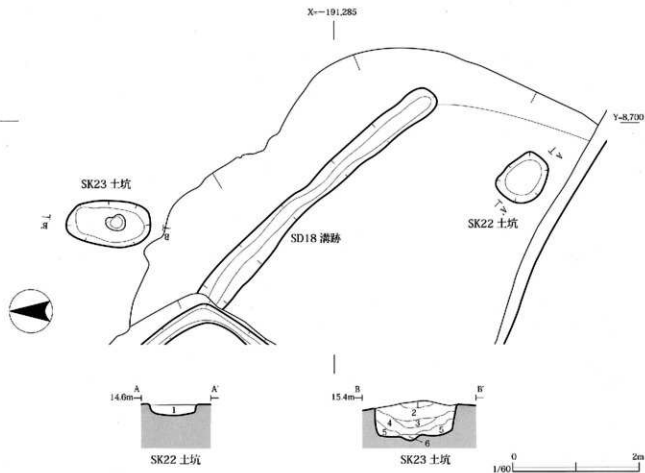
遺物は出土していない。



第19図 IV・V層上面 遺構配置図



第20図 IV・V層上面 遺構平面・断面図1



遺構・部位	土色・土質	出土物等	備考
SD18	1 7.5VRS5年相褐色粘土質シルト	炭化粘土質土器片	
SK22	1 HOYR23/2 黄褐色粘土質シルト		
	1 5YR6/6 赤褐色粘土質シルト		
	2 5YR2/6 赤褐色粘土質シルト	白色粘土を炭灰に多く含む	
SK23	3 5YR6/6 赤褐色粘土質シルト	白色粘土を炭灰に多く含む	
	4 5YR6/6 赤褐色粘土質シルト	黄色の粘土を炭灰に多く含む	
	5 5YR6/6 赤褐色粘土質シルト	白色粘土を炭灰に多く含む	
	6 HOYR2/4 黄褐色粘土質シルト		

第21図 IV・V層上面 遺構平面・断面図2

2) 溝跡

SD18 溝跡 (第21図)

調査区西部の2段からなる平場の上段で検出した北西—南東方向の溝跡である。他の遺構との重複はないが、20cmほどの段差をもって、下段のSD19溝跡と接続しており、一連の遺構と考えられる。検出長は約4.8mで、平場を形成する段に沿って延びる。規模は上端幅約0.30～0.50m、下端幅約0.15～0.20m、深さ10～16cmである。堆積土は単層で、炭化物を含む明褐色の粘土質シルトである。断面形は浅い皿状を呈する。

遺物は出土していない。

SD19 溝跡 (第20図)

調査区西部の2段からなる平場の下段で検出した北西—南東方向から北東—南西方向へ屈曲する溝跡である。他の遺構との重複はないが、20cmほどの段差をもって、上段のSD18溝跡と接続しており、一連の遺構と考えられる。検出長は北西—南東方向は約7.35m、北東—南西方向は約4.15mで、平場を形成する段に沿って延びる。規模は

上端幅約0.15～0.30m、下端幅約0.05～0.15m、深さ1～12cmほどで、底面は造成された地形に沿って南西方向にわずかに傾斜している。断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は単層で、炭化物を含む明褐色の粘土質シルトである。

遺物は出土していない。

3) 土坑

SK 20 土坑 (第20図)

調査区西部の2段からなる平場の下段で検出した。他の遺構との重複はない。平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸約0.95m、短軸約0.75m、深さ13cmほどである。断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は2層に分層され、多量の片石、焼土を含む濃い黄褐色の粘土質シルトである。堆積土の状況から火葬塚とみられる。

SK 21 土坑 (第20図)

調査区西部の2段からなる平場の下段で検出した。他の遺構との重複はない。平面形は不整形を呈する。規模は長軸約0.75m、短軸約0.65m、深さ22cmほどである。断面形は上部の開口逆台形を呈する。堆積土は2層に分層され、焼土、炭化物を含む黒褐色や暗褐色の粘土質シルトである。堆積土の状況から火葬塚とみられる。

遺物は出土していない。

SK 22 土坑 (第21図)

調査区西部の2段からなる平場の上段で検出した。他の遺構との重複はない。平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約0.85m、短軸約0.65m、深さ8cmほどである。断面形は皿状を呈する。堆積土は単層で、黒褐色の粘土質シルトの自然堆積土である。

遺物は出土していない。

④ V層上面検出遺構と出土遺物

V層上面で検出した遺構には、土坑1基がある。土坑から遺物は出土していない。

1) 土坑

SK 23 土坑 (第21図)

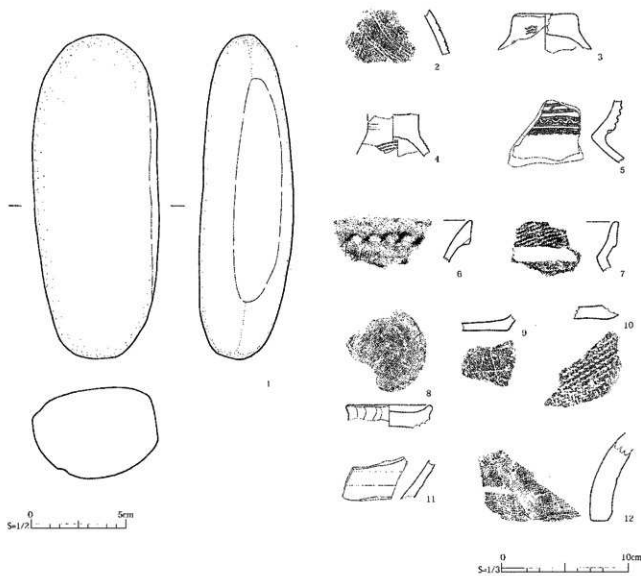
調査区西部で検出した。他の遺構との重複はない。平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約1.35m、短軸0.75m、深さは54cmほどである。断面形は箱状を呈し、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。底面は比較的平坦だが、中央付近に深さ8cmほどの窪みがある。堆積土は6層に分層され、白色粘土を含む赤褐色のシルトなどの自然堆積土である。遺物は出土していない。形態から縄文時代に属する「陥し穴」とみられる。

⑤遺構外出土遺物

基本層Ⅱ～Ⅲ層から礫石器(第22図1)が出土している。側縁のみに磨面が確認できる磨石である。石材は安山岩である。

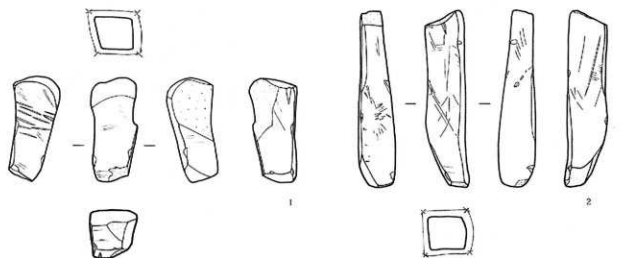
基本層Ⅲ層から砥石が2点(第23図-1、2)出土している。いずれも一部を欠損し、石材は凝灰岩である。

基本層Ⅳ層から弥生土器、中世陶器などが出土している。特徴から第22図2～4は弥生時代中期後半の十三塚式、第22図5～8は弥生時代後期の天上山式に位置付けられる。中世陶器には第22図-11がある。美濃産の灰釉小型鉢とみられ、年代は16世紀頃と考えられる。



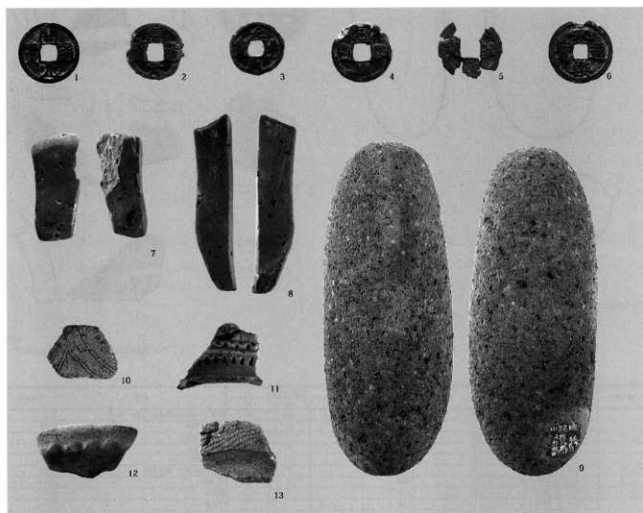
図中番号	登録番号	種別	図解	出土層位	長さ (cm)			特徴	参考番号
					全	欠	厚		
1	B-4	礫石器	磨石	Ⅱ～Ⅲ層	17.1	6.6	4.9	磨面 一面のみ磨面確認 石材: 安山岩	1-9
2	B-5	砥石	砥	Ⅳ層	--	--	--	3本筋付磨文	1-10
3	B-9	弥生土器	底	Ⅳ層	--	--	位位	日本陶器協会	--
4	B-2	弥生土器	底	Ⅳ層	--	--	0.41	3本筋付磨文	--
5	B-6	弥生土器	底	Ⅳ層	--	--	--	沈砂一断面	1-11
6	B-5	弥生土器	底	Ⅳ層	--	--	--	口縁下部に押印。焼文不明	1-12
7	B-1	弥生土器	底	Ⅳ層	--	--	--	口縁下部に押印。焼文不明	1-13
8	B-8	弥生土器	底	Ⅳ層	--	--	(1.7)	磨面確認	--
9	B-4	弥生土器	底	Ⅳ層	--	--	--	焼面確認	--
10	B-7	弥生土器	底	Ⅳ層	--	--	--	磨面確認	--
11	T-1	中世陶器	小型鉢?	Ⅳ層	--	--	--	美濃産? 16c? 磨面	--
12	B-1	瓦	瓦片	Ⅳ層	--	--	--	白瀬川(石川) 御坂石瓦	--

第22図 A区 遺構外出土遺物1



図号	発掘番号	類別	説明	出土層位	寸法 (cm)			特徴	写真番号
					長	幅	厚		
1	Ⅷ-1	石製品	硝石	Ⅷ層	5.5	2.0	1.7	縦溝4条 石目：縦横型	1-7
2	Ⅷ-2	石製品	硝石	Ⅷ層	9.3	2.0	1.7	硝石4条 石目：縦横型	1-8

第23図 A区 遺構外出土遺物2



写真図版1 A区 出土遺物

6 B区の調査

B区は、擁壁設置個所である丘陵斜面直下に位置する。深度30～80cmほどの土壌改良のため、原地形を留めていない。現地表面の標高は10.0m前後である。調査面積は約190㎡である。

(1) 基本層序

調査地点は深度30～80cmほどの土壌改良による改変を受けており、表土は残存していない。遺構検出面で基本層を2層確認した。

I層：にぶい黄褐色(10YR6/3)の粘土層で均質である。調査区西半部で確認した。

II層：調査区東半部で確認した基盤となる凝灰岩層である。暗灰黄褐色(10YR5/2)の砂質シルトで、しまりが強く固い。下半部はグライ化している。調査区東半部で確認した。

C区VI層に対応するものとみられる。

(2) 発見遺構と出土遺物

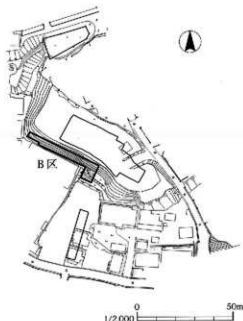
検出した遺構は、堀跡1条である。堆積土中などから磁器、陶器、杭状木製品が出土している。

1) 堀跡

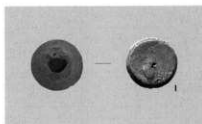
S D 1 堀跡 (第26図)

調査区南半部に位置する東西方向の堀跡である。検出長は約39.00mで、さらに調査区外へ延びる。調査区東端部では丘陵斜面の堆積層に接続し、周辺の状況から、堀跡の北壁は底面から丘陵斜面と連続していたものとみられる。検出は一部であるが、調査区東端部で確認した規模は、上端幅約7.15～7.30m、下端幅約1.70m、深さ1.95mほどである。断面形は上部が開くU字状を呈する。堆積土は上層の固く締まった人為的埋土と下層の地山崩落土や植物遺存体を含む粘土の自然堆積土に大別されるが、地点によって堆積状況が異なり、調査区西側では人為的埋土は確認されていない。調査区中央部から東側に分布する人為的埋土と自然堆積土の上層にはビニール片などが混入することから、近年まで地表顕在遺構として存在した可能性が高い。

遺物は、人為的埋土と自然堆積層上層から近現代のものも含む陶磁器片がごく少量出土しており、自然堆積土下層からは小型の花皿とみられる中世陶器(第25図)1点、杭状木製品1点が出土している。

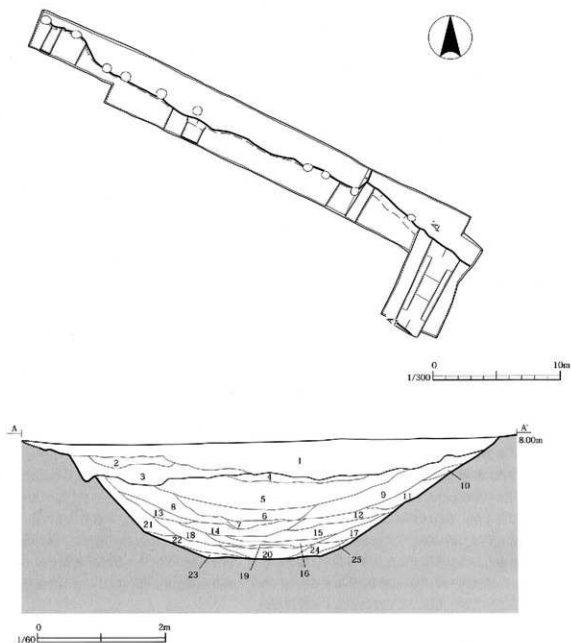


第24図 B区位置図



発掘番号	遺物番号	遺物名	出土部位	類別	形態	寸法 (cm)			特徴
						長さ	口径	底径	
1	S-2	S D 1	16	中世陶器	小型花皿?	(1.43)	—	3.3	径9・高約7.15～16・7.68

第25図 B区出土遺物



層位	土層・土質	しまり	傾斜	掘入物等	備考
1	10YR4/2 赤褐色シルト	あり(弱)	なし	にぶい・溝埋物 (10YR5/2) 粘土質シルトをブロック状に多く含む	人工的粘土
2	10YR3/4 暗褐色シルト	あり	ややあり	にぶい・溝埋物 (10YR5/2) 粘土質シルトをブロック状に少量含む	
3	10YR4/2 赤褐色シルト	あり	あり	にぶい・溝埋物 (10YR5/2) 粘土質シルトを大ブロック状に多く含む	
4	10YR3/2 黒褐色シルト	あり	あり	炭化物が数粒に少量含む	
5	10YR4/1 紅褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	砂を均等に多く含む	
6	2.5Y3/2 黒オリーブ褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	砂を均等に多く含む	
7	2.5Y3/1 黒褐色土	なし	あり	有機物の繊維質が所々入り混じり含む	
8	2.5Y3/1 黒褐色粘土質シルト	あまりなし	ややあり	砂を均等に多く含むが深部、炭化物を数粒にごく少量含む	
9	10YR3/4 暗褐色シルト	ややあり	ややあり	埋物 (10YR4/4) 粘土質シルトを含む	
10	10YR4/4 暗褐色シルト	あまりなし	あまりなし	埋物等 (10YR4/1) 粘土質シルトを均等にごく少量含む	
11	10YR3/3 暗褐色シルト	ややあり	ややあり	砂を均等に含む	
12	2.5Y3/2 黒オリーブ褐色土	なし	あり	埋物等 (2.5Y3/2) シルトを塊状に含む	自然堆積土
13	2.5Y3/2 黒オリーブ褐色粘土質シルト	あまりなし	ややあり	砂を均等にやや多く含む	
14	10YR3/2 黒褐色粘土質シルト	あまりなし	ややあり	にぶい・溝埋物 (10YR5/2) シルトをブロック状に含む	
15	2.5Y3/2 黒褐色粘土	なし	あり	繊維質の塊を多く含む	
16	2.5Y3/1 黒褐色粘土	なし	あり	有機物の繊維質が所々入り混じり含む。炭化物も所々	
17	10YR3/1 黒褐色粘土	なし	あり	砂を均等に含む。繊維質の塊を若干含む	
18	10YR3/2 黒褐色粘土	なし	あり	有機物の繊維質が所々入り混じり含む	
19	7.5Y3/2 黄褐色粘土	なし	あり	均質な有機物の繊維質を多く含む	
20	2.5Y3/2 黒褐色粘土	なし	あり	均質な有機物の繊維質を多く含む。有機物の塊が所々	
21	2.5Y3/2 黒オリーブ褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	均質な塊 (2.5Y3/2) シルトを小ブロック状に若干含む	
22	2.5Y3/1 黒褐色粘土	なし	なし	黒オリーブ褐色 (2.5Y4/2) 粘土質シルトに少量含む	
23	2.5Y3/1 オリーブ褐色砂	なし	なし	均質な塊	
24	2.5Y3/1 オリーブ褐色砂	なし	なし	均質な塊 (2.5Y3/1) 粘土質シルトを小ブロック状に少量含む	
25	10YR3/6 赤褐色砂	なし	なし	均質な塊化した砂	

第26図 B区 平面・断面図

7 C区の調査

本調査区は、丘陵南側の裾部に位置し、新設される道路部分にあたる。現地表面の標高は約8.50mで、南に向かって緩やかに傾斜している。調査面積は約150㎡である。

(1) 基本層序

確認した基本層は、大別6層、細別21層である。調査地点の盛土は層厚約0.6～1.4mである。Ⅱ層以下の自然堆積層は、丘陵側から流入した再堆積層を主体とし、地形が南に向かって緩やかに傾斜していることから南側ほど厚く堆積する傾向にある。

I層：盛土以前の耕作土とみられる黒褐色の砂質シルトである。混入物などにより2層に細分される。

Ⅱ層：灰白色火山灰降下以降の自然堆積層である。層厚は40～65cmほどで、13層に細分される。いずれも表土や地山崩落土の再堆積層である。なお、I層およびⅡ層は灰白色火山灰の2次堆積層である。

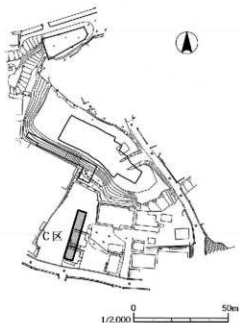
灰白色火山灰層：視覚的所見ではあるが、灰白色火山灰層を確認し、一次堆積層とみられる。層厚は約8cmである。

Ⅲ層：灰白色火山灰堆積以前の自然堆積層である。層厚は最大で40cmを測り、3層に細分される。いずれも表土や地山崩落土の再堆積層である。

Ⅳ層：均質な黒色の砂層である。層厚は8～15cmほどである。

Ⅴ層：オリブ黒色の粘土層である。層厚は10cmほどである。調査区壁断面でSD1溝跡の掘り込みを確認した。

Ⅵ層：にぶい黄褐色を呈する凝灰岩層で、いわゆる地山面である。B区Ⅱ層に対応するとみられ、しまりが強く固い。



第27図 C区位置図

(2) 発見した遺構と遺物

本調査区で検出した遺構には溝跡1条がある。遺物は基本層から、土師器、須恵器、磁器、陶器が出土している。

1) 溝跡

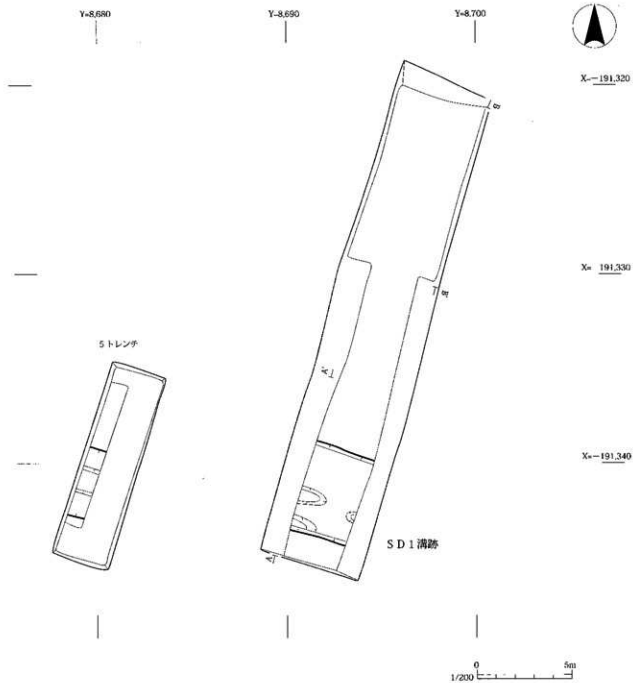
SD1溝跡 (第28図)

調査区南部で検出した北西—南東方向の溝跡である。検出面はⅤ層上面であるが、攪乱により上部が失われているため、掘り込み面は不明である。他の遺構との重複はない。検出長は約3.0mである。規模は上端幅約4.8～5.0m、下端幅約4.3～4.5m、深さ約30cmである。断面形は逆台形を呈し、底面に凹凸がみられる。堆積土は2層に分層される。黒褐色や褐色の粘土で、いずれも自然堆積土である。遺物は出土していない。

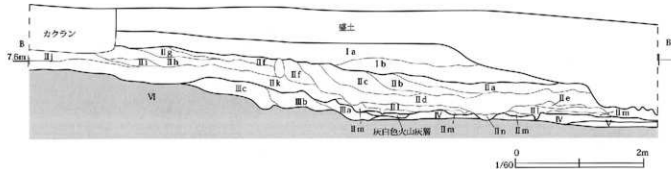
なお、本溝跡は位置や規模などから、平成21年5月に実施した確認調査5トレンチで検出した溝跡と一連の遺構と考えられ、検出総長は約15.0mを測る。

2) 遺構外出土遺物

基本層Ⅱ層、Ⅲ層から土師器、磁器、剥片石器(第31図一6)が出土している。土師器は高環の脚部が2点(第31図一1、2)出土している。器形や調整の特徴から、1は古墳時代前期の塩釜式期、2は古墳時代中期の南小泉式期の範疇に取まるとみられる。磁器は3点出土している。龍泉窯系青磁蓮弁文椀(第31図一3)、皿(第31図一4、5)である。年代はいずれも13～14世紀頃とみられる。

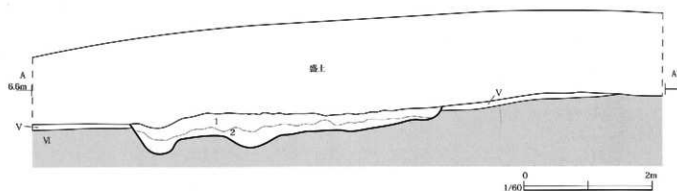


第28図 C区 平面図



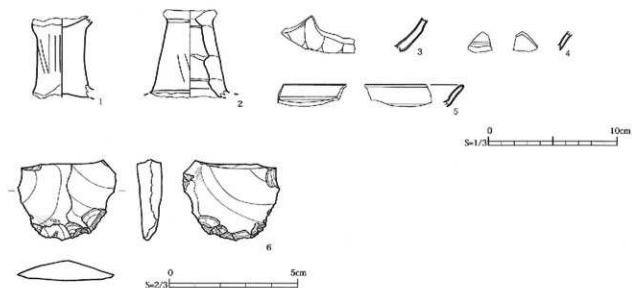
層位	土色・土質	しまり	動物	埋入物等	備考
I a	10YR2/2 黄褐色砂質シルト	ややあり	ややあり	粘土質物をごく少量含む	
I b	10YR2/2 黄褐色砂質シルト	ややあり	ややあり	褐色砂質シルトをブロック状に少量、炭化物の粒をごく少量含む	目録作業
II a	10YR1/1 黄褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	粘土質を地下平に層状に含む	
II b	10YR1/1 黄褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	褐色砂質シルトをアロク状に少量含む	
II c	10YR2/2 黄褐色砂質シルト	ややあり	ややあり	粘土質物をごく少量含む	
II d	10YR2/2 黄褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	粘土質物をごく少量含む	
II e	10YR1/1 泥色砂	あまりなし	ややあり		
II f	10YR2/2 黄褐色砂質シルト	ややあり	ややあり	褐色砂質シルトをブロック状にやや多く、炭化物の粒をごく少量含む	
II g	10YR2/3 黄褐色砂質シルト	ややあり	ややあり	粘土質物をごく少量、褐色砂質シルトブロックをごく少量含む	紅白色火山灰降下以降の自然堆積
II h	10YR2/1 黄褐色砂質シルト	ややあり	ややあり		
II i	2.5YR2/2 黄褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり		
II j	2.5YR2/1 黄褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	白土質をごく少量含む	
II k	10YR2/1 黄褐色砂質シルト	ややあり	ややあり		
II l	10YR1/1 泥色粘土質シルト	ややあり	あり	下部に灰(土)色火山灰のブロックを多量含む	
II m	10YR1/1 黄褐色粘土質シルト	ややあり	あり	炭質、上部より細く、灰白色火山灰の粒を比較的多く含む	
II n	2.5Y/2 黄褐色粘土質シルト	ややあり	あり		
III a	2.5YR4/2 オリーブ黄褐色粘土	ややあり	ややあり		紅白色火山灰降下以降の自然堆積
III b	2.5YR4/1 黄褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	褐色粘土質シルトのブロックをごく少量含む	
IV	5Y/2 オリーブ黄褐色粘土	ややあり	ややあり	均質	
V	5Y/1 オリーブ黄褐色粘土	ややあり	ややあり		
VI	10YR5/2 灰白色砂質シルト	あり	ややあり		しまり速く、硬い凝結状態

第29図 C区 調査区東壁北半部断面図



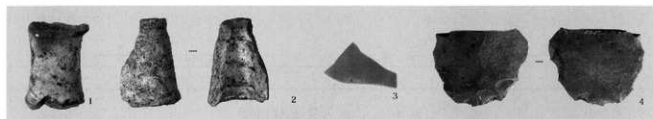
層位	土色・土質	しまり	動物	埋入物等	備考
1	10YR5/1 灰白色粘土	あり	あり	硬泥状が層中に散在する	
2	10YR4/1 黄褐色粘土	あり	あり		

第30図 C区 SD1 溝跡断面図



発掘番号	整理番号	出土層位	標目	器種	法量 (cm)			特徴	写真掲載
					器高 (取)	口径 (取)	器厚 (取)		
1	C-1	3層	溝口ウレ上縁部	内弁	—	—	—	外周：ヘラ土質等	2.1
2	C-2	3層	溝口ウレ上縁部	内弁	—	—	—	外周：ヘラ土質等	2.2
3	J-1	3層	磁器	皿	—	—	—	表面褐色皮膜	2.3
4	J-2	3層	磁器	皿	—	—	—	—	—
5	J-3	3層	磁器	皿	—	—	—	—	—
6	K-5	3層	打製石器	次期Lの形石片	3.2	3.75	0.8	重量 0.0g 石種：頁岩	2.4

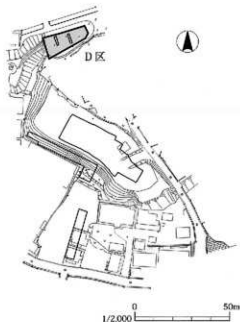
第31図 C区 出土遺物



写真図版2

8 D区の調査

本調査は、開発対象区域のうち、屋敷公園に隣接する地点について、対象地内の東西約23m、南北約13mの土塁状の高まりの性格を明らかにするために行われた。調査は、土塁状の高まりを断ち割る形で南北4.5m、東西1.0mのAトレンチと、南北5.0m、東西0.7mのBトレンチの2箇所の調査区を設定して行った。対象地は丘陵北側の斜面直下に位置し、現地表面の標高は9～10mである。調査面積は8㎡である。また、D区の調査結果から、対象地西端部の土塁状の高まりの北側斜面で追加調査を実施した。



第32図 D区位置図

(1) 基本層序

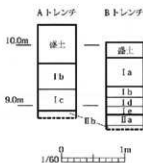
本調査区で確認した基本層は大別2層、細別7層である。調査地点の盛土は層厚約0.25～0.65mである。

I層：礫などを含む丘陵上部から流入した、褐色や黒褐色を呈する表土や地山崩落上の再堆積層である。土質により5層に分層される。層厚は約1.0～1.2mほどである。

II層：2層に分層され、a層はしまりが均質ではないにぶい黄褐色の粘土質シルト、b層はしまりのあるにぶい黄褐色のシルト質粘土である。a層の層厚は35cmほどである。

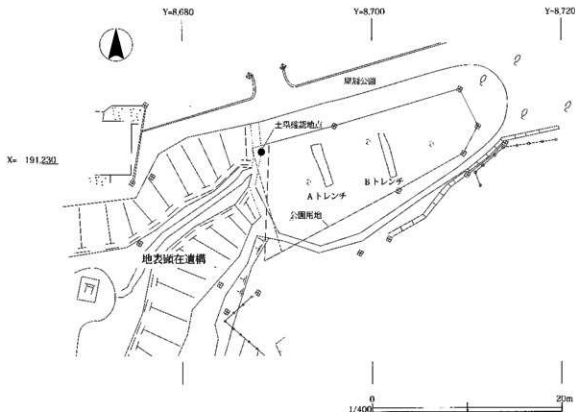
(2) 発見した遺構と遺物

2箇所の調査区の成果から、対象地内中央部の土塁状の高まりは、ガラス片などを含む近年の人為的な盛土であると判明した。また、調査区の土層観察とII層上面での遺構検出作業では遺構、遺物は発見されなかった。これを受けて対象地西端部で実施した追加調査では、現表土下で土塁の構築土を検出し、土塁跡が丘陵西側から調査地点まで残存していることを確認した。



層位	土色・土質	しまり	粒径	遺人物産
I a	10YR5/3 粘厚均質シルト	なし	ややあり	層1～2cmの礫を含む
I b	10YR2/3 黄褐色均質シルト	なし	ややあり	層1～2cmの小礫や砂粒を含む
I c	10YR4/6 黄褐色土質シルト	あり	ややあり	層1～5cmの礫を含む
I d	10YR3/4 褐色均質土質シルト	なし	ややあり	層1～2cmの礫を含む
I e	10YR4/4 褐色均質土質シルト	なし	ややあり	層1～2cmの礫を含む
II a	10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト	あまりなし	250μmにあり	層1～5cmの礫をまばらに多く含む
II b	10YR2/4 にぶい黄褐色シルト質粘土	あり	ややあり	

第33図 D区 基本層序柱状模式図



第34図 D区 トレンチ配置図

9 まとめ

- ① A区は丘陵頂部の南西部に位置する。調査区内では、斜面の地山切り出しによる造成と、その後の2時期および盛土整地の計3時期によって平坦面が形成されている。盛土整地であるⅡ層上面とⅢ層上面および切り出しによって形成された2段からなる小規模な平場、地山であるⅤ層上面で遺構を検出した。検出遺構には、縄文時代の陥し穴とみられる土坑1基、中世に属すると考えられる柱列跡5条、掘立柱建物跡3棟、火葬墓とみられるものも含めて土坑12基、溝跡2条、柱痕跡を伴う多数の柱穴などがある。遺構検出面が3面確認されていることから、遺構には数時期の変遷が想定される。

最も新しい盛土整地のⅡ層上面では、柱痕跡が認められる柱穴が多数検出されていることから、継続的に建物群が成立していたものと考えられる。検出した掘立柱建物跡はいずれも小規模で、柱列跡、掘立柱建物跡の配置には、規則性は認められない。したがって、今回の調査区は位置的には小鶴城の中核もしくは隣接地とみられるものの、それを反映する遺構の発見には至らなかった。

調査区西部に分布するⅢ層上面と切り上りによって形成された平場では、建物跡は検出されなかった。Ⅲ層上面では柱列跡1条と火葬墓と見られる土坑6基、平場では柱列跡1条と火葬墓と見られる土坑2基を検出した。火葬墓は検出面が2面にわたることから、この周辺が一定の期間、墓域として存続していたと考えられる。Ⅲ層上面で検出したS A 10柱列跡、Ⅳ層上面で検出したS A 17柱列跡は、これを区画する施設の可能性がある。また、平場を形成する段に沿って延びる溝跡は、その位置や底面の傾斜から、平場の排水施設としての性格が想定される。

今回発見された遺物は断片的であり、遺構群の具体的な時期を推測する材料に乏しい。しかし、近世以降に下る遺物が出していないことから、城館は近世までには廃絶していたものと考えられる。また、出土した銭貨は、渡米銭のみで構成されており、遺構群の年代を反映しているものとみられる。このことから検出した遺構は概ね小鶴

城跡に関連するものと推定される。また、基本層IV層から出土した美濃産とみられる灰釉の平碗（第22図-11）の年代が16世紀頃と考えられることから、調査区内で確認された整地事業の時期が、概ねこの頃になるものと推測される。

出土遺物には、弥生土器、土師器、須恵器、中世陶器、石器、銭貨（中世銭）などがある。土器類、中世陶器はいずれも小破片で全体の器形を把握できるものはない。

- ② B区はA区の南側にあたり、丘陵斜面直下に位置する。検出された遺構は堀跡1条である。堀跡は、上端幅7m以上、深さ1.9mの大規模なもので、周辺の状況などから堀跡北壁は丘陵斜面と連続するものとみられる。規模や検出位置から、第5次調査で検出した堀跡と同一のものとみられ、丘陵西側斜面から南側斜面直下を巡る配置になっていた可能性が高い。また、第2次・3次調査で検出した堀跡と規模や配置が類似しており、丘陵を囲む一連の堀跡である可能性がある。出土遺物がごく少量であることから、機能時期などを明らかにすることはできないが、状況から小鶴城跡に関連する遺構と考えられる。

出土遺物には、中世陶器である灰釉の小型花瓶(?)がある。瀬戸・美濃産とみられ、年代は15～16世紀頃と推定される。

- ③ C区は丘陵南側の裾部に位置する。本調査区では溝跡1条を検出した。上端幅が3.0mの比較的大規模の大きい溝跡であり、位置や規模などから本調査区の西に位置する確認調査5トレンチで検出した溝跡と同一の遺構と考えられる。小鶴城跡では丘陵を囲む3条の堀跡が確認されている（仙台市教育委員会2001）が、今回の調査では、上部が傾乱によって失われ、掘り込み面が不明であることや調査範囲上の制約、および遺物が出土していないことから、溝跡の展開や年代を明らかにすることはできない。したがって、丘陵を囲む溝跡の一部である可能性もあるが、小鶴城に関わる遺構であるかは断定できない。

基本層から古墳時代に属する土師器、13～14世紀頃のものともみられる龍泉窯系磁器などが出土している。いずれも再堆積層に混入したものである。

- ④ D区は丘陵北西側の斜面直下に位置する。調査の目的は、現状で確認できる土塁状の高まりの性格を明らかにすることである。調査の結果、対象地中央部では、土塁状の高まりは近年の盛上であることが判明し、遺構、遺物は発見されなかった。一方、対象地西端部では、土塁の東端部が検出され、丘陵西側から確認できる地表層に遺構が、調査地点に至る18m以上の長さで残存していることが明らかになった。
- ⑤ 出土した遺物には弥生土器、土師器、須恵器、石器などが含まれる。今回の調査では発見できなかったが、該期の遺構が本来、調査区内に分布していたことを示すものである。

〈引用・参考文献〉

- 仙台市教育委員会 2001 「I 小鶴城跡」『小鶴城跡ほか』仙台市文化財調査報告書第261集
 仙台市教育委員会 2009 「VI 小鶴城跡第3次調査報告書」『山口遺跡ほか』仙台市文化財調査報告書第345集
 仙台市教育委員会 2010 「III 小鶴城跡」『仙台平野の遺跡群XX』仙台市文化財調査報告書第371集
 仙台市史編さん委員会 2006 「小鶴城跡」『仙台市史 特別編7 城跡』



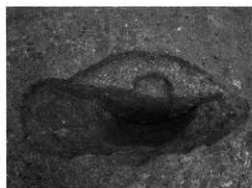
1 SA3 柱列跡全景 (南から)



2 P1 断面 (東から)



3 P2 断面 (東から)



4 P3 断面 (東から)



5 P4 断面 (東から)

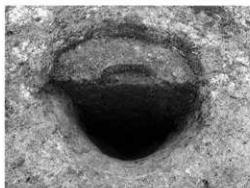
写真図版 3



6 SB4 掘立柱建物跡全景（北から）



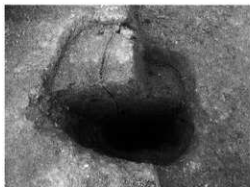
7 P6 断面（南から）



8 P8 断面（南から）



9 P9 断面（南から）



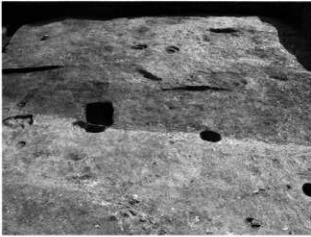
10 P10 断面（南から）



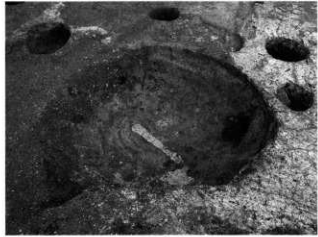
11 SB5 掘立柱建物跡全景（南から）



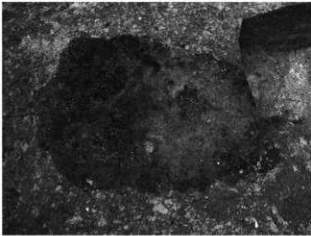
12 SB6 掘立柱建物跡全景（南西から）



13 III層整地層 検出状況(北から)



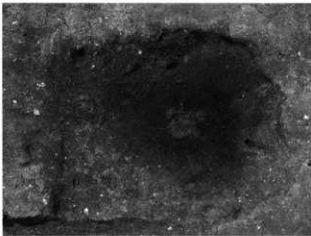
14 SK 8土坑 完掘状況(南から)



15 SK 11土坑 検出状況(南東から)



16 SK 11土坑 断面(北西から)



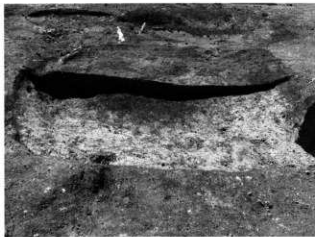
17 SK 12土坑 完掘状況(北から)



18 SK 12土坑 断面(北から)



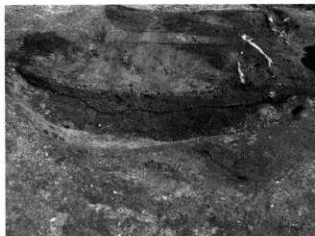
19 SK 13 土坑 断面 (東南から)



20 SK 14 土坑 断面 (東南から)



21 IV層上面遺構検出状況 (北西から)



22 SK 15 土坑 断面 (東南から)



23 SK 16 土坑 断面 (東南から)

24 B区調査区全景（東から）



25 B区 SD1 堀跡断面（南東から）



26 C区東壁断面（南西から）





27 C区SD1 溝跡検出状況（北西から）



28 C区SD1 溝跡完掘状況（北西から）



29 C区SD1 溝跡断面（南西から）



30 D区 対象地全景（北西から）



31 Aトレンチ 全景（南東から）



32 Aトレンチ 西壁断面（北東から）



33 Bトレンチ 全景（南西から）



34 Bトレンチ 東壁断面（西から）

Ⅲ 開場遺跡発掘調査報告

1 調査要項

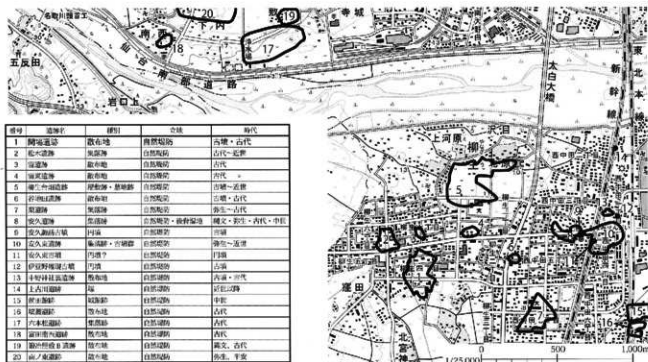
遺跡名	開場遺跡（宮城県遺跡登録番号 01258）		
調査地点	仙台市太白区柳生 4 丁目 6-1.6-10 の各一部		
調査期間	平成 22 年 5 月 7 日、10 日		
敷地面積	301.47㎡		
調査面積	10.2㎡		
調査原因	共同住宅建築工事		
調査主体	仙台市教育委員会		
調査担当	仙台市教育局长生涯学習部文化財課調査調整係		
担当職員	主事 廣瀬真理子	猪狩俊哉	文化財教諭 鈴木健弘 吉野 信

2 調査に至る経過と調査方法

本件は、平成 22 年 4 月 30 日付で、申請者より「埋蔵文化財発掘の届出について」が提出され、平成 22 年 5 月 6 日付 H22 教生文第 114-23 号で回答した。工事内容は、物置、駐輪場、駐車場のアスファルト工事、および共同住宅七部基礎工事である。住宅部基礎工事は、大部分が 50cm 程度の掘削であるが、一部 87.5cm 程度の掘削を伴う。これまでの周辺の調査成果から、掘削は盛土内に取まり、遺構面に達しないと考えられたため、工事立会を実施することとなった。

5 月 6 日に工事立会を行ったところ、50cm の掘下げ部分については、旧表土（Ⅱ層）内であったため、立会いを終了した。しかし、87.5cm の掘下げ部分については、遺構と遺物が検出されたので、本発掘調査の必要があると判断され、実施に至った。

調査は、87.5cm 掘下げの部分（約 8.5 × 1.2 m）を対象に、行った。87.5cm 掘下げた段階で、遺構検出面に達し、精査を行ったところ、調査区西側で性格不明遺構を 1 基検出した。必要に応じて平面・断面図を作製し、デジタルカメラを用いて記録写真を撮影した。

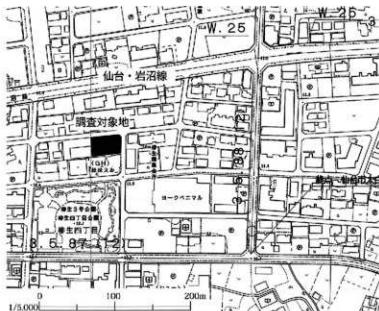


第 1 図 遺跡の位置と周辺の遺跡

3 遺跡の位置と環境

関場遺跡は、仙台市の南端部、J R南仙台駅から西へ約1.2 kmの地点に位置する。遺跡の約1.1 km北に名取川が東流し、その自然堤防上に立地している。遺跡の範囲は東西約2 km、南北約3 kmで、標高は約11～12 mである。

関場遺跡の周辺は、遺跡の分布密度が高く、弥生時代の土器包含層（安久東遺跡）や、古墳時代前期の周溝墓（安久東遺跡、戸ノ内遺跡）や後期集落跡（栗遺跡）、古代の集落跡（安久東遺跡、中田南遺跡）など、主に古墳時代以降の遺構・遺物が多く発見されている。ただし、関場遺跡自体は、古代の遺物散布地となっており、これまで本発掘調査が行われたことはなかった。



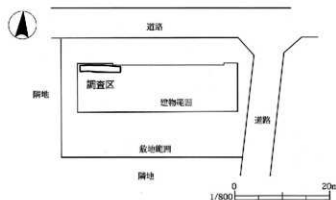
第2図 調査区位置図

4 基本層序

I層：灰黄褐色（10YR4/2）粘土質シルト。
盛土直下の旧水田層である。厚さ約15～25 cmである。

II層：褐色（10YR4/4）粘土質シルト。に
ふい黄褐色粘土質シルトをブロック状
に含んでいる。厚さ10～50 cmで、
底面に凹凸がある。

III層：褐色（10YR4/6）粘土質シルト。遺
構の検出面である。厚さ10～15 cm
である。



第3図 調査区配置図

5 発見遺構と出土遺物

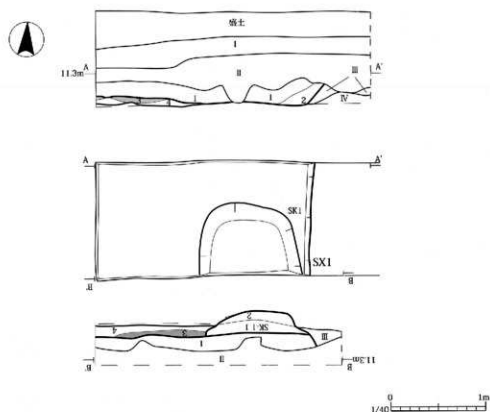
(1) 発見遺構

S X 1 性格不明遺構

調査区西側で検出した。規模は、東西2.2 m以上、南北1.4 m以上である。検出面から貼床状を呈する3層上りまでの深さは15～20 cm、遺構底面までは25～30 cmである。ごく一部の検出であるため、平面形等については不明である。堆積土は4層に分層される。1～2層は自然堆積土であり、焼土や炭化物の粒などをごく少量含む褐色の粘土質シルトである。3、4層は、人為的埋土であり、特に2～8 cm程度の厚さを持つ3層は、貼床状を呈している。

付属施設として、壁際に土坑（SK1）を1基検出した。規模は、東西1.1 m、南北0.75 m以上、深さ約24 cmである。堆積土は2層に分層され、いずれも自然堆積土である。

遺物は、堆積上1層からロクロ土師器製の小片が若干出土している。2層から非ロクロ土師器環、甕、甔（図5-2）が出土している。また、土坑内堆積土1層から非ロクロ土師器環（図5-1）、礫が出土している。このうち、土坑出土の土師器環は、その特徴から古墳時代後期の住社式の土器であり、年代は6世紀中葉～末葉頃である。



層位・遺構	土色・土質	土まじり	割石	層人物等	備考
I	10V94/2 灰黄色粘土質シルト	あり	ややあり	ガライ化している	割石層
II	10V94/1 灰褐色土質シルト	ややあり	あり	上記の遺構内(10V94/3) 粘土質シルトをブロック状に含む	割石層
III	10V94/4 褐色粘土質シルト	あり	ややあり		
IV	10V94/5 褐色粘土質シルト	あり	あり	礫を含む	
SX1	1 10V94/6 褐色粘土質シルト	あり	あり	直径10cm程度の礫、炭化物少量、粘土ブロックを若干含む。	
	2 7.5V94/6 褐色粘土質シルト	あり	ややあり	粘土ブロックを少量含む。	
	3 10V94/6 褐色粘土質シルト	あり	あり	細かい高麗砂(10V94/6) 砂質シルトを塊状に含む	人為的埋土 割石状
	4 10V94/6 褐色粘土質シルト	ややあり	あり		人為的埋土 割石埋土
	K-1 1 10V94/6 褐色粘土質シルト	あり	あり	埋土層上1層より、割石あり	
K-1 2 7.5V94/6 褐色粘土質シルト	あり	あり	上層より粘性あり、直径50~100mmの礫を含む		

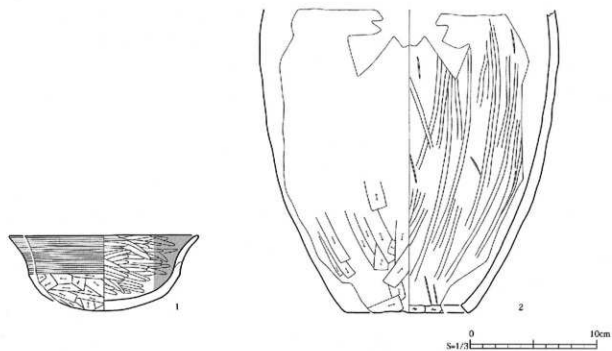
第4図 平面・断面図

(2) 遺構外出土遺物

基本層1層からロクロ土師器高台付環・甕などが出土している。

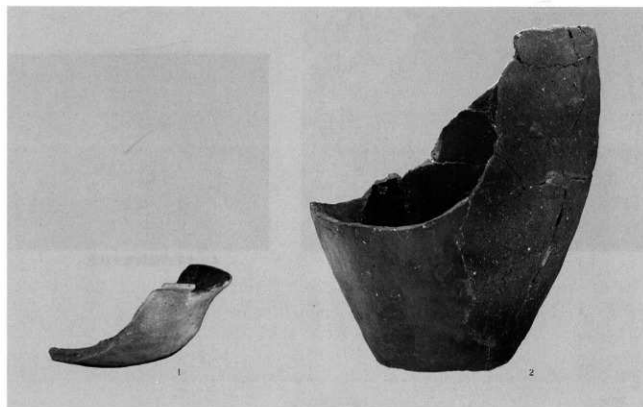
6 まとめ

今回の調査で、遺構を1基検出した。調査面積が限られているため、遺構の性格についての詳細は不明である。しかし、遺構内堆積土1層に炭化物や焼土塊が含まれていること、3層が粘床状を呈していることなどから、竪穴住居跡の可能性が指摘できる。遺構の時期は出土遺物から、古墳時代後期である。



図中番号	図解番号	遺物名	出土層位	場所	器種	法量 (cm)			特徴・備考	写真図版
						器高	口径	口径		
1	C-1	SK1 SK2	1	赤朽ケロ土器部	鉢	6.0	14.9	—	内面：ヘラミゴキ→定形形迹 外面：白粉厚コナダ、基部ヘラケズリ	1
2	C-2	SK1	2	赤朽ケロ土器部	甕	24.0	—	27	内面：ヘラナダ→ヘラミゴキ、外面：ヘラケズリ 黒底式	2

第5図 出土遺物



写真図版 1



1 調査区全景（東から）



2 SX1 性格不明遺構検出状況（東から）



3 土坑検出状況（東から）



4 土坑内遺物出土状況

IV 今泉遺跡第8次発掘調査報告

1 調査要項

遺跡名	今泉遺跡（宮城県遺跡登録番号 01235）
調査地点	仙台市若林区今泉二丁目61
調査期間	平成22年1月27日～2月2日
調査対象面積	65.99㎡
調査面積	30㎡
調査原因	個人住宅建築工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担当職員	主事 小泉博明 文化財教諭 吉野 信

2 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成21年12月21日付で、申請者より提出された、個人住宅建築工事に伴う「埋蔵文化財発掘の届出について」に対して、文化財保護法第93条（H21教生文第152-145号で回答）に基づき実施した。調査は平成22年1月26日に着手し、遺構が検出されたため、引き続き本発掘調査を実施した。住宅建築範囲内に、東西10.0m×南北3.0mの調査区を設定した。重機により表土およびI、II層を除去後、III層上面において、人力により、遺構検出作業、遺構精査を行った。必要に応じて平面・断面図を複製し、デジタルカメラを用いて記録写真を撮影した。

3 遺跡の位置と環境

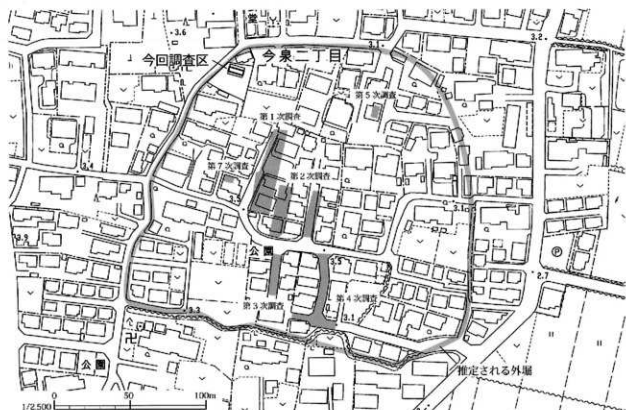
今泉遺跡は、仙台市の東南部、JR仙台駅から東南約6.5kmの地点に位置する。広瀬川と名取川の合流地点より東へ約1.7kmの場所にあり、名取川左岸の後背湿地の自然堤防上に立地する（標高約2～4m）。

文献等から「須田玄蕃」が居住した中世の城館として古くから知られていたが、第1～4次調査において、縄文時代後期から江戸時代にかけての複合遺跡であることが判明している。

中世城館跡としての全体像は不明確であるが、これまでの発掘調査において、幅6～8mの南辺外堀の一部が確認され、その内部には掘立柱建物跡、井戸跡、土坑、橋脚などが多数検出されている。12世紀代に屋敷地が成立し、南北朝時代に城館として改変・整備され、17世紀前半まで使用されたと推定されている。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡



第2図 既調査区的位置と今回の調査区

4 基本層序

第8次調査で確認した基本層は大別5層、細別8層である。今回の調査で検出した遺構には、溝跡3条、近世墓4基がある。遺構掘り込み面はⅡ層上面とⅢ層上面であるが、すべての遺構をⅢ層上面で検出している。

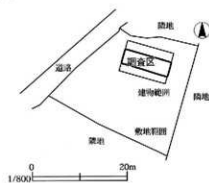
Ⅰ層：調査区全域に分布する旧耕作土で、さらに層相から4層に細分される。Ⅰa層はにぶい黄褐色（10YR4/3）のシルトで、層厚は約10～20cmである。表土直下の旧耕作土である。Ⅰb層は褐色（10YR4/4）のシルトで、層厚は約20～30cmである。調査区全域に分布する。Ⅰc層はにぶい黄褐色（10YR5/3）のシルト、Ⅰd層は灰黄褐色（10YR4/2）のシルトで、層厚は10～20cm程である。いずれも部分的な堆積である。

Ⅱ層：黒褐色（10YR3/2）の粘土質シルトである。層厚は10cm程である。近世墓群、S D 5溝跡の掘り込み面である。

Ⅲ層：にぶい黄褐色（10YR5/4）の粘土質シルトで、自然堤防を形成する水成堆積層である。層厚は0.5m程である。S D 1溝跡、S D 7溝跡の掘り込み面である。

Ⅳ層：灰黄褐色（10YR6/2）のシルトで、暗灰黄色（2.5YR4/2）の粘土をラミナ状に含む、自然堤防を形成する水成堆積層である。層厚は約1.2mである。

Ⅴ層：灰オリーブ色（5YR6/2）の、しまりのない均質な砂層で、自然堤防を形成する水成堆積層である。

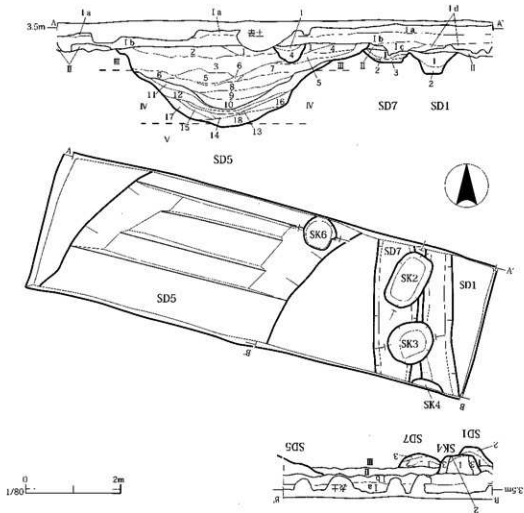


第3図 調査区配置図

5 発見遺構と出土遺物

今回の調査で検出した遺構には、溝跡3条、近世墓4基がある。遺物は基本層、遺構堆積土から、土師器、近世陶磁器、金属製品（釘など）、木製品（漆器）、竹製品（煙管筒）、煙管、銭貨、一字一石経などが出土している。

なお、今回の調査では、すべての遺構をⅢ層上面で検出しているが、S D 5溝跡、近世墓の掘り込み面がⅡ層上面であることを調査区壁面の土層観察で確認している。



層位	土質・土色	しまり	粘性	混入物等	層位	土質・土色	しまり	粘性	混入物等
Ia	10YR4/3に近い黄褐色シルト	なし	あまりなし	碎屑 炭化植物を少量含む	II	10YR2/2 黄褐色粘土質シルト	ややあり	中	10YR3/2 黄褐色粘土質シルト
Ib	10YR4/4 褐色シルト	なし	あまりなし	炭屑/ブロックを少量含む	III	10YR5/4 にごり黄褐色粘土質シルト	あり	ややあり	10YR5/4 に近い黄褐色粘土質シルト
Ic	10YR5/3 に近い黄褐色シルト	なし	あまりなし	炭屑/ブロックを少量含む	IV	10YR5/2 灰褐色シルト	あり	あまりなし	10YR5/2 に近い黄褐色シルト
Id	10YR4/2 黄褐色シルト	なし	あまりなし	炭屑を多く含む	V	5YR5/2 灰黄色/黄砂	なし	なし	5YR5/2 に近い黄褐色シルト

発掘・名称	土質・土色	しまり	粘性	混入物等	層位	土質・土色	しまり	粘性	混入物等		
SD1	1	10YR5/2 黄褐色粘土	ややあり	あり	炭屑/ブロックを少量含む	SD1	1	10YR5/2 黄褐色粘土	ややあり	炭屑/ブロックを少量含む	
	2	10YR5/3 黄褐色粘土	ややあり	あり	炭屑/ブロックを少量含む		2	10YR5/3 黄褐色粘土	ややあり	炭屑/ブロックを少量含む	
	1	10YR5/3 に近い黄褐色粘土	ややあり	あまりなし	炭屑/ブロックを少量含む		3	10YR5/2 黄褐色粘土	ややあり	炭屑/ブロックを少量含む	
	2	10YR5/3 に近い黄褐色粘土	ややあり	あまりなし	炭屑/ブロックを少量含む		4	10YR5/1 黄褐色粘土	ややあり	炭屑/ブロックを少量含む	
	3	10YR5/2 黄褐色粘土	ややあり	ややあり	炭屑/ブロックを少量含む		5	10YR4/1 黄褐色粘土	ややあり	炭屑/ブロックを少量含む	
	4	10YR5/1 黄褐色粘土	ややあり	あり	炭屑		6	2.5Y3/2 黄褐色粘土	ややあり	あり	炭屑/ブロックを少量含む
	5	10YR4/1 黄褐色粘土	ややあり	あり	炭屑/ブロックを少量含む		7	10YR4/1 黄褐色粘土	あり	あまりなし	炭屑/ブロックを少量含む
	6	2.5Y3/2 黄褐色粘土	ややあり	あり	炭屑/ブロックを少量含む		8	10YR4/1 黄褐色粘土	あり	あまりなし	炭屑/ブロックを少量含む
	7	10YR4/1 黄褐色粘土	あり	あまりなし	炭屑/ブロックを少量含む		9	10YR5/4 にごり黄褐色粘土	あり	ややあり	炭屑/ブロックを少量含む
	8	10YR4/1 黄褐色粘土	あり	あまりなし	炭屑/ブロックを少量含む		10	10YR5/4 にごり黄褐色粘土	あり	ややあり	炭屑/ブロックを少量含む
	9	10YR5/4 にごり黄褐色粘土	あり	ややあり	炭屑/ブロックを少量含む		11	2.5Y3/1 黄褐色粘土	なし	あり	炭屑/ブロックを少量含む
	10	10YR5/4 にごり黄褐色粘土	あり	ややあり	炭屑/ブロックを少量含む		12	2.5Y3/1 黄褐色粘土	なし	あり	炭屑/ブロックを少量含む
	11	2.5Y3/1 黄褐色粘土	なし	あり	炭屑/ブロックを少量含む		13	2.5Y3/1 黄褐色粘土	なし	あり	炭屑/ブロックを少量含む
	12	2.5Y3/1 黄褐色粘土	なし	あり	炭屑/ブロックを少量含む		14	2.5Y3/1 黄褐色粘土	なし	あり	炭屑/ブロックを少量含む
	13	2.5Y3/1 黄褐色粘土	なし	あり	炭屑/ブロックを少量含む		15	2.5Y3/1 黄褐色粘土	なし	あり	炭屑/ブロックを少量含む
	14	2.5Y3/1 黄褐色粘土	なし	あり	炭屑/ブロックを少量含む		16	2.5Y3/1 黄褐色粘土	あまりなし	あり	炭屑/ブロックを少量含む
	15	2.5Y3/1 黄褐色粘土	あまりなし	あり	炭屑/ブロックを少量含む		17	2.5Y3/1 黄褐色粘土	なし	あり	炭屑/ブロックを少量含む
16	2.5Y3/1 黄褐色粘土	なし	あり	炭屑/ブロックを少量含む	18	2.5Y4/1 黄褐色粘土	なし	あり	炭屑/ブロックを少量含む		
17	2.5Y4/1 黄褐色粘土	なし	あり	炭屑/ブロックを少量含む							
SD7	1	10YR2/2 黄褐色粘土	ややあり	ややあり	炭屑/ブロックを少量含む						
	2	10YR3/1 黄褐色粘土	ややあり	ややあり	炭屑/ブロックを少量含む						
	3	10YR3/1 黄褐色粘土	ややあり	ややあり	炭屑/ブロックを少量含む						
SK4	1	10YR4/2 黄褐色粘土	ややあり	ややあり	炭屑/ブロックを少量含む						
	2	10YR4/2 黄褐色粘土	なし	あり	炭屑/ブロックを少量含む						
	3	10YR4/1 黄褐色粘土	あり	ややあり	炭屑/ブロックを少量含む						

第4図 平面・断面図

(1) II層上面検出遺構

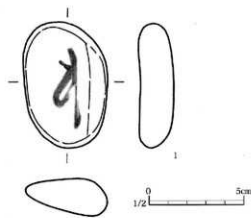
II層上面では溝跡1条、近世墓4基を検出している。

1) 溝跡

SD5溝跡

調査区西半部に位置するわずかに弧状を呈するとみられる北東—南西方向の溝跡である。SK6近世墓跡と重複し、これよりも古い。検出長は約3.6mで、さらに調査区外の南北へ延びる。規模は上端幅約4.3~4.8m、下端幅約2.4m、深さ1.7mほどである。断面形は上部が開くU字状を呈する。堆積層は基本層II層を含む人為的埋め土と、下層の植物遺存体や基本層の崩落土をラミナ状に含む黒褐色粘土などの自然堆積土に人別される。

遺物は自然堆積層から一字一石経が2点出土し、うち1点(第5図-1)は梵字の「𑖀(「バ」)」と考えられる。



番号 番付	登録 番号	種類	単位	形状	寸法 (cm)			重量 (g)	写真 撮影
					長さ	幅	厚		
1	X-1	SD5	15	一字一石経	8.89	4.40	1.90	重量 43.8g	2-1
—	X-2	SD5	15	一字一石経	5.95	7.80	1.15	重量 35.4g	2-2

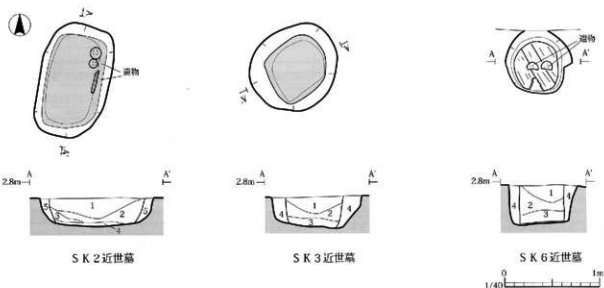
第5図 SD5溝跡出土遺物

2) 近世墓

SK2近世墓

調査区東半部に位置する。他の遺構との重複はない。掘方の平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸約1.20m、短軸約0.75m、深さ31cmである。断面形は箱状を呈する。木棺は残存していないが、長方形の箱形木棺とみられる。

遺物は、木棺底面の北東部に漆器、煙管筒(第7図-5)、煙管(第7図-6)、銭貨(寛永通宝)2枚(第7図-3、4)が副葬されており、木棺内部堆積土からは土師器片、近世磁器2点(第7図-1、2)、釘が出土している。



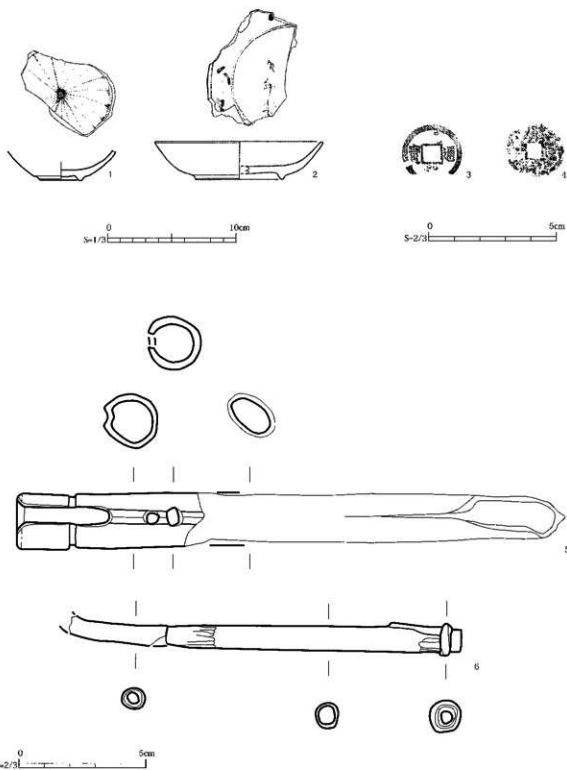
SK2近世墓

SK3近世墓

SK6近世墓

遺構・部位	土質・土色	しりり	写生	墓内物等	備考
SK2	1 25Y4/2黄褐色粘土質シルト	あまりなし	ややあり	粘土ブロックを少量含む	本坑内部 埋積土
	2 10YR2/3暗褐色粘土質シルト	あまりなし	ややあり	粘土ブロックを少量含む	
	3 10YR4/7黄褐色粘土	あまりなし	あり	粘土を多く含む	埋方埋土
	4 10YR2/2黄褐色粘土	なし	あり	炭化陶器、漆片、漆器片(黒色・赤色)を少量含む	
SK3	1 25Y4/2黄褐色粘土	あまりなし	あり	粘土ブロック、黒粘土のブロックを多く含む	木棺内部 埋積土
	2 10YR2/3暗褐色粘土質シルト	あまりなし	ややあり	粘土ブロックを多く含む	
	3 10YR2/2黄褐色粘土	なし	あり	粘土を多く含む。炭化陶器上の小ブロック、漆器片(黒色・赤色)、骨片を多く含む	
SK6	1 10YR4/7黄褐色粘土質シルト	あり	ややあり	基本層III・埋方ブロックを多く含む	埋方埋土
	2 10YR4/3赤褐色粘土	あまりなし	ややあり	粘土を多く含む	
	3 25Y4/2黄褐色粘土	あまりなし	ややあり	粘土を多く含む	木棺内部 埋積土
	4 10YR2/2黄褐色粘土質シルト	あり	ややあり	埋方ブロックと赤褐色(10YR2/2)の粘土ブロックを少量含む	

第6図 土坑 平面・断面図



出土層位	収蔵番号	遺物名	部位	材質	名称	尺貫 (mm)			数量・備考	写真番号
						長さ (mm)	口径 (mm)	底径 (mm)		
1	J-2	SK2	1~3	磁器	皿	2.35	—	3.2	伊賀産・17c中頃	2-5
2	J-1	SK2	1~3	磁器	皿	3.0	(1.5)	2.8	伊賀産・17c中頃、異径(上と下)の皿	2-6
3	H-2	SK2	4	銅板	銅小道具	2.35	—	0.1	—	2-7
4	H-3	SK2	4	銅板	銅小道具	2.4	—	0.1	—	2-8
5	L-1	SK2	4	竹筒	竹筒	22.0	2.2	0.3	—	2-9
6	L-2	SK2	4	銅板	銅小道具	1.5	1.6	1.3	東京 埋蔵品(30) 尺貫秤:一 新平検定部秤:0.9 出17 埋蔵品(21) 尺貫秤:一 新平検定部秤:一 蔵平 埋蔵品(11.0) 尺貫秤:1.1 内秤:0.8 新平検定部秤:0.9	2-4

第7図 SK2近世墓出土遺物



出土層位	発掘番号	遺物名	単位	場所	説明	法量 (cm)			特徴・備考	写真図版
						長さ (F)	幅	厚		
1	S-1 1	SK3	木棺底面	溝	寛永通宝	5.4	—	0.1	西側面	2-9
2	S-4 2	SK3	木棺底面	溝	寛永通宝	2.5	—	0.1	西側面	2-10
3	S-1 3	SK3	木棺底面	溝	寛永通宝	2.4	—	0.1	西側面	2-11
4	S-1 4	SK3	木棺底面	溝	寛永通宝	2.4	—	0.1	文様 字季入文 新橋水 寛永2年(1665) 辨	2-12

第8図 SK3近世墓出土遺物

SK3近世墓

調査区東半部に位置する。他の遺構との重複はない。掘方の平面形は径1.0mほどの円形を呈する。深さは35cmである。断面形は箱形を呈する。木棺は残存していないが、円形木棺とみられる。

遺物は木棺底面から銭貨(寛永通宝)が4枚(第8図-1~4)重なった状態で出土し、木棺内部堆積土から釘とみられる金属製品が出土している。

SK4近世墓

調査区東半部に位置する。他の遺構との重複はない。掘方の平面形は隅丸長方形を呈するものとみられる。検出は一部であるが、規模は南北0.20m以上、東西約0.70m、深さ30cmである。断面形は箱状を呈する。木棺は残存していない。木棺の形状は不明である。

遺物は出土していない。

SK6近世墓

調査区中央部に位置する。SD5溝跡と重複し、これよりも新しい。平面形は径0.7mほどの円形を呈する。深さ40cmである。断面形は箱形を呈する。木棺は円形木棺で、底板のみが残存する。

遺物は木棺底面の中央部から漆跡2点が出土している。

(2) III層上面検出遺構

III層上面では、溝跡2条を検出している。

1) 溝跡

SD1溝跡

調査区東半部に位置する北西-南東方向の溝跡で、さらに調査区外の南北へ延びる。SD7溝跡と重複するが、新旧関係は明らかにできなかった。検出長は約3.0mである。規模は上端幅約0.6~0.8m、下端幅約0.3~0.4m、深さは40cmほどである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は2層に分層され、いずれも黒褐色粘土の自然堆積土である。

遺物は土師器片がごく少量出土している。

SD7溝跡

調査区東半部に位置する北西-南東方向の溝跡で、さらに調査区外の南北へ延びる。SD1溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。検出長は約3.0mである。規模は上端幅約0.8m、下端幅約0.5~0.7m、深さ15cmほどである。断面形は逆台形-U字状を呈し、壁は底面からやや急に立ち上がる。堆積土は3層に分層され、いずれも黒褐色粘土の自然堆積土である。

遺物は土師器片がごく少量出土している。

6 SK2 近世墓出土竹製煙管筒について

調査区東半部の SK2 近世墓から、煙管を収納した状態で竹製品が出土している。形態から腰差し煙草入れの「煙管筒」と推定される。煙管筒は、木棺の東壁際底面から、木棺東辺と平行する状態で漆器、寛永通宝とともに出土している。木棺内に納められた副葬品と考えられる。煙草入れを構成する袋、鎖・紐、緒締などは確認されていない。土圧による変形が認められ、端部を欠損している。現状で残存長 21.3cm、直径 2.2cm である。挿入口側の端面は残存状況が良好で、大きく手がかえられておらず、自然面とみられる。彫刻や蒔絵などの装飾は認められない。挿入口の切断面は滑らかに仕上げられている。挿入口から節に向かって長さ 3.8cm、幅 0.7cm の切り欠きがなされ、その中に幅 3.0mm、深さ 2.0mm ほどの溝が全周して彫り込まれている。また、節の上方には、紐通しの孔とみられる径 4.5mm の円形と径 6.0mm のやや楕円形に近い 2 個の小孔が穿たれている。小孔から下方は、腐食のため器面の観察はできない。

煙管筒には煙管 1 点が収められていた。煙管は雁首および吸口が羅字から外れた状態であったことから、収納されていた際の状況は不明である。雁首および吸口の残存状態はいずれも良好ではなく、全体の形状を把握することはできない。吸口は羅字との接合部に燃りを掛けた紐状の植物繊維が残存しており、装飾が施された可能性がある。羅字は竹製である。

煙管筒に納められていた煙管の雁首の形状から、18 世紀以降の時期のものと考えられる。竹製煙管筒の遺跡からの出土例は、所見の限り、県内ではこの資料が唯一とみられる。

7 まとめ

- ① 今回の調査地点は、今泉遺跡の北西部にあたり、今泉城跡外郭推定地の東に位置する。今回の調査では溝跡 3 条、近世築 4 基を検出した。遺構には S D 1・7 溝跡→S D 5 溝跡→近世墓群の 3 段階の変遷がある。
- ② 近世墓群は、副葬品が量的にも内容的にも乏しく、時期を推定することは難しいが、SK2・3 近世墓から出土した古銭「六道銭」の鋳造年代から 17 世紀後半～18 世紀以降と考えられる。また、SK2 近世墓から出土した煙管の雁首の形態も 18 世紀以降と考えられ、年代的には矛盾しない。したがって、17 世紀後半～18 世紀以降の年代が考えられる。遺構の重複関係と調査区内の遺構の分布から、S D 5 溝跡の埋め戻しの後、短期間のうちに対象地と周辺が盛域に移行したと推定される。
- ③ 調査区中央部で検出した S D 5 溝跡は上端幅 4.3 m 以上、深さ 1.7 m を測る大規模な溝跡である。部分的な調査ではあるが、その規模から今泉城に関連する遺構と推定され、廃絶時に埋め戻されたものと考えられる。調査区内では、同時期とみられる遺構が検出されていないことから、周辺は空地であり、その位置関係からも S D 5 溝跡が城館を区画する北西部の外堀跡である可能性が高い。出土遺物が乏しく、機能時期は不明であるが、重複する近世墓の年代から、埋め戻しの時期が 17 世紀後半以前に遡る可能性がある。
- ④ 最も古い遺構群は、II 層に覆われる S D 1・7 溝跡である。これまでの調査の成果から、中世以前の遺構である可能性もあるが、出土遺物がごく少量であり、性格・時期などを明らかにすることはできなかった。
- ⑤ 今回の調査で出土した竹製煙管筒は、県内初の発見例とみられる。

<参考文献>

- 仙台市教育委員会 1980『今泉城跡』仙台市文化財調査報告書第 24 集
 仙台市教育委員会 1983『今泉城跡』仙台市文化財調査報告書第 58 集
 仙台市教育委員会 1994『今泉遺跡』仙台市文化財調査報告書第 185 集
 仙台市教育委員会 1995『今泉遺跡』仙台市文化財調査報告書第 201 集
 多賀城市教育委員会 1998『大日北遺跡』多賀城市文化財調査報告書 49 集
 古泉 弘 2001『遺体収容容器』『図説江戸考古学辞典』柏書房 pp.143-144
 仙台市史編纂委員会 2006 仙台市史特別編 7 城館編



1 遺構検出状況（東から）



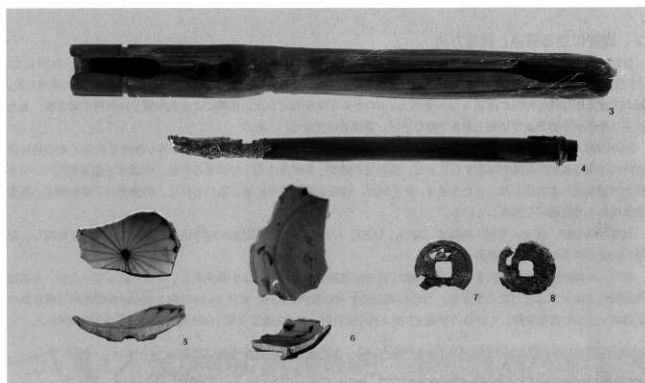
2 遺構完掘状況（東から）



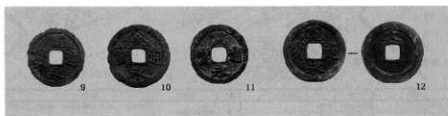
3 SD5 溝跡 断面（南西から）



SD5 溝跡 出土遺物



SK2 近世墓 出土遺物



SK3 近世墓 出土遺物

V 荒井畑中東遺跡発掘調査報告

1 調査要項

遺跡名	荒井畑中東遺跡 (宮城県遺跡登録番号 01568)
調査地点	仙台市若林区荒井字畑中 39 他
調査期間	平成 22 年 5 月 17 日～ 21 日
調査対象面積	166.03㎡
調査面積	63.5㎡
調査原因	診療所建築工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係
担当職員	主事 猪狩俊哉 文化財教諭 吉野 信

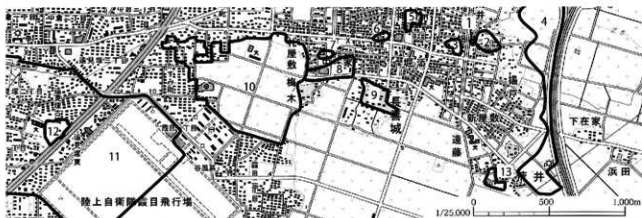
2 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成 22 年 3 月 8 日付で、申請者より提出された「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」に対して、文化財保護法第 93 条（H21 教生文第 180-35 号で回答）に基づき実施した。調査は平成 22 年 5 月 17 日に着手した。調査区は建物建築範囲内に南北 3 m × 東西 10 m のトレンチを設定した。重機により基本層 1～IV 層を除去後、人力により基本層 V 層および VI 層上面まで掘り下げ、遺構検出作業を行った。

調査の結果、古墳時代前期の土師器が出土し、同時期の土坑 2 基や時期不明の溝跡等が検出された。その他に古墳時代前期の遺構の有無を確認することと、溝跡等の時期・規模等を明らかにするため、申請者と協議を行い、引き続き本発掘調査を実施した。また S K 1、2 土坑は、調査対象範囲外に延びることから、申請者の了解を得て、調査対象域外まで調査区を拡張している。

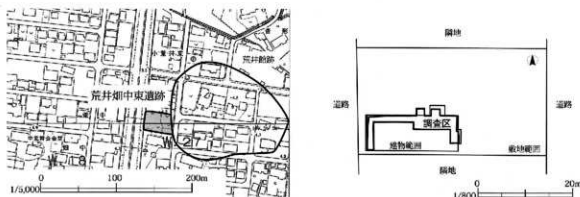
調査記録図は、適宜、平面・断面図（縮尺：1/20、1/100）および遺物出土状況図（縮尺：1/10）を作成し、記録写真はデジタルカメラで撮影した。

なお、本遺跡は、発掘調査までは荒井館跡（宮城県遺跡登録番号 01232）隣接地として取り扱っていたが、古墳時代前期の土坑が確認されたことから、今回の調査区を含む東西 40 m、南北 34 m の約 1,360㎡の範囲を「荒井畑中東遺跡」として新規登録している（平成 23 年 1 月 28 日付、H 22 教生文第 1063 号で遺跡発見の届出提出）。



番号	遺跡名	種別	年代	時代	番号	遺跡名	種別	土地	時代
1	荒井畑中東遺跡	古墳地	自然発露	古墳	8	中丘塚南遺跡	土坑跡群、土坑群、方石列石群、列石群	自然発露	徳生・古墳・平安・中世・近世
2	荒井館跡	城跡	自然発露	中世	9	長丘塚跡	城跡	自然発露	中世
3	荒井畑中東遺跡	古墳地	自然発露	古墳・奈良・平安・中世	10	新石塚跡	城跡	自然発露	奈良・平安
4	赤形遺跡	古墳地	自然発露	古墳・古墳・奈良・平安・中世	11	新石塚遺跡	城跡跡・城跡跡	自然発露	奈良・古墳・奈良・平安・中世
5	井ノ上遺跡	内堀・外堀跡・土坑地	自然発露	古墳・奈良・平安・中世	12	溝跡遺跡	掘り出し溝	自然発露	古墳中世
6	長塚南遺跡	古墳地	自然発露	古墳・奈良・平安	13	下丘塚遺跡	古墳地	自然発露	平安
7	赤形南遺跡	古墳地	自然発露	平安					

第 1 図 遺跡の位置と周辺の遺跡



第2図 調査区の位置と配置図

3 遺跡の位置と環境

荒井畑中東遺跡は、仙台市の東南部、JR 仙台駅から東南東約 6km の荒井地区に位置する。南方に広瀬・名取川が流れ、その自然堤防上に立地している（標高 3～5m）。本遺跡の周辺には、所在地の地名から中近世の城館跡と考えられている荒井館跡が東側に隣接し、西側には荒井畑中東遺跡がある。さらに西側には高屋敷遺跡、押口遺跡、中在家遺跡、中在家南遺跡が分布している。南東には長喜城跡がある。

古墳時代前期の遺構や遺物は、中在家南遺跡、荒井畑中東遺跡、高屋敷遺跡、押口遺跡で確認されており、本遺跡の立地する自然堤防上には古墳時代前期の集落跡の存在が想定されている（仙台市教委 1996）。

4 基本層序

基本層は、大別 6 層、細別 7 層確認された。I 層は褐色（7.5YR4/3）シルトの畑耕作土で、調査区南側で薄く、北側ほど厚くなっている。II 層は褐色（7.5YR4/3）粘土質シルトで、近・現代の客土層と考えられる。黄褐色と黒褐色のシルトブロックの含有状況の違いで細別できる。III 層は灰黄褐色（10YR4/2）粘土質シルトで、調査区南側ほど厚く堆積している。IV 層は灰黄褐色（10YR4/2）粘土質シルトで、黄褐色と黒褐色のシルトブロックを多量に含んでいる。調査区の南西部にのみ分布する。V 層はにぶい黄褐色（10YR6/4）シルトで、上面が今回の遺構検出面である。VI 層は明黄褐色（10YR6/6）砂質シルトである。

5 発見遺構と出土遺物

土坑 2 基、溝跡 7 条、性格不明遺構 1 基、ピット 2 基を検出した。V 層上面まで掘り下げて遺構検出作業を行ったが、調査区壁断面の観察により III 層上面ないし IV 層上面から掘り込まれている遺構が確認されたため、検出層位ごとに記述する。遺物は、溝跡から土師器、石器、土坑から土師器、土製品、石器、炭化材、自然木が出土している。

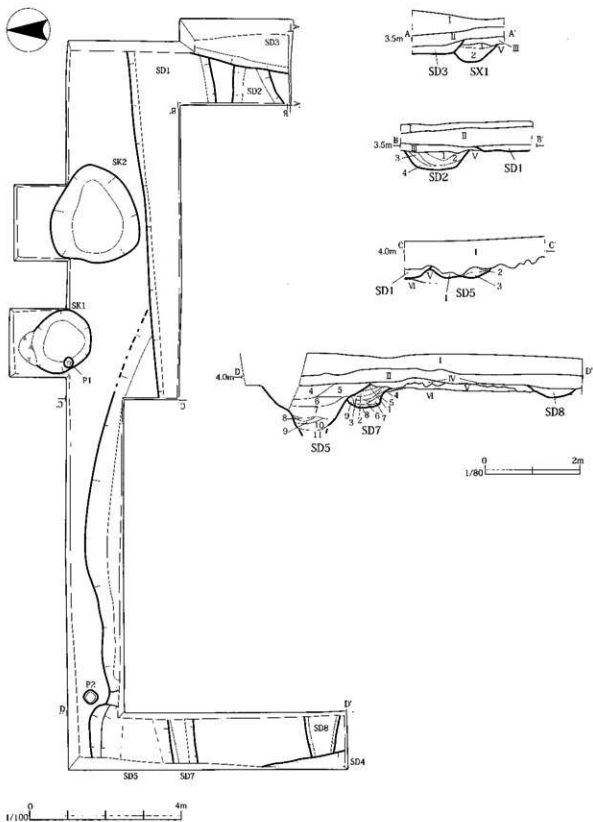
(1) III 層上面遺構

III 層上面の遺構は、溝跡 3 条（SD 1、3、4 溝跡）である。

1) 溝跡

SD 1 溝跡

調査区東半で検出された東西方向の溝跡である。SD 3、5 溝跡と重複し、SD 3 溝跡より古く、SD 5 溝跡より新しい。検出長は約 9.0 m であるが、さらに調査区外の東西に延びる。上端幅約 2.2 m、下端幅約 1.7 m の規模で、深さは 10～30 cm である。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がり、断面形は浅い逆台形を呈する。堆積土は灰黄褐色粘土質シルトの単層である。出土遺物は土師器片 1 点のみで、時期は不明である。



番号	土名・土質	粘性	しほり	顕在物	説明
I	7.5YR4/1 黄褐色シルト	中や有り	強	ワラをブロック状に含む	築造時土
II a	7.5YR4/2 黄褐色土質シルト	あり	あり	黄褐色シルトをブロック状に含む	瓦葺きの壁面
II b	7.5YR4/4 黄褐色土質シルト	あり	あり	黄褐色・黄褐色シルトをブロック状に少量含む	造りの残り込み面
III	10YR4/2 灰褐色粘平質シルト	あり	あり	硬化	造りの残り込み面
IV	10YR4/2 灰褐色粘土質シルト	中や有り	あり	黄褐色・黄褐色シルトをブロック状に多く含む	造りの残り込み面
V	10YR6/4 灰赤・黄褐色シルト	あり	中や有り	凝結に凝結している。凝結による塊状が散見	造りの残り込み面
VI	10YR6/6 灰褐色粘質シルト	あり	弱	一部散見。一部グライ化	造りの残り込み面

第3図 遺構配置図・断面図

遺構	層位	土色・性状	粘性	しじり	埋入物・転写物	
SD1	1	10YR4/2 灰褐色粘土質シルト	あり	あり	にじり・黄褐色砂をブロック状に含む	
	1	10YR3/1 黄褐色粘土	あり	あり	にじり・黄褐色シルトをブロック状に含む	
	2	10YR3/2 黄褐色粘土	あり	あり	灰黄褐色砂をリニア状に含む	
	3	7.5YR3/2 灰黄粘土	あり	あり		
SD3	1	黄褐色 (10YR5/1) 粘土質シルトに多い黄褐色 (10YR6/4) 砂のミナリ泥層	あり	あり		
	1	7.5YR4/2 黄褐色粘土質シルト	あり	あり	にじり・黄褐色シルトをブロック状に含む	
	1	10YR4/2 灰褐色粘土質シルト	あり	あり	にじり・黄褐色シルトをブロック状に含む	
	2	10YR3/1 灰褐色粘土質シルト	あり	あり	にじり・黄褐色シルトをブロック状に含む	
SD5	3	10YR3/2 黄褐色粘土	あり	あり		
	4	7.5YR4/2 灰褐色粘土質シルト	あり	あり	黄褐色粘土質シルトをブロック状に含む	
	5	7.5YR4/2 灰褐色粘土質シルト	あり	あり	黄褐色粘土質シルトをブロック状に含む	
	6	10YR3/2 黄褐色粘土質シルト	あり	あり	黄褐色粘土質シルトをブロック状に含む	
	7	10YR3/2 黄褐色粘土質シルト	あり	あり	黄褐色粘土質シルトをブロック状に含む	
	8	10YR3/2 黄褐色粘土質シルト	あり	あり	黄褐色粘土質シルトをブロック状に含む	
	9	10YR3/2 黄褐色粘土質シルト	あり	あり	黄褐色粘土質シルトをブロック状に含む	
	10	10YR3/2 黄褐色粘土質シルト	あり	あり	黄褐色粘土質シルトをブロック状に含む	
	11	10YR3/2 黄褐色粘土質シルト	あり	あり	黄褐色粘土質シルトをブロック状に含む	
	SD7	1	10YR4/4 灰褐色粘土	あり	あり	腐化、黄褐色シルトをブロック状に含む
		2	緑灰色黄砂と黄褐色の互層。3層内層には砂粒がある。石や植物の残骸、骨片、しじり、	あり	あり	
3		10YR4/2 灰褐色粘土質シルト	あり	あり		
4		にじり・黄褐色シルトをブロック状に含む	あり	あり		
5		にじり・黄褐色シルトをブロック状に含む	あり	あり		
6		10YR3/2 黄褐色粘土質シルト	あり	あり	黄褐色粘土質シルトをブロック状に含む	
7		10YR3/2 黄褐色粘土質シルト	あり	あり	黄褐色粘土質シルトをブロック状に含む	
8		黄褐色粘土質シルトに多い黄褐色粘土質シルトの互層。黄褐色粘土質シルトをブロック状に含む。	あり	あり		
9		にじり・黄褐色シルトをブロック状に含む	あり	あり		
SD8	1	10YR5/2 黄褐色粘土質シルト	あり	あり	にじり・黄褐色砂が混入する	
	1	10YR3/2 黄褐色粘土質シルト	あり	あり	黄褐色・黄褐色シルトのブロックを含む	
P1	2	黄褐色粘土質シルトをブロック状に含む	あり	あり		
	1	10YR3/2 黄褐色粘土質シルト	あり	あり	黄褐色粘土質シルトをブロック状に含む	
SK1	1	10YR3/2 灰褐色粘土質シルト	あり	あり	砂・灰を混入する	
	2	10YR6/2 黄褐色粘土	あり	なし	黄褐色シルトと黄褐色粘土質シルトをブロック状に含む	

SD3 溝跡

調査区南東隅で部分的に検出された南北方向の溝跡である。SD1、2 溝跡と重複し、両者より新しい。検出長は約 2.2 m であるが、さらに調査区外の南北に延びる。上端幅 1.4 m 以上、下端幅 1.0 m 以上で、深さは約 30 cm である。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がり、断面形は浅い逆台形を呈する。堆積土は黒褐色粘土質シルトの単層である。遺物が出土していないため、時期は不明である。

SD4 溝跡

調査区南西隅で一部分が検出された南北方向の溝跡である。SD8 溝跡と重複し、これより新しい。検出長は約 2.2 m である。大部分が調査区外となることから規模は不明であるが、調査区内の検出幅は 0.4 m で、深さは 20 cm である。堆積土は黒褐色粘土質シルトの単層である。遺物が出土していないため、時期は不明である。

(2) IV層上面遺構

IV層上面から掘り込まれていることが確認できた遺構は、溝跡 1 条 (SD8 溝跡) である。

1) 溝跡

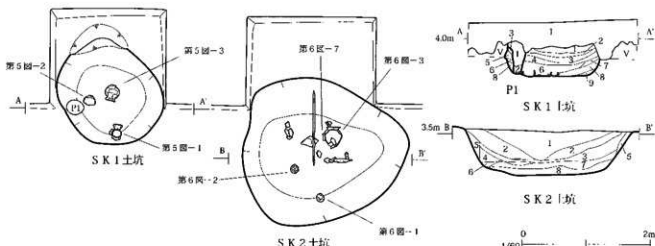
SD8 溝跡

調査区南東隅で検出された東西方向の溝跡である。SD4 溝跡と重複し、これより古い。検出長は約 1.0 m であるが、さらに調査区外の東西に延びる。上端幅 0.6 ~ 0.9 m、下端幅 0.4 ~ 0.7 m の規模で、深さは約 20 cm である。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。断面形は皿形を呈する。堆積土は灰黄褐色粘土質シルトの単層である。

遺物は、砥石 (第 6 図 7) が 1 点出土している。シルト岩裂とみられ、砥面は 3 面に観察される。

(3) V層上面遺構

V層上面から掘り込まれていることが確認できた遺構は、土坑 2 基 (SK1.2 土坑)、溝跡 3 条 (SD2.5、7 溝跡)、ピット 2 基、性格不明遺構 1 基 (SX1 性格不明遺構) である。



第4図 SK1, 2土坑 平面・断面図

1) 土坑

SK1土坑

調査区中央部で検出された。P1と重複し、これより古い。平面形は円形に近く、断面形はU字形を呈する。長軸約170cm、短軸約150cmの規模で、検出面からの深さは最大で約50cmである。堆積上は9層に分層された。1層は黒褐色粘土質シルトの自然堆積土である。2～8層は人為的な堆積土と判断され、黒褐色粘土質シルトに基本層V層もしくはVI層に由来する黄褐色のブロックを含んでいる。底面付近の9層は自然堆積土である。遺構内堆積土や遺物の出土状況から、上坑の底面に土師器の壺を据え置き、もしくは廃棄した後埋め戻され、埋め戻しが完了した上面に土師器の甕や甗などが据え置かれたか、あるいは廃棄されたものと考えられる。

遺物は、1層から十師器の甕（第5図4・5）や甗、塊状のミニチュア土器小片（写真図版2・5）、6層から土師器甕（第5図1～3）や土師器甕が出土している。

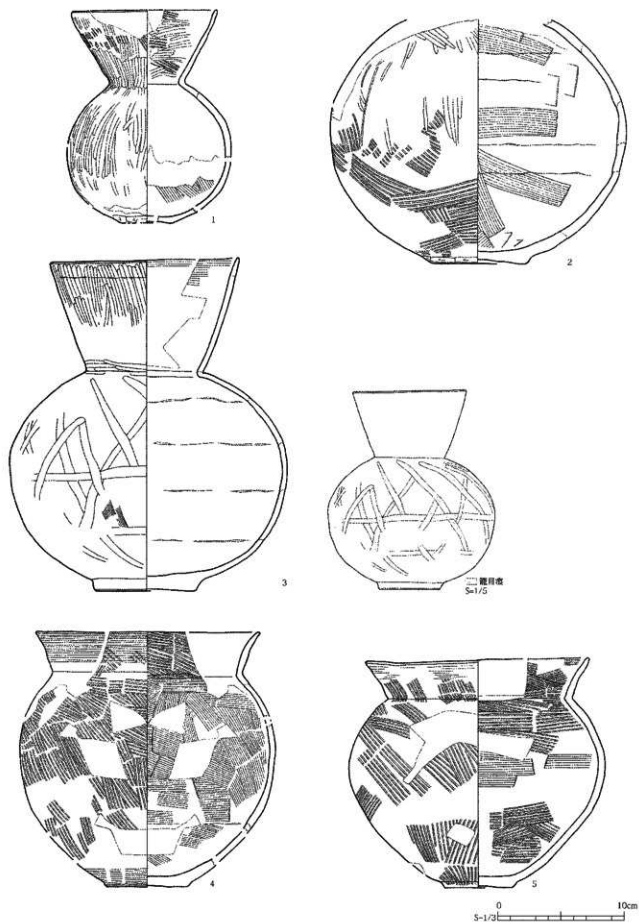
第5図1は土師器甕で、球形の体部に、内弯気味に外傾する口縁部をもつ。外面は縦方向のヘラミガキで仕上げられているが、体部と口縁部の一部でヘラミガキ前のハケメが観察できる。

第5図2は土師器甕で、球形の体部をもつが、頸部より上を欠失している。外面はハケメの後ヘラミガキを施すが、やや粗いヘラミガキのため体部下半に施された前調整のハケメが明瞭に観察できる。内面に施されたヘラナデは弱く、全体にやや凹凸がある。

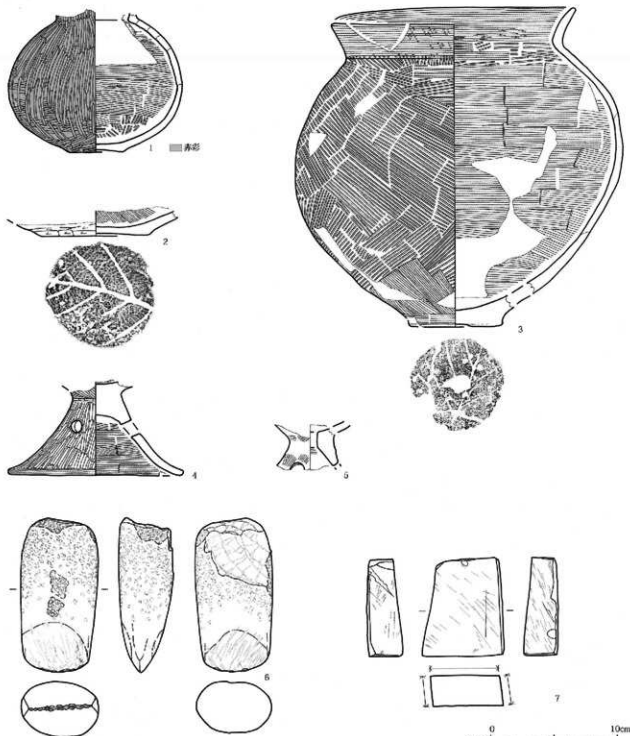
第5図3は土師器甕で、形態は第5図1と類似するものの、より大型で、底部に高さがある点で異なる。外面の調整は摩擦のため判別しにくい、口縁部には縦方向のヘラミガキが観察できる。また体部外面には腫目痕が観察され、類似として、仙台市戸ノ内遺跡出土の二重口縁甕が挙げられる（仙台市教委1984）。

第5図4は土師器甕で、口縁部外面の中段が段状に浅く窪んでいる。体部外面は粗いハケメの後で、目が細かく幅が狭いハケメが施されている。

第5図5は土師器甕で、口縁部外面の中段が段状に浅く窪んでいる。外面の口縁部から体部にかけてはハケメが



第5図 出土遺物1



発掘 層位	遺物 番号	遺物 名称	種類	形状	寸法 (cm)		特徴	分析		年代		
					長さ	口径		内面	外面			
5-1	C1	SK1	土製陶器	皿	17.1	11.3	4.0	口縁部：條漆；ハケメ→ヘラズリ	底面：ヘラズリ	口内面：ハケメ→ヘラズリ	外面：ヘラズリ	2-1
5-2	C2	SK1	土製陶器	椀	19.0	—	7.5	内面：ハケメ→ヘラズリ	外面：ヘラズリ	底面：ヘラズリ	—	2-2
5-3	C3	SK1	土製陶器	椀	26.0	15.0	7.5	口縁部：ヘラズリ	外面：ナシ	口内面：ヘラズリ	—	2-5
5-4	C5	SK1	土製陶器	皿	20.2	17.5	6.5	口縁部：ハケメ→ヘラズリ	外面：ハケメ	口内面：ハケメ	底面：ヘラズリ	2-3
5-5	C7	SK1	土製陶器	皿	16.2	17.8	5.3	口縁部：ヘラズリ→ハケメ	外面：ハケメ	口内面：ハケメ→ヘラズリ	底面：ヘラズリ	2-6
—	C9	SK1	土製陶器	皿	—	—	15.0	内面：ナシ	外面：ナシ	口内面：ハケメ→ヘラズリ	底面：ヘラズリ	2-4
6-1	C10	SK2	土製陶器	皿	11.9	—	4.2	内面：ヘラズリ→ヘラズリ	外面：ヘラズリ	口内面：ヘラズリ	底面：ナシ	2-7
6-2	C13	SK2	土製陶器	皿	22.0	—	8.4	内面：ヘラズリ	外面：木炭灰	口内面：ヘラズリ	底面：ヘラズリ	2-8
6-3	C18	SK2	土製陶器	皿	25.4	18.3	7.5	口縁部：ハケメ→ヘラズリ	外面：ハケメ、赤土灰、黒土	口内面：ハケメ→ヘラズリ	底面：ヘラズリ	2-11
6-4	C10	SK2	土製陶器	皿	27.6	—	13.0	内面：ヘラズリ	外面：ヘラズリ	口内面：ヘラズリ	底面：ヘラズリ	2-9
6-5	C20	SK2	土製陶器	皿	23.6	—	—	口縁部：外縁：ヘラズリ 内縁：外縁：ハケメ(赤土)	外面：ナシ	口内面：ヘラズリ	底面：ヘラズリ	2-10
6-6	R1	SK2	土製陶器	鉢	12.1	6.1	4.3	内面：ヘラズリ→ヘラズリ	外面：ヘラズリ	口内面：ヘラズリ	底面：ヘラズリ	2-12
6-7	R2	SK2	土製陶器	鉢	7.8	6.5	2.7	内面：ヘラズリ	外面：ヘラズリ	口内面：ヘラズリ	底面：ヘラズリ	2-13

第6図 出土遺物2

施されるが、頸部から口縁部にかけては体部より目が細かく幅の狭いハケメが施される。なお、第5図5と第5図4は同程度の口径をもつて共通するが、前者の体部形状は後者に比べて扁平である。

本土坑から出土した土師器は、古墳時代前期の塩釜式土器と考えられる。

SK2土坑

調査区中央部の、SK1土坑から約1.5m東の位置で検出された。平面形はやや東西に長い不整形円で、断面形は逆台形を呈する。長軸約260cm、短軸約235cmの規模で、検出面からの深さは最大で約90cmである。堆積土は8層に分層された。1層は黒褐色粘土質シルトの自然堆積層で、少量の土師器破片を含む。2、3層は黄褐色砂質シルトと黒褐色粘土質シルトが混在しており、人為的な堆積土と考えられる。4、5層は土坑壁面の一部で確認された。底面付近に堆積した6～8層は水成の自然堆積土と判断される。4、5層の堆積状況、堆積土上層(2、3層)と下層(6～8層)の成因の違い等から、6、7層の上方に何らかの施設が存在していた可能性も考えられる。また、2層から土師器や石器とともに、一部炭化した材や自然木がまとまって出土しているが、有意な配列を示していないことから、施設構成材とは考え難い。

遺物は、1層から土師器の甕や壺、高坏(第6図4)、器台(第6図5)、2層から土師器の甕(第6図2、3)や壺(第6図1)、磨製石斧(第6図6)、一部炭化した材、自然木、8層から土師器の壺、土師の破片が出土している。なお、8層で出土した土師器壺は、複合口縁の破片である。

第6図1は土師器壺で、頸部から上を欠失している。扁平な球形の体部をもつ。外面には横方向のヘラナデの後に縦・横方向のヘラミガキ、底部にはヘラケズリが施される。わずかに赤彩の痕跡が残る。内面はハケメ後にヘラナデが施され、底部付近には放射状にハケメが残る。粘土紐の痕跡が部分的に残り、頸部付近には折圧痕がみられる。

第6図2は土師器甕の底部で、底面に木葉痕がみられる。底部は粗いケズリを施すことで整形されている。

第6図3は土師器甕で、やや丸みのある体部に、短く外反する口縁部をもつ。底部は輪台技法で形成され、底面には木葉痕がある。体部外面に施される斜方向のハケメは、上半と下半で方向を変えている。また体部外面中位より上方にコゲが付着している。

第6図4は土師器高坏の脚部である。円錐台状で裾は外反気味に開く。外面には縦方向の丁寧なヘラミガキが施され、3か所に円窓が穿たれる。

第6図5は土師器器台の脚部上半である。受け部との間に直径約1cmの貫通孔をもち、円窓は3か所に穿たれる。内外面ともに摩滅が著しい。

第6図6は太型蛤刃石斧である。基部側を欠失しており、折れ面の縁辺に敲打痕が観察されることから、折損後に再利用されたものと考えられる。刃部周辺には入念に研磨が施されているものの、中央より基部側の研磨は弱く、成形時の敲打痕が明瞭に確認できる。用いられている石材は斑レイ岩である。なお、この石斧は土師器甕(第6図3)が上に重なった状態で出土している。

本土坑出土の土師器は、古墳時代前期の塩釜式土器と考えられる。太型蛤刃石斧(第6図6)は、技術的・形態的特徴、用いられている石材等から弥生時代中期のものと考えられる。折損後の敲打具への転用が、古墳時代に行われたことも想定されるが、確証はない。その他の土師器や一部炭化した材、自然木などとの関連性も不明である。

2) 溝跡

SD2溝跡

調査区東端で検出された東西方向の溝跡である。SD3溝跡と重複し、これより古い。検出長は約1.6mであるが、さらに調査区外の東西に延びる。上端幅0.9～1.3m、下端幅0.3～0.8mの規模で、深さは約40cmである。底面はほぼ平坦で、壁はやや急に立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。堆積土は4層に分層され、黒褐色粘土質シルトとにぶい黄褐色砂を主体とする。

遺物は器種不明の磨滅した土師器片が1点出土した。時期は不明である。

SD5 溝跡

調査区西半部で検出された東西方向の溝跡である。SD1、7 溝跡と重複し、SD1 溝跡より古く、SD7 溝跡より新しい。本溝跡は、西側の底面に幅約 40cm の橋状の高まりがあり、そこを境に東側が浅く、西側が深い。底面標高の違いで、西側と東側を別遺構として調査していたが、野外調査終了後の検討により同一の溝跡と判断した。なお西側の深い範囲は安全管理上の問題から遺構底面までの掘り下げは行っていない。

検出長は約 8.0 m で、幅は調査区西側で 2.1 m、深さは東側で最大 0.4 m、西側で 1.0 m 以上である。東側の断面形は逆台形で、壁は底面から緩やかに立ち上がる。西側の断面形は壁が底面から急角度で立ち上がる V 字形である。堆積土は、東側で 3 層、西側で 8 層確認された。黒褐色粘土質シルトを主体とする。いずれも自然堆積と考えられる。遺物は磨滅して器種不明の上師器片が数点、平瓦（布目瓦）の破片が 1 点出土した。時期は不明である。

SD7 溝跡

調査区西端で検出された東西方向の溝跡である。SD5 溝跡と重複し、これより古い。検出長は約 1.2 m であるが、さらに調査区外の東西に延びる。上端幅 0.7～0.9 m、下端幅 0.4～0.5 m の規模で、深さは 120cm である。底面はほぼ平坦で、壁はやや急に立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。堆積土は 9 層に分層されるが、いずれも自然堆積層である。遺物は出土していない。時期は不明である。

3) ビット

ビットは 2 基確認された。P1 は SK1 土坑と重複し、これより新しい。規模は、P1 が直径約 30cm、深さ約 50cm、P2 が直径約 35cm、深さ約 50cm である。いずれの平面形も円形で、柱痕跡は確認されなかった。いずれも他の遺構と有意な配列を示さない。遺物は出土していない。

4) 性格不明遺構

SX1 性格不明遺構

調査区東側の南壁で確認したのみで、平面的に検出できなかったため、性格不明遺構として記述する。SD3 溝跡と重複し、これより古い。堆積土は、1 層が黒褐色粘土質シルト、2 層が黒褐色シルトと黄褐色砂のラミナ堆積である。堆積土の状況から、溝跡の可能性が考えられる。遺物は出土していない。時期は不明である。

6 まとめ

- ① 今回の調査では、古墳時代前期の土坑 2 基、時期不明の溝跡 7 条、性格不明遺構 1 基、ビット 2 基が検出された。特に 2 基の土坑からは土師器等がまとめて出土している。
- ② SK1 土坑は、土師器壺を底面に据え置いた、あるいは廃棄した後で土坑を埋め戻し、上面に土師器の蓋や帯などが据え置かれたか廃棄されたと考えられる。出土した土師器は、古墳時代前期の壺釜式土器と考えられる。
- ③ SK2 土坑は、底面付近の自然堆積層の上に何らかの施設が設けられ、土器や石器、一部炭化した材・自然木とともに埋め戻された可能性がある。出土した土師器は、古墳時代前期の壺釜式土器と考えられる。
- ④ 溝跡は 7 条が検出された。出土した遺物がごく少量で掘り込まれた時期は不明であるが、それぞれの重複関係や掘り込まれた層位から少なくとも 3 時期に分けることができる。
- ⑤ 荒井畑中東遺跡の立地する自然堤防上では、中在家南遺跡、荒井畑中遺跡、高屋敷遺跡、押上遺跡でも古墳時代前期の遺構や遺物が見つかっており、東方の後背湿地に立地する省形遺跡では、この時期の水口跡が広く検出されていることから、本遺跡を含む一帯に古墳時代前期の集落が存在していたと考えられる。

参考文献

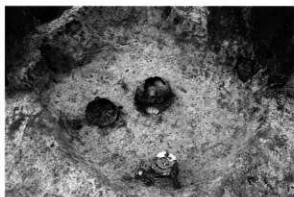
- 仙台市教育委員会 1984 『戸ノ内遺跡』仙台市文化財調査報告書第 70 集
 仙台市教育委員会 1996 『中在家南遺跡他』仙台市文化財調査報告書第 213 集
 仙台市教育委員会 2010 『省形遺跡』仙台市文化財調査報告書第 363 集



1 SK1, 2土坑検出状況 (西から)



2 SK1, 2土坑完掘状況 (南西から)



3 SK1土坑 遺物出土状況 (南から)



4 SK1土坑 断面 (南から)



5 SK 2土坑 断面 (南から)



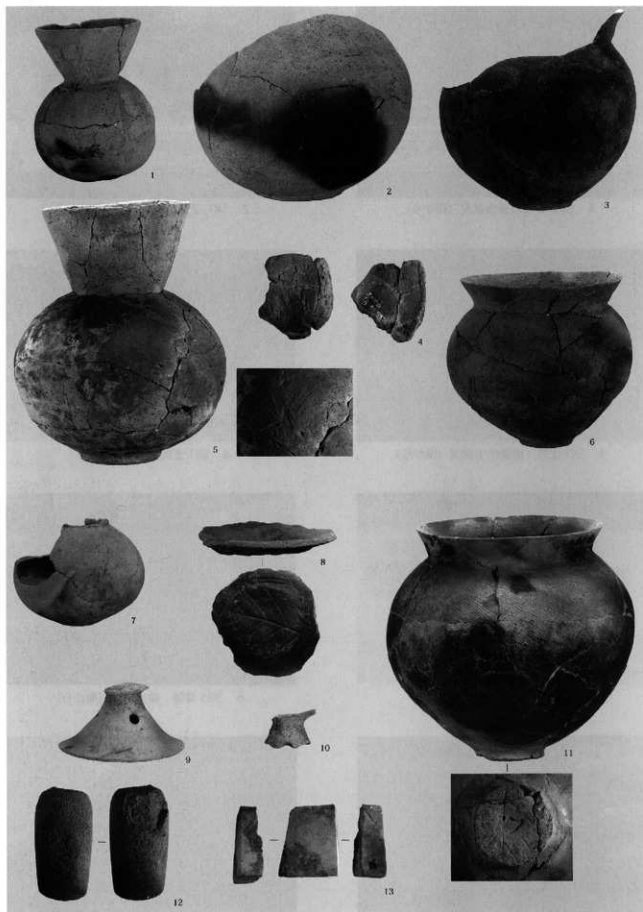
6 SD5溝跡 検出状況 (東から)



7 SD5溝跡 完掘状況 (東から)



8 調査区西側 遺構完掘状況 (南から)



写真図版 2

VI 大野田官衙遺跡第2次発掘調査報告

1 調査要項

遺跡名	大野田官衙遺跡（宮城県遺跡登録番号 01566）
調査地点	仙台市太白区大野田字竹松 23（16B-6L）
調査期間	平成 22 年 3 月 15 日～ 29 日
調査対象面積	65.0㎡
調査面積	37.8㎡
調査原因	個人住宅建築工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担当職員	主事 廣瀬真理子 文化財教諭 吉野 信、菊地貴博 臨時職員 千葉恭彦

2 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成 22 年 2 月 12 日付で申請者より提出された、個人住宅建築工事に伴う「埋藏文化財発掘の届出について」に対して、文化財保護法第 93 条（H21 教生文第 152-192 号で回答）に基づき実施した。調査は平成 22 年 3 月 15 日に着手し、遺構が検出されたため、引き続き本発掘調査を実施した。調査区は、住宅建築範囲内に南北 3m × 東西 6m のトレンチを設定した。重機により、盛土および I 層を除去後、直下の IV 層を人力により除去しながら、V 層上面まで掘り下げ、遺構検出作業を行った。竪穴住居跡の一部が検出されたことから、その規模等を明らかにするため、建物建築範囲内において調査区を拡張した。

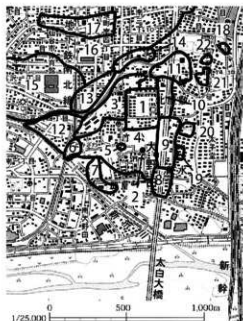
適宜、平面・断面図（S-1/20,1/50）を製作し、デジタルカメラを用いて記録写真を撮影した。

なお、当遺跡周辺では、現在「富沢駅周辺土地区画整理事業」に伴う発掘調査が進んでおり、その調査成果と対応させ、基本層の層位名を付した。本調査区では、II 層および III 層に対応する層は確認されなかった。

3 遺跡の位置と環境

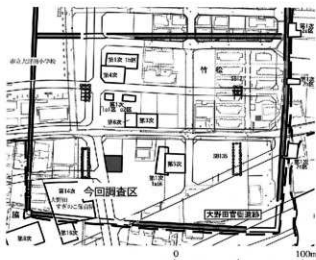
大野田官衙遺跡は、仙台市の南東部、仙台市営地下鉄南北線富沢駅から北東約 0.4km に位置する。名取川左岸の郡山低地にあり、名取川とその支流により形成された自然堤防と後背湿地に立地する。

番号	遺跡名	類別	遺構	時代
1	大野田官衙遺跡	官衙跡	自然発露	古代
2	丸形塚古墳	前方後円墳	自然発露	古墳中期
3	六反田遺跡	集落跡	自然発露	縄文～古代、室戸
4	大野田古墳群	円墳	自然発露	古墳
5	谷上村古墳	円墳	自然発露	古墳
6	伊豆山遺跡	集落跡	自然発露	縄文・古墳・古代
7	伊豆山古遺跡	集落跡、石段跡	自然発露	古墳・古代
8	福地集落遺跡	集落跡、竪穴跡	自然発露	古代、中世
9	七ノ井遺跡	集落跡、竪穴跡	自然発露	縄文～古代、中世
10	大野田遺跡	古墳、集落跡	自然発露	縄文～古代
11	伊豆山遺跡	集落跡、石段跡	自然発露	古代、古代～室戸
12	下ノ内遺跡	集落跡	自然発露	縄文～古代
13	ノノ内遺跡	集落跡、石段跡	自然発露	縄文、古墳、古代、中世
14	茨木遺跡	集落跡	自然発露	古墳、古代
15	山田遺跡	集落跡、石段跡	自然発露	縄文、古墳、古代、中世
16	山田遺跡	古墳跡、石段跡	後背湿地	縄文～古代、縄文、古墳、古代、中世、室戸
17	新明遺跡	集落跡、石段跡	自然発露、後背湿地	縄文、古墳、古墳、平安、室戸
18	長瀬八丁村遺跡	集落跡	自然発露	古代
19	長瀬新大遺跡	集落跡	自然発露	古代
20	上郷集落遺跡	集落跡	自然発露	古代
21	新田遺跡	集落跡	自然発露	古代
22	山崎前遺跡	集落跡	自然発露	古代



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

大野田官衙遺跡周辺は、縄文時代から中世にかけての複合遺跡として知られる大野田古墳群、六反田遺跡など、遺跡が密集する地域である。これまで「富沢駅周辺土地区画整理事業」に伴い発掘調査が進められてきた。その調査の中で、官衙跡とみられる、定期的に配置され、規格性のある大型建物跡とそれを囲む溝跡などが発見された。仙台市教育委員会は、官衙跡としての遺構の全容を把握するため、遺構配置を想定した調査を平成20年度から実施し、平成21年7月に大野田古墳群、六反田遺跡、袋前遺跡のうち、官衙関連の溝跡に囲まれた部分を大野田官衙遺跡として登録している。



第2図 調査区的位置

4 基本層序

- Ia層：暗緑灰色（5G4/1）シルト。旧水田耕作土である。厚さ約10～15cmである。
- Ib層：黒褐色（10YR2/2）粘土質シルト。旧水田層の床土と見られる。厚さ約10～20cmである。
- IV層：暗褐色（10YR3/4）粘土質シルト。小溝状遺構群、溝跡等の検出面である。
- V層：褐色（10YR4/4）粘土質シルト。S I 11 竪穴住居跡の検出面である。
- VI層：暗褐色（10YR3/4）粘土質シルト。
- VII層：褐色（10YR4/6）砂質シルト。



第3図 調査区配置図

5 発見遺構と出土遺物

竪穴住居跡1軒、溝跡8条、土坑2基、ピット3基を検出した。今回の調査で検出した遺構は、V層上面まで掘り下げ検出したが、壁断面の観察などにより、溝跡、土坑、ピットはIV層上面からの掘り込みであることが確認された。

(1) IV層上面検出遺構

1) 小溝状遺構群

1群検出した。南北方向の溝跡3条（SD1～3溝跡）からなる。SD4～8溝跡、SK10土坑、P3と重複関係があり、これらよりも新しい。検出長は約2.9～5.1mである。規模は上端幅18～30cm、下端幅10～22cm、深さ7～17cmを測り、断面形は浅い皿状を呈する。各溝の間隔は、心々距離で2.2m前後である。堆積土は単層で、V層を起源とするシルトの粒やブロックを多く含む褐色の粘土質シルトである。遺物は出土していない。

2) 溝跡

5条検出した。SD4～7溝跡は東西方向、SD8溝跡は南北方向の溝跡で、それぞれ小溝状遺構群の一部である可能性も考えられるが、調査区の制約上、詳細は不明である。各溝跡の規模や堆積土については、第4図の表を参照されたい。遺物は出土していない。

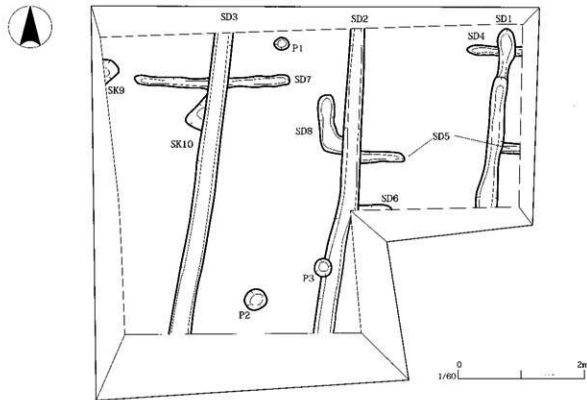
3) 土坑

2基検出した。

SK9土坑は調査区西端で、SK10土坑は調査区中央で検出した土坑である。各土坑の規模や堆積土については、第4図の表を参照されたい。遺物は出土していない。

4) ピット

3基検出したが、柱痕跡等は確認できなかった。遺物は出土していない。



調査・層位	土色・土質	しまり	状態	記入物等	位置			高さ
					幅(長さ)	幅(高さ)	幅(奥行)	
SD1	10YR3/4 暗褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	V層を新瓦に近く少量含む	2.9	18	10	7
SD2	10YR3/4 暗褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	V層を新瓦に近く少量含む	5.1	30	20	11
SD3	10YR3/4 暗褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	V層を新瓦に近く少量含む	5.1	30	22	17
SD4	10YR3/4 暗褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	V層を新瓦-ブロック間に少量含む	0.9	12	8	8
SD5	10YR3/4 暗褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	V層を新瓦-ブロック間に少量含む	2.5	20	15	20
SD6	10YR3/4 暗褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	V層を新瓦-ブロック間に少量含む	0.5	—	—	—
SD7	10YR3/4 暗褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	V層を新瓦-ブロック間に少量含む	2.5	20	14	3
SD8	10YR3/4 暗褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	V層を新瓦-ブロック間に少量含む	1.0	24	18	3
SK9	1 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	V層をブロック間に近く含む	—	(50)	(50)	36
	2 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	V層をブロック間に近く含む	—	(50)	(50)	19
SK10	10YR3/4 暗褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	V層を新瓦に近く少量含む	—	(50)	(50)	15
P1	10YR3/4 暗褐色粘土質シルト	あり	ややあり	V層を新瓦に近く少量含む	—	34	32	18
P2	10YR3/4 暗褐色粘土質シルト	あり	ややあり	V層を新瓦-ブロック間に少量含む	—	34	32	18
P3	10YR3/4 暗褐色粘土質シルト	あり	ややあり	新瓦を新瓦間に近く少量含む	—	30	30	25

単位: 縦軸はcm、その他:m

第4図 IV層上面 平面・断面図

(2) V層上面検出遺構

1) 竪穴住居跡

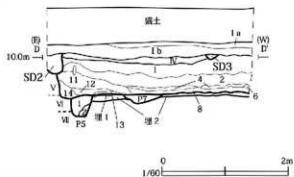
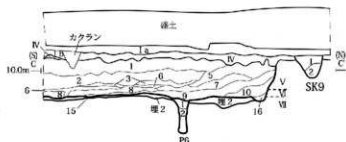
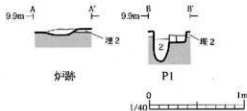
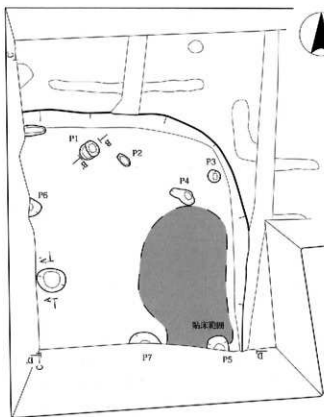
S I 11 竪穴住居跡

調査区西側で検出した。西側および南側が調査区外に延びる。検出規模は、南北3.7m以上、東西3.3m以上である。検出面から床面までの深さは30~40cm程度で、壁は床面からほぼ垂直に立ち上がる。平面形は隅丸方形を呈していると考えられる。

住居内堆積土は、16層に分層され、いずれも自然堆積土である。

床面は、ほぼ平坦である。基本層VII層を起源とする砂質シルトなどを入れ、一部、貼床をしている。

周溝は、住居北辺でごく一部を検出した。上端幅12cm、下端幅8cm、深さ8cmである。断面形は浅いU字形を呈する。堆積土は単層で、黒褐色の砂質シルトである。



遺構・層位	土色・土質	形状	しざり	埋入物等	備考	
I a	SG1/1 暗緑灰色シルト	ややあり	ややあり	均質	日本水層粘土	
I b	10YR2/2 灰黄色粘土質シルト	ややあり	ややあり		日本水層土	
IV	10YR3/4 暗黄色粘土質シルト	ややあり	ややあり		遺構面より込み	
V	10YR4/4 暗赤土質シルト	ややあり	ややあり	斜褐色 (10YR3/4) 粘土質シルトを約2割に若干含む	遺構面より込み	
Ⅷ	10YR3/4 暗赤色粘土質シルト	ややあり	ややあり			
Ⅷ	10YR4/4 暗赤色粘土質シルト	ややあり	ややあり			
S11	1	10YR3/2 灰黄色粘土質シルト	ややあり	ややあり		
	2	10YR4/4 暗黄色粘土質シルト	あり	ややあり	暗褐色 (10YR3/4) 粘土質シルトを約2割に若干含む	
	3	10YR4/6 暗赤粘土質シルト	あり	ややあり		
	4	10YR4/4 暗赤粘土質シルト	あり	ややあり	に赤い塊状物 (10YR3/4) 粘土質シルトを約1割に若干含む	
	5	10YR3/4 暗赤粘土質シルト	あり	ややあり	酸化物を約2割に若干含む	
	6	10YR3/3 暗赤色粘土質シルト	ややあり	ややあり	酸化4割より多い、酸化物を約2割に若干含む	
	7	10YR3/4 暗赤粘土質シルト	ややあり	ややあり	酸化物を約2割に若干含む	
	8	10YR3/4 暗赤粘土質シルト	ややあり	ややあり		包埋内埋土
	9	10YR4/4 暗赤粘土質シルト	あり	ややあり	灰褐色 (10YR5/2) 粘土質シルトを多量含む	
	10	10YR3/4 暗赤粘土質シルト	ややあり	ややあり	酸化物をブロック状に下方に多量含む	
	11	10YR4/4 暗赤粘土質シルト	ややあり	ややあり	2層にわたるが、砂質層あり。	
	12	10YR4/6 暗赤粘土質シルト	ややあり	ややあり		
	13	10YR4/6 暗赤粘土質シルト	ややあり	ややあり		
	14	10YR3/2 暗赤粘土質シルト	あり	ややあり	斜褐色	
	15	10YR2/1 赤色粘土質シルト	ややあり	ややあり	灰褐色	
	18	10YR3/2 暗赤粘土質シルト	ややあり	ややあり		埋土内埋土
	埋1	10YR4/6 暗赤粘土質シルト	ややあり	あり	塊状物をシルトをブロック状に多量含む	埋土
	埋2	10YR4/6 暗赤粘土質シルト	ややあり	ややあり	塊状物をシルトを多量含む。に赤い塊状物 (10YR3/4) 粘土質シルトを若干含む	埋土
P1	1	10YR3/4 暗赤粘土質シルト	あり	ややあり		埋土
	2	10YR3/4 暗赤粘土質シルト	ややあり	ややあり	塊状物をブロック状に少量、酸化物を少量含む	埋土
	P2	10YR3/4 暗赤粘土質シルト	ややあり	ややあり	塊状物を約2割に若干含む	埋土
	P3	10YR4/4 暗赤粘土質シルト	ややあり	ややあり		埋土
P5	P4	10YR4/4 暗赤粘土質シルト	ややあり	ややあり	塊状物をブロック状に多量含む	埋土
	1	10YR3/3 暗赤粘土質シルト	ややあり	ややあり		埋土
P6	2	10YR3/4 暗赤粘土質シルト	ややあり	ややあり	塊状物をブロック状に多量含む	埋土
	1	10YR3/3 暗赤粘土質シルト	あり	ややあり	塊状物を約2割に若干含む	埋土
P7	2	10YR4/4 暗赤粘土質シルト	ややあり	ややあり	塊状物を約2割に若干含む	埋土
	1	10YR3/3 暗赤粘土質シルト	あり	ややあり		埋土
8*	5YR3/4 暗赤粘土質シルト	ややあり	あり	酸化物を約2割に若干含む	埋土内埋土	

第5図 V層上面 平面・断面図

炉跡は1基検出した。規模は長径45cm、短径38cm、深さ10cmである。平面形は不整形を呈し、断面形は浅い皿状である。炭化物をやや多く含む焼土が堆積しており、炉機能時の堆積と考えられる。また、底面で被熱による赤変を確認している。

床面からピットが7基検出された。位置や規模から、主柱穴は確認できなかった。

遺物は、床面から縄文土器片1片や土師器片、住居内堆積土から土師器環、裏の小片がそれぞれ出土している。

6 まとめ

今回の調査では、V層上面で竪穴住居跡1軒、IV層上面で溝跡8条、土坑2基、ピット3基が検出された。

調査区南西に位置する、大野田古墳群第8次調査区、第14次調査区では、古墳時代前期塩釜式期の竪穴住居跡が計5軒検出されており、周辺に同時期の集落が展開していることが推測されている。時期決定資料は出土していないが、今回検出した竪穴住居跡も、同時期の住居跡である可能性が考えられる。

なお、大野田官衙に関する遺構は、検出されなかった。

参考文献

仙台市教育委員会 2009『大野田古墳群—第14次発掘調査報告書—』仙台市文化財調査報告書第339集



1 拡張前遺構検出状況（西から）



2 S111 竪穴住居跡

床面検出状況（西から）

写真図版1

報告書抄録

ふりがな	ほうりょうづかこふん ほか							
書名	法領塚古墳他							
副書名	発掘調査報告書							
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第393集							
編者名	猪狩俊哉 小泉博明 廣瀬真理子 古野 信							
編集機関	仙台市教育委員会							
所在地	〒980-8671 宮城県仙台市青葉区二日町1-1 電話 022-214-8894							
発行年月日	平成23年3月31日							
所在地名	所在地	コード		北緯	東経	調査月日	調査面積	調査内容
		市町村	通称番号					
法領塚古墳 (第2次)	仙台市青葉区・本杉町1番2号地	04100	01007	38°24'43"	140°90'37"	2010.10.12 2010.11.12	504㎡	学校校舎新築
小鶴城跡 (第4次)	仙台市宮城野区新白三丁目37-2、38、44-1、44-3、45-1、45-2	04100	01194	38°27'96"	140°92'92"	2009.07.13 2010.04.23	1,648㎡	宅地造成
開場遺跡	仙台市太白区南土4丁目6.6.10の各一部	04100	01258	38°19'58"	140°86'78"	2010.05.07 2010.05.10	10.2㎡	共同住宅新築
今泉遺跡 (第8次)	仙台市青葉区今泉2丁目61	04100	01235	38°21'11"	140°92'73"	2010.01.27 2010.02.02	30㎡	個人住宅建築
荒井畑中東遺跡	仙台市石巻区荒井字畑中39地	04100	01568	38°14'14"	140°54'35"	2010.05.17 2010.05.21	63.5㎡	診療所建築
大野田官衙遺跡 (第2次)	仙台市太白区人野町字竹松23(169-61)	04100	01566	38°21'56"	140°87'55"	2010.03.15 2010.03.29	37.8㎡	個人住宅建築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
法領塚古墳 (第2次)	円墳	古墳	墳丘・前庭部	土師器・須恵器 鉄製鏡	墳丘の直径が約54mであることが判明し、遺跡範囲の訂正(拡大)を行った。			
小鶴城跡 (第4次)	城跡跡	中世	柱列跡・ 塀・土塀・土垣跡	土師器・弥生土器 中世陶器・銭銭	小鶴城跡の土塀および土塀、堀跡などを調査した。			
開場遺跡	散布地	古墳・古代	土師器	土師器	壁穴住居跡の一部が。			
今泉遺跡 (第8次)	集落跡、城跡跡、包含地	縄文～近世	溝跡・近世墓	竹製器・漆器 土師器	泉内初と見られる竹製煙管が出土した。			
荒井畑中東遺跡	包含地	古墳	溝跡・土坑	土師器・石器 瓦	新たに遺跡登録をした。			
大野田官衙遺跡 (第2次)	官衙跡	古墳・古代	壁穴住居跡・溝跡	土師器・縄文土器				
要 約	法領塚古墳第2次調査では、墳丘の直径が約54mであることが判明し、古墳時代終末期の東北地方最大の円墳であることが明らかになった。墳丘は上段と下段からなる二段築成であることが確定された。また、横穴式石室の前方には、墳頂まで延びる前庭部が接続することも判明した。							
	小鶴城跡第4次調査では、小鶴城跡に関連すると見られる掘立柱建物跡、竪穴、火葬墓などを検出した。							
	開場遺跡の調査では、性格不明遺構1基を検出した。遺構内から出土した土師器から、古墳時代後期の遺構と考えられる。壁穴住居跡の可能性がある。							
	今泉遺跡第8次調査では、溝跡3条、近世墓4基を検出した。そのうち、SD5溝跡は、その規模から今泉城に関連する溝跡と推定される。また、SK2近世墓から、竹製煙管が出土した。竹製煙管の遺跡からの出土は黒古初である。							
荒井畑中東遺跡の調査では、溝跡7条、土坑2基、性格不明遺構、ピット2基を検出した。このうち、土坑からは、古墳時代前期滑石式土師器の土師器がまとまって出土した。今後の調査を受け、新たに遺跡登録した。								
人野口官衙遺跡第2次調査では、壁穴住居跡1軒、溝跡8条、土坑2基、ピット3基を検出した。百何に属する遺構は検出されなかった。壁穴住居跡は、古墳時代前期の時期と推定される。								

仙台市文化財調査報告書第393集

法領塚古墳 他 発掘調査報告書

2011年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区二日町1-1
文化財課 TEL 022(214)8894

印刷 株式会社ホクトコーポレーション

仙台市青葉区上里字黒切1-13
TEL 022(391)5661

